

新しい家庭科

自立した男と女を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

ウイ

女たちの教育改革提言



1987
夏 増刊号

子どもたちが 笑った



半田たつ子

たとえていうならば
美しさに やさしさに 敏い心で
ゆったりと 子を育てたい
美しさを やさしさを とともにして
おつみ合って 人とくらしたい
そんな ささやかな願いさえ
なぜ かなえられないのか

親の一念 ただそれだけで
学歴社会 / 競争原理 / 管理 / 体罰 / に挑んだ私たち
手品師の術を持たずに
ひらひらと この壁を舞い上がることができるのか
緑の葉からしたたる一滴一滴が
ついには石を穿つと聞けけれど
それは めくるめく真昼の夢なのか

子どもたちが 笑った
白い歯をみせて 笑った
知らなかったよ
母さんたちも 同じ夢見てたなんて……



「女性民教審の集い」
 '86年4月4日 於銀座ヤマハホール

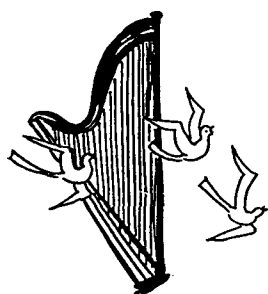


「女性民教審の集い」
 '87年6月13日 於銀座ヤマハホール



新しい家庭科—We
'87年夏増刊号

わたちの教育改革提言



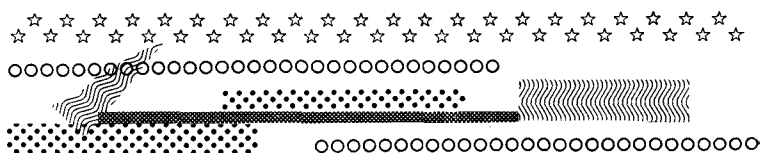
私たちはいま

日本の歴史ではじめて

「女の目で見

わたちの手で作った教育改革」を

提言する



★子どもたちが笑った.....半田たつ子

I 私は提言する

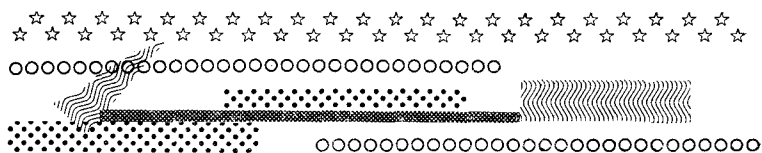
いまを生きるおとなとして.....	俵 萌子	4
人権としての教育を.....	渥美 雅子	9
学校信仰をつぶそう.....	奥地 圭子	14
子どもの力を信じて.....	青木 悦	18

II 私たちの教育改革提言

女性民教審のおいたち.....	田中喜美子	20
〈教育理念〉は子どもたちが創る.....	永畑 道子	22
教師が変わる教育改革.....	駒野 陽子	25
私たちの高校改革提言.....	原田瑠美子	30
私たちの大学改革提言.....	小沢 牧子	35

III 提言にこめた私の願い

それはシミュレーションだったのか.....	平田 圭子	40
母親と先生が一緒につくるもの.....	藤村 美津	43
小学校教師として.....	野沢美智子	46
小学校教師として.....	大原良知奈	48
子どもらを人生に疲れさせないで.....	仲野 暢子	51
高校教師として.....	樋浦 敬子	54



Ⅳ 臨教審を批判する

もしも臨財審を開いたら……………	樋口 恵子	57
その家庭観を撃つ……………	半田たつ子	61
「障害」ある子もない子とともに……………	梅村 浄	64
軍隊からのもっとも遠い学校……………		
それが「国際化」……………	大沢 周子	67

Ⅴ 各国の教育に学ぶ

西ドイツで教育を考える……………	暉峻 淑子	70
スウェーデンの高等教育……………	ピヤネル・多美子	75
私が受けたアメリカの教育……………	俵 協子	80

Ⅵ 活動の日々をふり返る

〈事務局による座談会〉	司会・半田たつ子	
東 和子・上田智子・佐尾和子・佐野春江		84
高橋雅子・早川裕子・間瀬中子・松本享子		
〈女性による民間教育審議会の活動と審議経過〉……………		108

Ⅶ 女性による民間教育審議会の最終教育改革提言

教育改革・私たちの視点……………		97
〈ハイライト〉女性民教審、全教育改革提言(抄)……………		100

セピア色の古い写真のように、私の頭の中に焼きついている情景がある。

それは昭和二十四年ごろのことで、季節は忘れている。場所は大阪・高槻の小さな借家の縁側。昭和二十年六月七日の空襲で、大阪の家を焼かれてしまった私たちの家族は、その家に仮住まいをしていた。私は十八歳。母は三十八歳。その縁側で、突然私は、母に向かって叫んだ。

「何よ。お母さんは、口を開けば、

「私は戦争には反対だったのよ」という。そんなに反対だったのなら、なぜ体を張ってでも反対してくれなかったのよ。私は、聞きたくない！ やりもしなかった人の言葉なんて！」

母は、まっすぐ私に視線を刺し、ほんの短い空白の秒のあと、私よりも大きな声で叫んだ。

「何をいうんですか。私たち女には、選挙権も無かったんだ。集会の権利も、言論の自由も無かったんだ。何が出来る？

私たち女に、何が出来たんだ！」

母の形相は憎悪と怒りの炎に包まれていた。

何度でも、何度でも、私はその場面を思い出す。そして、いつも、いつも、心に問い続けて生きている。

（私が、立たねばならぬのは、いつか。どんな時なのか）
幸か不幸か、娘の私は、母の時代と違って、選挙権を貰った。集会の自由も、言論の自由も手にしている。その時代に、もし日本が間違ひそうになつたら、そして、それが重大なことだったら、私には、小なりといえど責任がある。逃がれようもない責任がある。それによつて、日本が戦争を選択しそうになつた時と、言論の自由が無くなりそうな時と、そして……子どもたちにとり返しのつかぬ教育をしそうになつた時と……

俵 萌子

（女性による民間教育審議会世話人代表）

いまを生きるおとなとして

★私は提言する★

る。それはたぶん、日本が戦争を選択しそうになつた時と、言論の自由が無くなりそうな時と、そして……子どもたちにとり返しのつかぬ教育をしそうになつた時と……
ああ、出来るだけ、そんな時が来てほしくない。私はなるべく「立ち上がり」たくない人間なのだ。私には私の、小さな生活の責任がある。仕事をしてお金を稼がなくてはならない。子どもたちを一人前にしなくてはならない。老後のこ

とも考えなくてはならない。たのしみだつて欲しい。暇だつてほしい。氣に入つた洋服を着て、遊びに行きたい。反体制になんかなりたくない。権力とうまく折り合つて、それなりの地位や名譽やお金を投げ与えてもらえたら楽チンだ。ましてや牢屋なんかに行きたくない。

恥ずかしいけれど、私は臆病な人間であり、平凡な欲望を持つている人間である。その私が、とうとう「立ち上がらなければならぬ時」を迎えてしまつた。何たることだろう。

そうしないと、私は、かならず、娘や孫娘から、ある日、ハッタと睨みつけられて

「何よ。お母さんは、口を開けば、私は受験競争には反対だつたのよ」という。そんなに反対だつたら、なぜ体を張つても臨教審に反対してくれなかつたのよ。私は、聞きたくない！ やりもしなかつた人の言葉なんて！」

といわれる。かならず、いわれる。と私は思った。私は、他人からそういわれても、そう応えないダメ人間だけど、いちばん愛した者からそういわれるのだけはいやだ。それだけは辛いのだつた。

☆ ☆ ☆

たぶん、同じような思いを持つたのだろう。いや、ほかの人は、もっと立派で勇氣のある女性たちなのかも知れない。とにかく、その人たちと、私は「女性による民間教育審議

会」をやることになった。

それは、中曽根首相が作つた臨教審が、これ以上「子どもたちを苦しめる教育改革」をやつたら困る——と思つている人たちだつた。そんなことをされたら、今後また四十年間、子どもたちは苦しめられる。教育大改革なんてものは、小さいさいあるものではないのだから、権力者が「やる」といつた機会に「私たちはこうしたい」といわなければ、またまた四十年間、私たちは「いう機会」を失つてしまう。もちろん、私たちだつて、その機会以外にも、いうことは出来るし、小さな改革なら出来ないことはない。でも、国をあげてやる改革についていうなら「いま」であつた。四十年後、私たちの半分は、死んで、もうこの世にはいないだろうから。はじめは、男の人も仲間にはいつてもらおうと思つた。臨教審は男性の数が多すぎるから、臨教審の逆の「黒三点」がいいと思つた。でないと、女の声と男の声が、バランスよく反映しないからだ。男の人も、いまを生きるおとなとして、きつと、臨教審の動向を心配しているだろう。いや、男の人は、女の私たちよりもつと心配しているのかも知れない。二十二人もの男が、中曽根さんの臨教審の委員を引き受けたところを見ると……。こちら民教審は、報酬と勲章こそ出せないけれど（おかみの審議会の委員をいくつかやると、死ぬころ勲章が貰える）、こちらは自由にモノがいえる。あちらは、

中曽根さんのお考えや自民党の文教委員や文部省の役人のいうことに制約される。だから喜んで私たちと一緒にやってくれるだろうと思ったが、当てが外れた。

「男三人」の椅子は、とうとう埋まらなかった。仕方なく、私たちは女だけで民教審をやることになった。ただ、ここで私は、男の人の名譽のために、すべての男の人が同じではなかった、といっておきたい。ひよっとすると、私たちがメンバーにお誘いした人が、ミス・キヤストだったのかも知れない。その後、私たちがお願いした助言者や賛同者、ゲストや応援者を、じつに気持ちよく引き受けてくださったステキな男性もまた大勢いらしたのだから。

☆ ☆ ☆

子どもたちから

「どうして、私たちを、こんなヒドイ目に合わせるのよ」

と睨まれないために、私たちおとなにはいろいろな方策がある。

いちばん楽なのは、選挙のとき、戦争に近づきそうな政治家に投票しないことである。これがいちばん楽な方法。言論の自由を奪いそうな人、子どもを苦しめる教育をする人に投票しないというのも、同じく楽な方法である。

でも投票を間違えて、戦争の危険が出て来たり、言論の自由が危なくなったり、子どもを苦しめる教育をする人を政治

家を選んでしまったら、仕方がない。声を大にして、そういう方は反対だという方法がある。

もう一つ。ただ「反対」を叫ぶだけでなく、

「そうではなく、こうやってほしい」

という対案を出す方法がある。

この三番目が、いちばん、大変で、むずかしく、骨の折れる仕事だ。

私たち女性民教審は、もともと困難なこの三番目の道を選んだ。それが、子どもたちに対して、いちばん誠実な態度だと思えたからだった。

男の人の中にも、時折、この困難な三番目の方法を実践してくださる方々がいる。教育でいえば、日教組とか、政党とか、財界とかの依頼を受けた学者・専門家の集団である。

女性だけで、しかも教育政策の専門家は一人もいないというグループで、それに挑んだのは、間違いなく、日本の歴史はじまって以来、私たちがはじめてである。

だから、私たちはずいぶん苦労した。そして勉強した。私自身、提言づくりの中で、仲間から、助言者から、賛同者から、傍聴者から学んだことは数限りない。こんなにも、私は不勉強だったのか。こんなにも、私はモノが見えていなかったのかと、われながら恥じ入った。女性民教審の二年半に、私が学んだことは、ゆうに、四年制の大学や大学院で学ぶこ

とを超えただろう。その結果思うことは

「おとなは学ばなければいけない。それがおとなであることの責任だ」

ということである。そして学ぶためには、学ぶ必要性を感じるような生き方（この場合は提言をつくるという行為）が前提になる。最初は、ためらいつつ、おずおずとはじめた女性民教審であったが、やがて私は、こういうことをはじめたことに感動し、私が出せる時間とお金と能力のすべてを捧げた。いま、そう出来た自分に、ささやかな喜びを感じている。こういうしあわせは、立ち上がるべき時に、立ち上がったからであつたろう。「立ち上がることも、まんざら悪いものではない。」

そのうえ、私は民教審のおかげで、一挙に友だちがふえた。メンバー二十九人はもちろんのこと、傍聴者、賛同者、助言者の何十人かと、深い信頼関係を持つようになった。これは、その直前まで、私が全力投球でやった中野区の準公選教育委員と似ている。

おとなにも、友だちが必要である。

いや、おとなだからこそ、一人で出来ないことを、みんなやるために、友だちは一人でも多いほどいい。友だちが増えたしあわせも「立ち上がった」せいなら、立ち上がることは、まんざら悪いものではない。

☆ ☆ ☆

私たちは、こんなに努力して作った「一三八項目の提言」を、もちろん臨教審に届け、そのすべてを取り入れてもらいたいと思っている。私たちの提言は、九百人もの賛同者に支えられて出来たものだ。おおかたの親がのぞんでいる教育改革だといつていい。それだけの自信を、私たちは持っている。私たちの税金でやっている臨教審ならば、耳を傾けるのが当然であると思う。

一方、親や教師や市民のみなさんは、私たちが立ち上がった投げたボール（提言のこと）を、しっかりと受けとめていただきたい。限られた時間と能力と人手で作った提言だから不備などところも多々あると思う。それについては、どんどん指摘いただき、共感できる部分については、それぞれの立ち場で実現していただきたい。

さし当たって、私自身は、いま取り組んでいる教育委員を親の手で選ぶ（公選）運動を、もっと広めることから始めてみようと思っている。教育委員の公選は、私自身が体験してみても大切なことだと痛感した。いまを生きるおとなが、おとなとして責任の持てる教育を創り出してゆくには、教育委員を自分たちで選ぶ制度が必要不可欠である。それが無いから、いま教育は親の手から国に取り上げられてしまったのだ。

十八歳までの子どもをお持ちの親は、PTAで頑張ってくださいのもいい。PTAも親として、いまの子に責任をとるための大事な場である。そこで、私たちの提言の中の二つでも、三つでも実現していただけたらどんなにうれしいことだろう。

教師のみなさんには、あすからやっていただけることが、いくつも提言してある。ほんの少しの勇気と仲間（同僚や父母）があれば実現できることがたくさん書いてある。

全国の教育委員のみなさんや事務局の人たちで、出来ることも書いてある。国の法律を変えたり、文部省や大蔵省がウンといわなければ出来ないことは、臨教審からいってもらうことにして、地教委でできることから実現してほしい。それが、地方自治というものである。

私立学校の経営者や教師にも、私たちの投げたボールを受けとめていただきたい。私たちが私立学校に何を期待しているかが、よくわかっていただける提言である。

企業の経営者や幹部の人たちにも読んでいただきたい。企業を支える人材の教育について、きつと深い関心がありと思う。あるいは、もっと積極的に、企業のあり方が教育に与える影響について強い責任を感じているすぐれた方々もいらっしゃるかも知れない。そういう人々の参考になる提言も含まれている。

こんなふうに書けば、ますます私たちの提言を読みたいという人が増えてくるだろう。私たちの提言は、いま手元に約五百部ある。それが無くなるころ、『ひと』という雑誌が別冊で、私たちの提言を全部載せて下さることになっている。たぶん七月下旬の発売になるだろう。

最後に、私たちの提言づくり、発表会、その他すべての事務を支えてくださった六人の事務局の女性、ボランティアとして折々に手伝ってくださった女性たちに、仲間としての厚い感謝を捧げる。その仕事が無縁の下力持ちの仕事であっただけに、感謝の念は深い。二十九人のメンバーの中で、もっとも誠実に、もっとも苦労したのは、事務局を引き受けてくれた六人のメンバーであったことを付記する。

もう一つ、忘れられないのは、全国約九百人の賛同者の父母と教師と市民の皆さんのことである。この人々のカンパと助言で、私たちは活動し、提言を作り上げることが出来た。心をこめて「ありがとうございます」と申し上げる。

これから私たち女性民教審一同、全国にひろがる反響を、息をつめて見守る。そして今後の活動を、その人々と共に考えてゆくつもりである。

そして、子どもたちには、小さな声でささやくだろう。「母さんたちは頑張った。体を張って頑張ったのよ」
そういう日を、私は待っていた。

〈発達成長権以前の人權〉

子どもは、大人にはない権利を一つ余分に持っているといわれている。それは、発達・成長する権利である。もちろん大人も生涯教育的見地からいえば、何歳になってもそれなりに発達する可能性と権利を持っているわけだが、しかし子どもは発達・成長することこそが特性であり、生活の主たる部分であり、そのために学校をはじめとする社会の諸制度が出来てきたはずである。法律学の中で、子どもの「発達成長権」を確立していくことは

教育学の中でいう「子どもの発見」に等しい。しかし、法律学者・実務家たちがこの発達成長権を提唱するようになったのは、それ程遠いことではない。いうなれば生まれて間もない権利であり、権利としてはまだ一人前の地位を確立しているとはいえず、ヨチヨチ歩きを始めたばかりなのである。

それなのに———といったい。

★私は提言する★

人權としての教育を

渥美雅子

(弁護士)

それなのに、子どもたちがいま置かれている状況を見ると、子ども特有の発達成長権どころか、大人も子どもも、本来人間なら誰もが持っているはずの基本的人權（例えば憲法で保障されている個人の尊重、生命・自由・幸福追求の権利、奴隸的拘束を受けない権利、思想・良心の自由、表現の自由、法律で定める手続によらなければ生命・自由を奪われない権利など）が、何の躊躇もなく侵害されているのである。例えば

ばがんにがらめの校則を定めて、有無をいわず子どもたちを守らせることによつて。例えば教師の命令に従わない子にビシビシ体罰を

加えることによつて。その一例を挙げてみよう。

〈校則ガンジガラメ〉

昭和六〇年一月一三日、熊本地方裁判所からひとつの判決が言い渡された。それは、熊本県玉名郡玉東町にある町立玉東中学校が定めている「男子の髪型は丸刈り」という校則が憲法違反ではないかと訴えた事件に関するものであった。

憲法違反の疑いを持たれたのは、

①丸刈り強制は、憲法が保障する「表現の自由」（憲法第二一条）を侵害するものではないか

②男子のみ髪型を丸刈りと強制するのは、性別による差別を禁じた憲法第一四条に違反するのではないか

という、主として二つの点においてであった。しかし判決は、いずれの点においても憲法には違反しないと判断した。

この判決は、訴訟を提起した生徒や保護者が「判決には不服だが、これ以上裁判で争いたくない」と控訴を断念したので、一審で確定した。いわば校則制定者側にとつてはこの判決で一種「お墨付き」をもらう結果となったともいえる。

これによく似た事件が一〇年前にもあった。所は埼玉県大井中学校である。この時は日本弁護士連合会（日弁連）人権擁護委員会が、「頭髮は身体の一部であり髪型は人格の象徴であるから、これを規制することは、憲法上保障された基本的人権である人身の自由と表現の自由を制約することになる。よって、生徒の頭髮を規制するには、これを規制しない場合における学校秩序ないし教育課程に対する明白かつ実体上の危険が現存しなければならない。かかる危険が存在しないにも拘らず、頭髮の規制をするのは無効であるから、生徒に対して何らの拘束力を持つものではない」と勧告し、学校側でもその勧告を受け入れて校則を改訂した。

こうしてみると、ふたつの丸刈り強制事件はまったく逆の結果に落ちついたことになる。私たちはその間の、一〇年の歳月に思いを致すべきかもしれない。この一〇年、非行対策、対教師暴力対策、受験対策等いくつかの原因があいまって、学校の管理体制はなんと厳しくなったことか。いま公立中学・公立高校の校則の細かさは驚くばかりだ。その一例を昭和六〇年、日弁連が全国約一、〇〇〇校に上る学校を対象に調査したレポート「学校生活と子どもの人権」の中からピックアップしてみよう。

たとえば通学時の心得として――

○右側通行を守り、友だちと並んで歩いてはいけない。

○歩行中、友人と雑談をしてはならない。

たとえば朝会では――

○つま先を等分四五度（六〇度の角度に開き、指はそろえて軽く伸ばし、手のひらを体側につけて「気をつけ」の姿勢をとる。次に右足を一足長の間隔で右方に開いて「休め」の姿勢をとる。この時、手は後ろに組むこと。礼をする時は、上体を三〇度前方へ傾け、いったん止めてから静かに起こす。

たとえば授業中は――

○発言・発表する時の挙手は、右腕を約七〇度前方に挙げ、五指をそろえて、手のひらを前に向ける。

たとえば清掃時には――

○無言・無音でしよう。手順正しく、無言の作業。

「床のひかりは心のひかり」

たとえば給食を食べる時には――

○パン↓牛乳おかずのように順序を立てて食べよう。

等々数えあげれば切りがない。これでは友だちと連れ立つておしやべりをしながら登校・下校はできないし、掃除も楽しくやるわけにはいかないし、パン↓牛乳↓おかず↓パン↓牛乳↓もう一度パンを食べようというわけにもいかない。

こんなになんじがらめの校則が、いったいどういう教育的効果をもたらすというのだろう。

憲法第一三条は「すべて国民は、個人として尊重される。

生命、自由及び幸福追求に対する国民権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他国政の上で、最大の尊重を必要とする」とある。もちろん子どもといえども、ここに定める「国民」の例外ではない。こうまでがんじがらめの校則で縛らなければ、公共の福祉に反することでもしでかすというのだろうか。

また、教育基本法第一条には「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と奉仕を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなけ

ればならない」とある。こんなやり方で自主的精神に充ちた国民が育つのか、教育的効果も大いに疑問である。

〈体罰の日常化〉

同じ日弁連のレポートの中から更に体罰に関する被害実例を挙げれば次のとおりである。

○体罰で鼓膜を破られたので、マスコミに通報し報道されると、教師は「通報した犯人を見つけたら足腰が立たなくしてやる」と言った。

○忘れ物をする、顔にマジックで囚人番号をつける。

○ビンタをされた後「ありがとうございました」とうまく言えないと、もう一度ビンタをされる。

○学年主任は鉄パイプを持ち歩いている。学校の机には鉄パイプでパンパン叩いた跡がたくさんある。

○女生徒一人を宿直室に連れ込み、一時間四〇分の間平手で頬を殴打し、髪をわしづかみにして押し倒し、顔を上向きにして平手で殴打し、襖に三、四回押しつけ、うつ伏せに倒れたところを座布団で五、六回殴打し、ガラス製の灰皿を振り上げて「殺してやりたい」と大声で叫んだ。女生徒は加療一〇日間の障害。

○頭髮違反は学校で強制的に刈る。一部分だけ（たとえば左半分五センチ幅で）刈ることもある。

こうした体罰の内容を見ると、仮に生徒の側に校則違反や多少のいたずらがあったとしても、それを戒める目的をはるかに越えた、一種の「恨念」や「狂乱」に近いものさえ感じられるのである。

では、体罰は許されているのか。そんなことはない。もちろん法で禁止されているのである。学校教育法第一条には次のような規定がおかれている。

「校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、監督庁の定めるところにより、学生、生徒及び児童に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。」

（傍点筆者）

それにもかかわらず、憲法も学校教育法もあつてなきが如くに、拷問に近い体罰、処刑に近い体罰が教育現場に横行している。なぜ、これほどまでに荒廃してしまったのだろうか。その原因をあえて列挙するならば、

①戦後の知育偏重教育のなかで、教育過熱、受験過熱、そしてそのための偏差値による「輪切り教育」が子どもたちの心を荒廃させた

②その結果、対教師暴力、対親暴力、授業妨害、非行が頻発し、学校がその対応に迫られた

③対応の方法として、校則による管理と、違反者に対する処罰、ことに体罰で臨んだ

つまり、悪循環の輪のなかにすっぽりはめ込まれてしまったのである。

体罰を行う教師たちは、「そうでもない」と、今どきの子どもは言うことを聞かないですよ」という。あるいは「子どもが教師を試すんですよ。試された時バシッと対応しないと、ナメられちゃうんです」とか、「授業が正常にできないんです。このままじゃ真面目な生徒が気の毒だから」とか、「父母もビシビシ叩いてくれて望みますから」とか、「教育熱心な教師ほどよく殴るんです」と弁明する。

現に、昭和五六年四月一日に東京高裁で表い渡された水戸五中事件では、「中学校の教師が生徒の頭部を数回軽く殴打する程度の行為は正当な懲戒権の行使にあたる」として愛のムチを認めた判例するのである。しかし、この事件では教師は無罪になったものの、殴打された生徒は事件の八日後脳内出血で死亡してしまった。

さすがに、その後昭和六〇年に発生した岐阜岐陽高校事件（科学万博に修学旅行に行った生徒がヘアドライヤーを持ってきたということで教師に暴行を受け死亡した）では、担任教師が懲役三年の実刑判決を受けたが、教師に罪をきせるだけで一件落着と考えるのは早計である。根はもっと深いところにあるようだ。

〈子どもの目線で考えよう〉

戦後日本が邁進した工業化社会、経済第一の競争社会では何ものにも増して効率主義・画一主義が尊ばれ、製品のバラつきは許されず、そのための管理も自ずから厳しくなった。人間でさえもそうした効率主義・画一主義的な評価の対象にされるといふのは、こうした生産体制の必然性の延長にあるのではなからうか。だが、その結果、子どもの人権は侵害され、子どもたちは悲鳴をあげている。

それにしても親や教師はなぜ、こうした子どもたちの「悲鳴」に気づかないのだらうか。それは、大人たち自身が「加害者」側に身を置いてしまっているからに違いない。親は我が子に対し、まるで自動車か電気製品を組み立てるかのよう

にする。そうしさえすれば、一生が保証されるという楽観的な思い込みが親の側にあるからだ。そういう立場に立ってしまった親には、その過程で子どもがどれほどスポイルされるかは見えない。子どもの「悲鳴」も聞こえなくなってしまう。教師もまた然りだ。自己の勤務評定を気にしつつ、ひたすら国家と政治の要請に応えて、教え子を「期待される人間像」に仕立て上げようと焦っている教師に、子どもの心はつかめない。

大人自身がひとたび加害者側に身を置いてしまえば、どんなに愛する我が子といえども、どんなにかわいい教え子といえども、その子の心は見えなくなってしまうことを、私たちはもう一度よく考えてみなければいけないのではないだろうか。



一、登校拒否をする子どもたちの現状から

女性民教審の最終提言発表の日、ヤマハホールの舞台の上で、私の頭の中を最も去来していたのは、「不動塾」でなく、殺された土田少年のことであった。三日前に起きたばかりの、なまなましいこのリンチ事件は、登校拒否の子どもの現状をひどく象徴している。誰もが、塾長のやり方のひどさに憤慨している。

「何もああまでしなくたって」と。

しかし、そんな、

個人のやり方の問題ですませられるような単純な事柄ではない。あの事

件が起こっても不思議はない状況が、日本の子どもたちをとり囲んでいるのである。

土田君は、登校拒否をなおすという目的で不動塾に入れられた。いったん退塾するが、思わしくないという母親の判断で、無理に連れもどされ、それが死への旅となった。母親の再入塾を希望する方向を知った時、土田君は、「あそこへ入ったら殺される。絶対縁を切ってくれ」と再三、母親に言っ

★私は提言する★

学校信仰をつぶそう

奥地 圭子

(「東京シュール」主宰、「登校拒否を考える会」代表)

ている。にもかかわらず、母親は、塾長に迎え(実は逮捕)を要請している。そして殺されたあとの記者取材にも、「塾長には世話になった。感謝している」旨発言があったと報道されている。

なぜ、そんなにまで母親が不動塾を信じたか。それは不動塾に預ける前より、預けてもどってきってから、学校を欠席する日がかなり減ったからである。私にいわせれば、子どもは

不動塾のそんなひどい扱いを受けるなら、まだ嫌な学校へ行った方がましと感じ、無理をしても何とか登校するから、学校へ行くようになる

のは当たり前だ。それをなおしてもらったと思つて、「こんなやっかいな、親でもしまつにおえない子をよくぞ面倒みて下さいました。少しでもよくして下さいました」となつてしまうのである。

こうまでして、登校拒否はなおされなければならないものであるか？ 学校に行かない子は、そんなにダメ人間なのであるか？ 登校拒否をする子どもは情緒障害児とか、心

が病んでいる子とか、精神異常とかいわれるが、ほんとにそうなのか。子どもは学校へ行くのが当たり前、学校へ行く子Ⅱいい子、学校へ行かない子Ⅱ問題児、という考え方があまりにまかり通っていることこそが問題ではないだろうか。

私は、自分の子が、千葉の管理教育の中で、文字通り、登校を拒否。以来九年間、登校拒否の子どもたちとつきあうようになり、親の会をつくり、現在は、学校へ行っていない子たちが通つてくる居場所、学び場所をつくっているわけだが、この子たちが、病んでいる子とか、問題児で何としても施設や病院でなとして、学校へ戻すべき子とは到底思えない。私が、教師をやっていた二十二年間、学校でつきあってきた子たちとかわらない子たちである。強いていえば、個性が強かったり感性がとてめ鋭かったり、自分をはつきり持っていたり、身体や動作や成績その他の点で、学校の要求するものさしについていきにくい、という子であつて、人間としては当たり前の子たちである。その子たちが、学校へ行かなくなつたかげには、必ず、学校が、本人にとって、何らかのマイナスな存在——こわい所、信じられない所、疲れきつてしまふ所、自信をなくさせる所等々——になつており、行かないという行動をとるまでには、ぎりぎりに至るまでのマイナス体験を重ねている。わがままで簡単に行かなくなるわけではない。土田君も、おそらく、どうしても行きたくないか、行け

ない何かが生じてしまつて始まつたことだろう。

現に、退塾したあと通学していた中学にまた行かなくなつたのは、教師の体罰であつた。今、ここで詳述するゆとりがないが、登校拒否の多くは、いじめ、体罰、過度の管理、部活の恐怖、先生不信、テスト競争の犠牲、ゆがんだ友人関係など、現在の病んだ学校とこれ以上つきあうと、自分が自分でなくなるような危機感を感じて、いわば防衛反応として、学校と自分をひきはなす行動に出るものがほとんどである。もし、学校が楽しければ、誰だつて学校へ行く。もし、学校が、地域のどんな子たちも受け入れる、はばの広い、自由な、色々な個性の子がのびのびと自分を生かせるのであれば、こんなに学校のことで苦しむ子は出ない。

それなのに、学校へ行かなくなると、学校へ行かない子は進学できない、就職できない、結婚できない、と大さわぎして、どうやったら登校するようにするか、あの手この手でおそうとする。そんな非社会的、不適応児は、どんな手段をとつてもなおさなくてはならない、本人の意志など認めてもらえない、という大人の価値観がある。そのことがよけい子どもを苦しめ、劣等感をもたせ、暴力や神経症、とじこもりを誘発させていく。自分の気持が理解されないため追いつめられ、大変な苦しみにある子たちは今、とてもたくさんいる。かけがえのない生命をもつ子どもたちが、こんなひどいめ

にあう日本の社会が許されていいはずがない。そのかげに、巨大な学校信仰があることが登校拒否からはよく見える。断つておくが、学校信仰の強い家庭が登校拒否をうむのではない。日本の社会は学校絶対化社会であり、今何事もうちの子は問題なし、と思っている多くの家庭もほとんど学校信仰をもっている。ただそれにシビアーに気がつかないだけである。

二、女性民教審の中で

以上のような問題にぶつかり、とりくんできた私に、女性民教審の話があったのは、二年半前の二月だった。当時、私はまだ教師をやっていたから、現場教師としてもメンバーに入ってほしいという要請であった。私は子どもを主人公にした学校づくり、授業づくりを民間教育運動にかかわりながら二十二年生きてきた教師の立場からも、登校拒否の親の運動をしている立場からも、今の教育が変わってほしい、と思う気持は切実だったので、ひきうける気持で、一回目の会合に出かけていった。そして、二回目からは正式のメンバーを辞退した。というのは、その直後、三月には教師をやめ、自分で生活費をかせぎながら「東京シユレ」という日本でもはじめての「かけこみ寺兼フリースクール」という性格をもつ仕事に忙殺され、エネルギーも時間もお金も、自分のその

仕事でせいっぱいになり、民教審はとてもひきうけられる仕事ではないと直感したからだった。

もつとも、メンバーのどの女性も、皆、それぞれの持ち場で、社会的仕事と家事・育児をこなしながら、超多忙な日々を送っている人ばかりだったから、それをいうのはわがままだったかもしれないが、加えて、学校改革ではあっても、学校の枠をはずすことの大事さをどれだけ受け入れてもらえるか、そこまで精力的には、どうさかだちしてもかわれない状況に私自身があつて、ぬけさせていただき、形の上では顧問となった。でも、ほとんど何もできないでいるうち、一年たち、「女たちの教育改革」提言の中間報告がおこなわれた。私も、公開審議会で意見を求められ、改めて提言としてまとまってきたものを読み、会で聞いた。

学校の改革は、親や教師の声がきちんとよりこまれ、これを実現すれば、はるかに学校は楽しくなり、子どもが人間として大切にされるという内容であつたが、ひっかかったのは、「高校義務化」という言葉・方向であつた。高校入試を全廃してみんなが高校へ行けるということであれば、現在の教育の矛盾のかなりが解決する反面、高校へ行きたくない子や、行つていても中退する子に対しての苦しみは倍加するであらうと思つた。現在だって、義務教育は中学までである（この「義務」も子どもが嫌な学校に無理矢理行く義務はな

いのに、世間では曲解されているが、もう義務教育は終わった段階の高校なのに、「高校ぐらい行かないと」という意識にしばられ、親にせめられ、どれだけ多くの子が苦しみ悩んでいるかしかない。高校義務化なんてとんでもない、いくら学校がよくなっても、その学校が絶対化するのでは必ず苦しむ子どもが増える、ということを訴えた。

女性民教審のメンバーたちは、真剣に耳を傾けてくれ、私の意見はうけとめられ、具体的には「高校教育の保障」という言葉になって、提言されることになった。こうして、メンバーの一人に再登場することになったのだが、途中から入ったため、今までの討議に、かなり批判的な立場になり、あるメンバーに「やっぱり奥地さんは、外部の人なのね」といわれ、ウーンなるほど、と考えるでしまた。登校拒否は増え続け、もつともつと世の中に理解されることが急務だと私には感じられていた。時間的にはすごくしんどく、しばしば夫と帰宅の遅さをめぐってトラブルがあつたりしたけど、この提言の中に少しでも盛りこめなかつたら、子どもたちの訴えは生かされてこない、と思い、必死で時間のやりくりをして、審議会内部の人間として参加しはじめた。

ところが、あと二カ月半でまとめ、という大事な時期に、次男が腎臓病で長期入院することになってしまった。登校拒否についての日々の相談と対処、シュールの子どもたちの活

動だけでも、入院の子どもをかかえてどうやってのりこえるか大変な課題だった。今は子どもの生命が大事。もう、きっぱりと今後出席できません、と民教審には連絡せざるを得なかった。

こんなわけで、私は、メンバーの中では、中途半端なかわりしかやれてない。最終提言の日も、あまり手伝えなかった人間が、メンバーでござい、という顔をするのも気恥ずかしいから、と思ったのだが、「最後の日だけでも出てきて下さい」という俵さんの手紙に、俵さんはじめメンバーの熱い思いを感じて、出席した。不十分だったが、これで精一杯だったのだから。できる所で少しでも、子どもの立場に立とうという人間が力をあわせられた、その自前の動きができたことがうれしかった。しかし、私のかかわり方の不十分さはそのまま最終提言にあらわれている。登校拒否の立場からの具体的施策をもう少しきちんととりこみたかったと思う。ともあれ、脱学校信仰を視座にすえての教育改革提言であることに着目していただきたい。本当のスタートはこれからである。

夜十一時、仕事を終えて帰ってくると、近所に住む妹から電話が入っていた。何時になってもいいから電話をほしいとのこと。汗をぬぐう間もなく受話機をとりあげる。

「どうしたの？」

「あのね、Uが先生にたたかれたらしいの」

「どうして？」

「音楽のドリルをやっていて、何番目かの問題をスッポリぬかしちゃったらしいの。そしたら『もう、学校に来なくていい』って、頭をバシッて殴られたらしいのよ……」

新学期、担任が

決まってからとい

うもの、姪のU子の口から、教師の殴打の話が出ない日はなかった。昨日はA君が、今日はB子が、頭をバシッと殴られたという。その度に私はUに聞いた。

「友だちがたたかれるのを見て、Uちゃんはどう思った？」
私の息子と違って、おとなしいけれどじっとまわりを見つめる強さを持つU子は、いつもちよつと考えてから答えた。
「こわかった。そして、くやしかった」

★私は提言する★

子どもの力を信じて

青 木 悦

(婦人民主新聞記者)

「それから？」

「この先生、何かがこわいんじゃないかなと思った」

「そう、何がこわいんだろう？」

「ちよつと思つたことなんだけど、もしかしたらUたち子どもがこわいんじゃないかなあ……。まちがってるかもしれないけど……」

Uは小学校三年。もう、こんなにしっかりと、自分たちを殴る大人の姿を見ぬいている。私はUに関しては、心配いらなひと思つた。だから、ひとり娘が教師に殴られてカーツとなつてゐる妹に言つた。

「先生に抗議するの、ちよつと待つて。Uはどう言つてる？」
「話してるうちに、くやしひつて泣き出したけど、話し終わつたらケロッとしてるの。そして『言いたくなかつたんだ。だって、先生から叱られた話なんか、したくないもの』ってゐるの」

「そうだと思ふよ、あんた、いちいち聞き出したんでしょ？」
「そう、だって、気になるもの……」

「この教師に、親が抗議に行つて、いつたいどうなるのだろう。おそらくこの教師は「私は子どもたちのためを思つて指導しているんです」と言うだろう。すると親の方は、「そういう暴力的なやり方がほんとうに子どものためになるのでしょうか」と反論するだろう。結局は「子どものための指導」の方法をめぐつて、さまざまなりとりが始まるだろう。

もちろん教師の暴力を、私はどんな些細なものでも認めない。子どもが「こわい」と思うような「触れあい」は全て、教師の暴力だと思つてゐる。子どもを怯えさせてしまつたら、そこには「教育」は存在しないと考へてゐる。

しかし子どもたちは、理想的な社会で生きてゐるわけではない。ドリルの一問を見落としたからといつて「学校に来るな」と言つてしまふ教師もいるのが現実なのである。要は、そういう教師をひとりの大人として、しかも弱点だらけのくだらない大人として見ぬいていく子どもの眼、それをどこまで信頼していくかということではあるまいか。

このことによつてUがどこまで傷ついたか、私にはわからない。しかし、子どもを殴る教師を「自分たち子どもをこわがつてゐる」と把えるUは殴られたことはくやしさに違ひないが、殴つてしまふ大人の弱さも見ぬいてゐるのである。

教師と親が「子どものため」として話を展開する中で、子どもはそんな論議と関係なく、自分の周りの大人を見つめつ

つ自分を創つていく。私たちが「理想」を求めて論議することはとても大切ではあるけれど、その同じ時を、全身傷だらけになりながら必死で生きぬいてゐる子どもたちがいること、

そのことに私は勇気づけられる。今すぐその子たちを「救う」ことも大切だけれど、「救いきる」ことはできないと私は思う。傷つくことのない、何の不安もない、全てが満たされる場などありはしないし、またそれは子どもの生きる場ではない。

私は明日、Uに会つて言おうと思う。

「あんだ、エライね。先生にたたかれて、それを親に言つてしまつて、でも言つてしまつた自分をイヤだと言へるなんて、あんだ、エライよ。私もね、仕事先でくやしきこと、いろいろあるんだ。つい、家に帰つてブツブツ言つたり、泣いたりしちゃう。でも、そういう自分をイヤだと思ふ力は、時々なくしちゃうんだよ。がんばつたね、U……」

Uの担任の教師とは、いつかきちんと話をしなければならぬだろう。Uがきちんとがんばるときがきつとくる。そのとき私は、親ではないけれど、Uの応援をしてやろうと思つてゐる。

私が、子どもの代わりに闘うのではない。子どもは、社会の理不尽さを、大人のいじわるさを見つて、自ら闘う力を持つてほしい。そのために、子どもの前でもなく後でもなく、共に前を向いて、並んで歩きたいと思う。

女性民教審のお願いたち

田 中 喜美子

(女性誌「わいふ」編集長)

「女性による民間教育審議会」の運動にピリオドを打つ日が近づいてきた。二年間、よくまあ頑張ってきたものだ、という思いが強い。

発足当時、「はたして空中分解しないで最後までつづきますかねえ」とある男性ジャーナリストにからかわれたことがある。

そんなに危なっかしく見えますか、と問い返せば、「何しろ猛女のあつまりだし、とくにAさんとBさんは反目しそうだし、あなたとCさんは気が合わなさそうだし……」期待満々の面持であった。

反対に、

「ぼくたちもとつくの昔に会を作ったというのに、マスコミはろくに報道してくれない。ぼくたちも主婦をつれてきて旗上げすればよかった」という恨みがましい声も伝わってきた。

子どもの幸福をねがう、という一点において結ばれていたものの、たしかに民教審にはさまざまな傾向の、さまざまな気質の人があつまっていた。その会が、

男たちの期待に反して、いわゆる「女らしい」イザコザにはみごとに無縁だったのはすばらしい。

しかし、この二年の運動が、当初予想したよりも、はるかにきびしく、はるかにしんどかったと感じているのは私だけだろうか。

とくにこの半年は、提言づくりを控えて会合は急ピッチ、一カ月に四回も五回も集まってもなかなか結論が煮つまらず、大げさにいえば息もたえだえ。六月十三日のイベントで、何とかゴールに入れるのだ、という気力だけで持ちこたえてきた、という気がする。

資金の不足にもつねにおびやかされていた。事務局も慢性的な手不足で、事務局長の高橋雅子さんは昼も夜も事務局につめているという有様。家族との夕食もなかなか一緒にとれないというフル回転に、心から感謝したい。

思えばことのおこりは、女性誌「わいふ」の編集部で交わされた母親同士の会話だった。

「臨教審に教育改革を任せておいていいのかしら。今、発言しないでいて、後悔するのはよそうよ」

編集部であがったその声が、俵萌子さん、樋口恵子さん、駒野陽子さん、永畑道子さんを動かして、人から人へ、女たちの輪が広がっていった。

それぞれに忙しい方たちの貴重な時間を使ってこの会ができ上がったのは、教育を男たちの手にだけ任せてはおかしいという思いが、みな胸に燃えていたればこそ、と思う。

とくに発足当時は、中野区の教育委員だった俵さんのエネルギーには目をみはった。

日本で最も忙しい女性の一人である彼女なのに、公開、非公開の審議会にはほとんど欠席されず、少人数の実行委員会にも、時間の許すかぎり参加して下さった。彼女のバイタリティなくしては、会がこれほど活発に運動しつづけることはできなかったろう。

二年前には中学の先生だった駒野さんは、定年にはまだ間のあるお年なのに、現場から引退してしまわれた。いま、この運動に全力を尽くさねば……と思われるたのでは、と私は勝手に解釈している。実際、他のメンバーもそれぞれに仕事を抱える身であってみれば、フリーな時間を利用してうごいていただけの彼女の存在意義は絶大で、あらゆる分野における調整役として、大きな力を発揮して下さったのである。

二年の間に、他のメンバーの身の上にも、さまざまな有為転変があった。

子どもを生んだ人がいる。夫が病に倒れた人がいる。老人介護を抱えこんだ人がいる。大手術をした人がいる。ヨーロッパに出かけた人がいる。子どもの大学受験に苦しめられた人がいる。離婚した人がいる……。

仕事の場合ばかりでなく、教育運動の場においてさえ、女であることの荷の重さが、それぞれのメンバーの肩に乗っていることを痛感する。

それでもこの運動をやってよかった、と心から思う。

私たちの提言が、どれだけ世に用いられるかは分からない。しかしこれほど多くの、さまざまな、ときには相対立する意見を持った女たちが、これほど自由に討論を交わしあった会は、これまでにはおそらく例がないのではないだろうか。

個人の力は、どんなにすぐれた人においても、その人の身の幅だけのものではない。多くの人々が力を合わせるもののなかから、よりふくらみのある、充実した現実把握が可能となり、新しいアイディアがうまれていく……。

「民教審」を経験した私は、チームワークが成功したときの充実感を、肌で知った。

それはまさに、一人一人がその個性に応じて、自由に自己

を主張しながら、他者と力をあわせて互いを支え合う——私たちのめざす「教育」の具体化した姿ではなかったか。

現実には正反対だ。子どもたちの個性は圧殺され、自由は姿を消し、ひとしなみに管理されるなかで、いじめと画一化が横行している。物質主義とエゴイズム

〈教育理念〉は子どもたちが創る

永畑 道子

(作家)

が、親たちの教育熱に結びついている。

私たちの改革案のどれだけが日の目をみるかは分からない。しかしそれが実現すれば少なくとも「教育」それ自身が子どもの人間性破壊に手をかしている現実にははじめて変わるはずだ、と私は思うのである。

一九五四（昭和二九）年の秋。九州の一地方都市で私は駆けだしの新聞記者をしていた。そのころ日教組婦人部は、産休補助教員を要求する運動をしつように熱心に展開していた。そこへにわかに浮上してきたのが、「勤評」の問題だった。

教育担当の上司にあたるM記者は、官庁回りを終えて午後六時ころにはゆうゆうとデスクに坐る。私が拾ってきた子どもや組合関係の記事は、ほとんどそこで

ストップした。あるとき、大達文相演説会が市公会堂でひらかれた。学校を勤評によって二分しようとする行政に抵抗して、会場には先生たち親たちがびっしりつめかけ、一触即発の気配があった。

「政治が、教育に介入したら、子どもたちはどうなつとね、けして許さん」

山本あやさん（当時県教組婦人部長、のち日教組婦人部長）が、緊迫した取材にひるむ私の背中をどんと叩いて言った。

「校長さんも同志たい。現場は割れんとよ」

大達さんの、小柄で小刻みに動く姿を記憶している。まもなく教育委員会が公選制から任命制へと転換、その直後、はじめての全国校長会が文部省によって召集され、管理規則ががっしりと学校へおりていった。戦後教育がつぶされていく節目を、取材のなかで体験した。

時が流れ、子どもたちは確実に変わっていく。彼らの変容は、オトナが仕掛けたことだ。きっかけは、あの昭和二八、二九年にはじまる教育行政の転換にあった。しかし、その転換をゆるしてしまったのは、私たちの政治選択の結果であり、誰も、責任をのがれることはできない。

一九六一年、東京の出版社づとめをさいごに私はフリーになった。子どもたちが生きる場所をひとりで歩きはじめていた。一九六四年新産都計画出発。市街地をつらぬく河川や美しい海岸をつぶして工場が林立した。農業を捨てて、若い核家族が工業団地に住み始めた。列島の風景が変わり、人間の関係も変わりはじめた。育児ノイローゼ、コインロッカーベイビーの流行、受験中心・子ども中心の不幸な子育て。荒れていく風景とおなじように学校も家庭も砂漠化して、現在

に至っている。

「教育理念」という言葉にかえて、「ほんとうの教育」回復の手がかりを、私は次のように考えている。

▼ひと組の親子が、まず心を決める

まわりに受験競争がひろがっている。流れに身をまかせるかどうか。世のなかはどうあれ、自分の生き方をじっと考えたいとおもう。制度が変わるまで待つわけにはいかない。大海のなかにのり出すような不安はあるが、「人間を育てる」決心を親はもちたい。そのあとの生き方は、たのしくなる。自由で、したたかになる。

▼多くの人と、共に生きる習慣を持ちたい

孤立した生活があたり前になってきている。心を病む子どもたちは、ひととのつきあいに慣れていない。何よりも愛に飢えている。ドアをあけて、隣りのひととまず仲よくなりたい。この世にはからだの不自由なひとがいっぱいいる。共に生きること、大切なものを与え、与えられる。幼いときから、子どもにその体験をさせたい。昔はあたり前にできたことが、いまは、あえて努力しなければ、できない、環境になった。

▼子どもを信じる。裏切られても、信じる

学校も家庭も、子どもの力をどれほど信じて、頼り、生活しているだろうか。どんなに幼くても、子どもは誰かを助けようとする。無垢の心のはたらきに、オトナはおもわず胸を衝かれる。子育てはその感動のくり返しである。オトナをむしろ子どもが、育ててくれる。

なぜ、体罰やひどい言葉で、子どもをいためつけてしまうのか。

せめて子どもとおなじ、透きとおるほどの感性をもちたい。信頼は、愛そのものである。

▼学校信仰を捨てて、学校に期待する

家の生活が先にある。その親の注文をうけて学校が存在する。学校が、家庭を支配してはならない。子どもが生きていくための方法論、たのしくて仕方がない勉

強と仕事を、先生はたっぷり教えてほしい。

学校に何ども絶望しながら、それでも、自立のための学校を探している。たとえば山形県小国にあるK私立高は、午前中が授業で午後は畑を耕す。酪農もする。男女半々の料理当番で食事を作り、クツキーも焼く。三年間で「何があろうと生きて行ける自立」をみんなが身につける。基礎学力だけが問われて入った子どもたちに、「最高の思想」を先生たちは与えようと努力する。雪国なのに窓硝子は破れ、木造校舎で、質素なぎりぎりの全寮生活だ。しかし、子どもたちがコンクリートを練って建てたホールには、豪華なパイプオルガンが据えられていた。天使の声のような合唱をきいた。

こんな学校がほしい。生徒が中心になって運営して、自由と希望がある場所。そんな空間を与えられたとき、教育理念を存分に創りだすのは子ども自身であることに気づいている。



教師が変わる教育改革

駒 野 陽 子

(元中学校教諭)

“死んだ” 学校と教師

“学校は地獄”と遺書を残して、中学生や、高校生が自殺するケースが続出したこの数年。自殺にいたらないまでも、登校拒否や退学という形で学校に背を向ける子どもたちは、小学校から高校まで年々増え続けている。

病気で数日学校を休んでさえ、友だちに会いたくて回復を待ちあぐねるのがあたりまえだった私たちの子ども時代にくらべて、今、登校している子どもたちにも、学校が重苦しい、息づまる場所になり果ててから、もう何年たつだろうか。

受験勉強で追いたてられ、偏差値にふりまわされて、学校が楽しくなくなった、と言われ始めてからもう二十年余り。やがて、非行が蔓延して、ふつうの子どもは安心して勉強できない、という親たちの声。そうこうしているうちに、学校のきまりはどんどんきびしくなって、服装・頭髮の検査や持物しらべ、名札の

つけ方から手のあげ方までチェックされるようになった。しみだったはずのクラブ活動さえ強制的になり、軍隊そのもののしごきの場と化した。そして、この数年は、いじめが日常化して、いついじめられる立場になるかと、いつもおびえている。「こんなところはもう学校とはいえない」「学校は死んだ」という声が巷にあふれている。

こんな状況を改善するという名目で、「二一世紀へむける教育改革」と銘うった、政府の臨教審がスタートした。

臨教審答申には、“死んだ学校”をよみがえらせる具体的・現実的な提案はほとんど見られないが、その中に特に目立った具体案として「教員の資質向上」対策がある。

「先生がダメだから、こんな事態になった」ということであらう。親たちにもまた、「先生がしっかりしてくれば……」という期待で、臨教審のこの提案を見守っている人が少なくない。

長い間、困ったこと、心配なことを学校や先生に持ち出してみても、校長はじめ学校ぐるみの説得やお説教でうやむやにされてきた。非行や校内暴力、登校拒否やいじめまでも、

親や子どもの側に問題がある、ときめつけられるのがつねで、親は泣き寝入り。子どもは欲求不満を校内暴力やいじめという形で表すか、じつと耐えるか、ドロップ・アウトするしかなかった。子ども同士の会話では先生は呼び捨てか憎悪に満ちたあだ名で、教師は「先生」にかわって「先公」と呼ばれるようになった。臨教審が発足した頃から、先生の体罰による子どものけがや死亡、自殺などをきっかけに、教師に対する告発がどつと噴き出してきた。

しかし、多くの教師はそれは特殊のケースだ、と思いきんでいた。自分は「子どものために」熱心に教育活動に取り組み、親の声に耳をかたむけ、学校を良くするために努力している、と信じていた。私もその一人だった。

構造的な管理のしくみを変える

私たちが、女性民教審をつくらう、と話し合った二年前、私は中学教師だった。体罰なんか絶対しない、親や、子どもの側に立つ「いい先生」のつもりだった。子どもたち、親たちの「ざつくばらんな苦情」も聞き、不満の解決のために、学年会や職員会でせつせと発言し、奮闘していたつもりだった。だから、翌

年三月、学校を退職した時、これからは、「子どもと親のための教育改革をすすめる」女性民教審のメンバーとして「ガンパロー」などと思ってしまったのだ。

しかし、女性民教審の初仕事だった教育一〇番のホットラインを、三日間だけ続けて、私は自分も含めて、「教師は加害者」であることを思いしらされた。かかってきた電話の大半が、教師にかかわる学校告発だった。学校の管理主義や、教師たちへの怒りが受話器を震わせてぶつけられた。それまで私が親や子どもたちから聞いた「ざつくばらんな苦情」などはほんのきれいごと——「教師」という存在そのものに對する親や子どもの不信感の強さを思い知ることが、女性民教審メンバーとして、私が受けた洗礼だった。

いくら「言いたいことは何でもざつくばらんに……」と言われても、内申書がこわい、学校に物申す親や子は教師からうとまれる、と本音が出せない場——「学校」。五段階評価や内申書、子どもに関する各種の報告書を書く権限をもつ「教師」に對して、親や子どもたちは心を開かない。私たち女性民教審が、五段階評価や内申書の廃止、そして子どもに関する報告書の内容の本人への公開を提言しているのは、子どもたちを序列化し振り分けることの非教育性をなくしたかっただけでなく、教師と親や子どもたちの間を引き裂く制度そのものをなくすことが、学校をよみがえらせる第一歩だと思っ

たからだ。

序列主義の選別は、子どもや親たちを傷つけると同じに、振り分ける側の教師をも苦しめ、やがて変質させていく。

自分のクラスからは非行を出したくない、「いい学校」にたくさん合格させたい、他のクラスより平均点をあげたい、など、教師自身が、他の教師と比較され優劣を競わせられる時、熱心な教師はたちまち管理的になっていく。子どもたちを競争に駆り立てる加害者となっていく。その行きつく先が体罰なのだ。

文部省、任命制の教育委員会、校長、教頭、生活指導主任、学年主任というように上から下へと管理をしていく体制の中で、教師が子どもを管理する立場にいる以上、どんなに良心的であり、子どもの側に立とうと思っても、教師はとりしまる側になっていく。「はじめで熱心」な先生ががえって体罰に突走っていったり、教員養成大学出の「優秀な」先生がたくさんいる学校が、徹底した管理主義の学校になっていたりするおそろしさ。そんな例を、私たちは、教育一〇番でいいやというほど聞いた。

私たちは「教員の資質向上」を、初任者研修の強化や、現職教員の充実ですすめよう、とする臨教審の姿

勢が、かえって、教員を管理的・画一的にしていくことを恐れる。

“閉ざされた” 学校社会

私たちは、制度改革をまず提言した。しかし制度を変えても、すぐに教師が変わる、というわけにはいかない。日本の学校には、「教育」については学校こそが最も指導的な立場に立つべきだ、「先生」は親たちより一步高い位置にいる指導者だ、という思いこみが抜き難く存在する。

明治の初め、学制が施行され、義務教育が実施されて以来、「教育」はお上^{かみ}が与えるものであった。敗戦後しばらく、憲法と教育基本法のもとで、「学校の主人公は子ども（学習権）」「学校は親の意志を尊重して、教育を行うところ（親の教育権）」という学校民主化の風が吹き抜けていた時代があった、という。

しかし、私が教師になった時、教育委員会はもう任命制に変えられていた。PTAは親と先生が対等に話し合う場ではなく、学校側のご意見をうけたまわる場にならかけていた。

日教組は、勤評闘争などで教育の政治支配に反対してストライキまでやった。全国学力テスト反対、主任制反対、と日教組の大きな闘いは文部行政と真正面から対立する形で続いたが、学校は、教師は、「子どもや親たちより一段高いとこ

るに在る」という明治以来の「お上意識」を脱却した教師はどれだけいたのだろうか。戦後、教壇はなくなつたが、教師の心の中から教壇は消えていかなかった。「子どものために」と言えば何でも通つてしまう学校。教育的見地からなら体罰さえ容認されてしまう教師。「非行」がひろがり始めた時、まづ先に子どもたちの服装や髪型に目を光らせたのは教師だった。受験競争の中で、型にはまらない子どもは「秩序を乱す」といつて、画一的な生活指導を押しつけたのも教師だった。整然と秩序のととのつた学校が、「いい学校」とされ、子どもや親たちの不満は封殺された。学校という閉鎖社会の中で通用する価値観が一方的に押しつけられた。親や子どもたちが、学校や教師に異議申し立てのできる制度はなくなつていた。任命制の教育委員会、学校のご意見を聞く場となり下つたPTAでは、下からの声を汲み上げることは不可能だ。その閉鎖社会の中で、教師は独善的になつていつた。内申書はおどしの道具となり、学校や教師にもの申す親や子どもは白い眼で見られる。教育効果をあげるためには、教師集団の結果が大切だ、といわれ、「学校常識」に疑問をもつ新任教師は未熟だ、と批判される。学校の外で創造される新しい教育法や実践を取り入れよう

とする時、その教師をよつてたかつて批判するのが、仲間であるはずの教師集団であつたりする。

体罰が横行する学校では、体罰を行えない教師は落ちこぼれ扱いにされる。退職教師などがマン・ツー・マンで新任教師を指導する臨教審の初任者研修を私たちが許せないのは、それが学校という閉鎖社会の常識を、わけ知り顔に新任の先生に押しつける制度でしかない、と思うからだ。教育実習の評価、自治体の教員採用試験、採用試験に合格した人たちに對する教育委員会や校長の面接がしばしば上からの指示に忠実に従うかどうかの踏絵として利用されている現状を思う時、学校社会に特有の上意下達方式をくつがえす改革を、と痛切に思う。

風通しのよい学校に

私たちは改革提言の中で、親や、子どもや、押さえつけられた個々の教師の苦情を受け入れ、解決する苦情処理機関の設置を要求している。内申書をはじめ、学校が子どもに關して出すすべての報告書を、子ども本人や親に公開することも求めている。閉ざされた学校に風穴をあけ、自由の風が吹き抜けるための第一歩として……。

教育実習は、教師を志す学生本人の意志で、学校や、研究テーマを選び、実習校の評価を受けないで、一年間じかに子

どもや親や、他の先生方と触れ合う。そして、教職課程の卒論ともいふべき論文を大学に提出する。採用試験や面接で思想信条をためすような一切の質問を禁ずる。新任教員は、定員外として学校に配属され、ゆとりのある実践の中で教師としての力を伸ばしていく。こんな制度なら、新任の先生のフレッシュな感性が損なわれることなく、現職の教師と自由に交流し、学び、学校に新しい風を吹きこむことができるだろう。

現職教師の研修も、現場でかかえている身近な問題をテーマとして、親や子どもと意見を交換しながら解決の道をさぐる方式をとる。官制の研修会への参加の押しつけを排し、民間の教育研究との交流も自由にする。一人一人の教師の主体性を尊重し、内から湧き出る意欲によって研修ができるようにすれば、研修は教師にとっての喜びとなるはずである。

現在の教職課程でなおざりにされている、憲法学者や、男女平等教育、性教育、障害者教育、PTAについての学習が、教職課程のただけでなく、現職研修の中でもつねに行われるような提言も行った。そして、八年間の教職経験ののち、すべての教師が、一年間の社会参加休暇をとれる制度を要求している。

この休暇中、教師は学校をはなれて自由に、外の社

会の風にあたる。海外留学もよし、大学の講座聴講もいいだろう。海外、国内を問わず旅行して見聞を拓める。他の職業や、ボランティア活動や、市民運動など、一人一人の関心にしたがって、他の社会での経験をすることは、教師の視野を拡張、学校へもどった時、閉ざされた学校社会のもつ独特の価値感を見直すきっかけともなろう。

学校を卒業して、すぐ教員になる若ものだけでなく、他の職場で働いていた社会人や、子育て経験のある父母が教職課程を勉強して、中年からでも教師になれる制度を拡充する。

こうした提言のすべては、実社会から切り離されて、学校という狭い社会だけで過ごし、独善的になりやすい教師の視野を拡張、心を解放して、学校を開かれた場に変えるためのものである。

私たちの教育改革提言のひとつひとつが実現され、私たちの願いを、ひとりひとりの教師がしっかり受けとめてくれれば、教師は確実に変わる。教師が変わることが、すべての教育改革を、ほんとうに実効あるものとする要である。

制度の改革と同時に、教師が自由に、主体的に、新しい目で柔らかな心で実践に取り組んでほしい、と私たちの全メンバーは心から願っている。

私たちの高校改革提言

原 田 瑠美子

(東横学園中・高校教諭)

十五歳の選別入試を廃止したい

「〇〇〇番の受験生は、欠席が年間二十八日もある。調査書には小児ぜんそくのためと記してあるが、さぼりの要素もありそうなので、不合格にした方がよい」
「〇〇〇番の受験生は、面接の時、反応が鈍く、歩き方もぎこちなかった。いじめられる可能性があるから、入学させたら指導するのが難しいだろう。不合格を提案したい」

高校入試の判定会議の一コマである。

二月十八日は、東京の私立高校の入学試験日。私が勤務する学校もこの日は活気を帯びる。一点でも点数の高い生徒を取り、少しでも非行性のありそうな生徒は排除して、学校のランクを上げたいと教師たちはハッスルする。たくさんのお応募者が集まり、不合格者を多く出すほど、競争率が高くなったと評価される。

毎年繰り返し返される、こうした入試風景に、私はとてもやりきれない思いを感じている。

「少しでも問題点があったら排除しようとするのは、教育的ではないと思う。その子が他にどんな良い面を持っているかわからない。一回の学力試験や三分程度の面接でどう選別するかは躍起になるより、入ってきた生徒をどう伸ばすか、私たちの毎日の授業を豊かにすることの方が大事じゃないの」
こういう私の問題提起は、職場の中ではいつも理想論として片付けられてしまう。全体の受験システムが変わらないで、うちの学校だけが選抜をやめたら、「出来の悪い」生徒ばかり集まってしまうのではないかと反論されるのである。

公立も私立も「出来の良い」生徒を集めようと、選別の競争をする。この選別入試制のシステムの中で、生徒たちは偏差値で志望校を決められていく。普通科は無理だから商業高校へ、公立は無理だから私立へと、ふるい分けされる。

自分の意志や適性とは無関係に入学した結果、登校拒否になったり、中途退学したりする生徒が出てくるわけだが、その数は年々増え、深刻な問題となっている。また「ふるい分け」に失敗し、どこにも行き場のない中学浪人を多く生み出している。

誰もが指摘しているように、こうした選別入試が日本の教育のひずみの最大の原因となっている。私の学校でも、中学時代は高校受験のために塾通いをして勉強してきたが、高校へ入学した後は学習意欲を失い、無気力になってしまいう生徒が多く、教師は頭を痛めている。

十五歳の段階で、あらゆる可能性を秘めている人間を、たった一つの偏差値で選別してその人生を決めてしまう高校入試を変革することは、教育改革の最大のポイントである。それは、どのように生徒たちを生き生きさせられるか悩んでいる高校教師としての私の切実な願いでもあった。

とりあえず、高一までを義務教育

(第一次提言)

昨年四月に発表した私たちの第一回の教育提言では、高校教育を義務教育に繰り入れ、入試をなくすことを提言した。

九四％が高校へ進学している実態なのに、義務教育でないために、親の経済的負担にゆだねられているのは問題である。また高度工業化社会の今日、十五歳までの教育で、社会に出て生きていく力を身につけられ

るだろうか、こんな視点から私たちは高校の義務教育化を提言した。ただし、一挙に三年間を義務化することは、財政上の問題もあるかもしれないので、とりあえず、高一までを義務化とした方が実現しやすいだろう。そして、義務教育となれば、入試を廃止できる。これは、高一までが義務教育となっているアメリカのシステムにヒントを得て、考え出したアイデアだった。

学区についてはどうするか、小学区制という意見もあったが、高校生にもなれば、学校選択の幅が広がった方が良いというところで中学区制をとることにした。そして選別入試を廃止する立場を貫き、定員オーバーの場合は抽選とした。

また、十五歳の段階で進路を決定することに無理があると考え、現行の普通高校・職業高校の区別をやめ、一つの学校の中で、多様な選択ができるように総合制としたのである。

高校入試の廃止は画期的な提言であったが、義務教育の理念、段階的義務化の青写真、私学とのかね合い、総合制・単位選択制の中身など、さらに煮詰めなければならない課題を残していた。

財政的には義務化は可能、貪しいのは思想

第一次提言の後、私たちは高校の義務化をめぐる、何回か学習会を持った。

アメリカの高校義務教育について、母親と生徒の立場からそれぞれ体験を語ってもらった。また、日本における義務化の現実性をめぐって、国民教育研究所の木下春雄氏から、そして教育財政面について、千葉大教授の三輪定宣氏から、レクチャーを受けた。

アメリカの教育理念はひとりひとりの可能性を各々にあったシステムの中で伸ばすことであり、バラエティーに富んだカリキュラムが用意されている。そして小学校から自分の可能性を引き出す勉強を積み重ね、その延長に職業や大学がある。決して、受験勉強と日々の勉強、生活が別次元のものではなく、なぜ勉強するかがわかる仕組みになっている。自発的に、自分のペースで勉強するシステムの中で、勉強する子としない子が出てきて、自らを鍛えられない子はドロップアウトしてしまうという弊害も指摘されたが、子どもたちのさまざまな個性やまちまちの進路に合わせて、多様なカリキュラムを用意している点は、日本でも大いに学びたい所であった。

また、義務化の現実性は、制度的・財政的に可能であるということが、木下氏、三輪氏の話からはつきりとわかった。

現在の日本の公教育費はGNP比四・六％である。

これはスウェーデン九・〇％。カナダ八・二％、アメリカ六・八％、ソ連六・七％などと比べ、先進国最低の率となる。高校義務化に伴う支出増は、GNP比を〇・四％アップしただけでまかなえる。段階的に義務化するという第一次提言は、私たちの取り越し苦労だった。一挙に三年間の高校教育を無料に出来るのである。三輪氏の次の言葉は印象的であった。

「財政的には、高校義務化は可能である。貧しいのは、財政ではなく、思想である」

「義務化」を改め「就学権」の保障

私たちの高校義務化の提言に対し、様々な批判や疑問が出された。

○今の牢獄の様な学校の延長で、さらに高校三年間もしばられてはたまらない。より一層、学校信仰を強め、学校へ行かない子どもやその親に圧迫感と孤立感を与えることになるという批判

○今でも学力格差のある生徒たちを指導するのに困難な状況なのに、義務化でこれ以上学力の低い子が入ってきたらお手上げであるという高校教師からの不安

○高校入試がなくなったら、生徒が遊びほうけて困るという中学教師からの不安

○大学入試が変わらないのに、高校を義務化したら遊んでしまつて後で困るだけという親の心配

制度的・財政的に高校義務化が可能であっても、こうした懸念に応える義務化にするには、高校の教育の中身を変えていかなければならない。そこで、「どの子も活きる高校を」というテーマで公開審議会を持ったのである。アメリカやカナダの高校生活を体験した高校生、自由の森学園の高校生、全日制高校を不合格となった障害を持つ高校生をゲストに迎え、自分の望む高校像を語ってもらつた。その後で、会場の参加者とともに、どの子も活きる高校や教育の内容について論議を進めたのだが、義務教育の理念をめぐつて意見が多く出された。

教育を受けたい子にそれを保障する義務が親や国にあるのであつて、子どもにとつての義務ではない。高校までの十二年間、学びたい権利を保障するという「義務化」という理念は合意できたものの、高校義務化によつて学校信仰がますます助長されることへの危惧は払拭されなかつた。

この審議会の後、私たちは「高校義務化」という表現をやめ、「高校教育の就学権」という言葉に改めた。これなら、誰もが、いつでも、どこでも、希望すれば

高校教育を無料で受けることのできる権利の保障であることが明確になるし、受けない自由もはっきりさせることができると考えた。

夢物語ではない、楽しい高校

「高校教育の就学権」の保障という立場で、高校改革案をまとめ、昨年の十一月四日の公開審議会に提案した。「就学権」という理念は賛同を得たが、高校だけを改革しても、大学や学歴社会のあり方を変えていかなければ、根本的な解決にはならないことが浮きぼりになった。

その頃から、私たちは大学問題についても検討を初めていたが、大学との関連をふまえ、さらに練り直し、今年の四月四日の公開審議会でも再度、提案をした。総合高校制、単位制の内容について、前回の提案より一層具体的になった。

・個性も学力も進路もまちまちな生徒が、それぞれいきいきと学ぶためには、可能な限り豊富な学習内容が用意されなくてはならない

・人間として、市民としての自立に欠かせない労働教育や家庭科、性教育、社会科など最小限の科目を必修とし、あとはすべて選択科目とする

・定食型のコース制はとらない。完全な単位制とする
・労働体験学習、勤労、福祉を中心にした労働の実体験を単

位として認める

・ 自主研究や討論形式の学習をふやす

・ 一校だけで豊富なメニューを用意することは困難だから、学校間、社会教育、実社会、さまざまな場の人材や教育機能を活用する

また生徒が自分に合った進路を見つけられるよう、進路指導の改革も必要と考え、職場見学、労働体験学習、大学の聴講などができるシステムを提案した。

最後まで難問だったのは、私立高校の扱いである。私立教育の自由は大切にしたい。だが、公立高校が入試をやめても私学が選別入試を続けている限り、受験競争は解消されない。むしろ、一部の「エリート」私学をめざし、受験競争は激化するだろう。そこで、私立高校の独自性を尊重しながらも、「高校就学権」の保障の実現に協力をお願いし、無試験で生徒を受け入れるよう要望した。そして、学力や特定の能力で生徒を選別した場合は、公費の公平配分の原則に反するということ、選抜した生徒数に応じて私学助成は削るべきだという主張を付け加えた。私学に公費・民営の自由を認めるべきだとする立場から、私学助成で差をつけるのは良くないとする批判があったが、選別入試をなくしていくための過渡的な措置として考えた。

以上のような経過をたどり、子どもの声、親の要望そして教師の意見を聞き、一年がかりでまとめた高校教育改革提言は、私たちの自信作である。俵萌子さんが文章を書いた最終提言からは、生き生きと学ぶ子どもの姿が浮び上がってくる。

子どもが自分の希望する学校を選び、無試験で入れる。そして自分の興味や学力に合わせて楽しく勉強できる。もし途中で働きたくなったら休むこともできる。出入りが自由でいくつになっても復学できる。そして、自分に合った進路を見つけて、卒業していく。その先は、親から自立して、自分の力で生きていける人間として育っているのである。

「窓ぎわのトットちゃん」の人氣は、夢物語へのあこがれだった。だが、私たちの教育改革提言は夢物語で終わらせたくない。この提言をタタキ台にして、家庭で、学校で、地域でその他多くの人たちの間で論議がまき起こることを願っている。

女性民教審のメンバーとして活動したこの二年半、私にとって貴重な勉強の場であった。子どもや親の本音を聞き、教師という枠を離れて、教育を見直すことができた。これをもどのように現場へ還元していくか、今後の私の課題は大きい。

私たちの大学改革提言

小 沢 牧 子

(和光大学講師)

いつの頃からか、学校といえば競争、という社会になってしまった。人間は競いあうもの、序列化されるもの、という思想を、子どもたちは日々空気のようには吸いこみながら育つ。ふたりの子どもたちといっしょに暮らしながら、私はいつもこのことが気がかりだった。暮らしにくいことだ、と親としても息苦しく感じていた。学校がこのままでいいとは、とても思えなかった。

上下の順位をつけられて縦に並べられるとき、人間には仲間ごころが育ちににくい。それは当然のことだ。子どもたちは仲間づくりを阻まれている。息子の友だちが大勢集まって、おしゃべりをしていた。小学五年生たちだった。「いろんな奴がいて面白いな、あいつは勉強はできないけど、遊びの天才だ、ビー玉なんか百発百中だぜ、勉強ばっかじゃないよなあ……」静かになったと思うと、ひとりの少年のため息まじりの声がぼつんと聞こえた。「……でも、中学へいったらなー」そんな光景を、忘れることができない。

日々評価され管理され、点数によって序列づけられる学校は、いじめの温床である。いじめは、子どもたちが学校で正確に学んでいる人間の序列化思想の表現にすぎないのだ。

競争と管理の世界と化している学校を、子どもたちがのびやかに生活し学ぶ世界に変えたい。それが私たち女性民教審メンバーの共通の願いであり、女性民教審を支持してくださる多くの親たちの願いであつたと思う。そしてその思いが、二年半にわたる私たちの活動の原動力でもあった。

問題の根が深く、しかも錯綜するこのテーマに立ち向かうためには、学歴・学校歴社会に直結している大学の問題にとりくまなくてはならなかった。なぜなら、高校卒業の時点、つまりその先三割の子どもが大学へ進学するその時点が、子どもたちの最終的なふり分け地点になっているのが実情だからである。高校を卒業したら就職か、専門学校・各種学校へいくのか、職業訓練校へ進むか、短大に入るか、四年制大学へいくのか、そしてどの「ランク」の大学へか……。このふり分けは事実上格差をもっており、この格差の存在がより年少の段階の競争を生み出しながら、高校、中学、小学校、はては

幼児のところにもまでおりてきている、というのが私たちの認識であった。子どもたちのいじめの現象にこだわり、これを追いかけているメンバーの青木悦さんは婦人民主新聞の記者だが、取材に歩く中で出会うさまざまな問題は、その行きつくところに大学入試、つまりどの大学に入るかという関心を抱えていた、とその実感を語っておられたし、私自身は、大学でいささかの授業をもつて学生たちに出会いながら、長い競争のトンネルを抜けてきた若い人々の疲れと自分への自信のなさともいうようなものを感じていた。つまり大学問題は、いまの学校問題を解く重要な鍵のひとつだということである。

しかし大学問題についての私たちの討論は、困難をきわめたといつてよいだろう。高校入試の撤廃や、高校就学権の保障などについても、むしろ多くの時間が割かれたが、ここでは基本的な視点は一致しやすかったと思う。一方大学問題は、各メンバーの基本的な考え方の違いがもつとも鮮明に出たため、それらがぶつかり合つて、議論は何度も立ち往生し、時にはふりだしにもどつた。女性民教審の提言は高校までにし、大学問題は触れなくてもいいのではないか、という意見も出た。しかし、学校を競争と管理から解放したいと

いう課題にとりかかってしまった以上、その元凶を埒外に置くわけにはいかなかった。

五月下旬、締切りぎりぎりまでかかって、大学改革提言はようやくまとめられた。難産といつてよい作業であつたと思う。しかしいまの大学にかかわる社会の差別構造を指摘し、おとなのための学校のあるべき姿を提示しつつ、そこへ向かう具体的な改革案をとにかくも示し得たことを喜ぶたい。貴重なご意見のかずかずを寄せて下さつた賛同者の方々に、心からお礼を申しあげたいと思う。

「18歳からの学校改革」と題された提言は、理想像と具体的改革案の二部構成である。以下にその要旨を記し、私たちの考える大人のための学校の姿をお届けする。

一、私たちの理想とする学校像

①生活者のための学問を

現在の大学や大学院が、エリートやテクノクラート支配の社会をうみだしている現実を正し、人間のため生活者のための学問のありかたを追求する。

②何歳でも入れる学校に

労働体験・社会生活体験をもつ人々が入学しやすいしくみとし、さまざまな年代の人々が学べるところとする。

③学費は親にたよらない

学ぶ者が自分で働きながら、または一定期間働いたのちに、自前の経済力で学ぶことが当たり前とされる場である。

④在学期間は自由に決める

学びの年数は学ぶ者の希望や都合で定めることができ、働きながら、また子を生み育てながら、ゆとり卒業することもできるところとし、一律の修学年数にとらわれる必要がない。

⑤専門学校にも公費補助を

現在のように高率の公費で運営される国立大学と、何の公費補助もない専門学校があるというような、税金の使われ方の不平等をなくす。医学を修める人、美容師をめざす人、語学を学ぶ人など、すべての学生は同様に公費補助を受ける。

⑥公費・民営の学校を

すべての学校は公費補助のもとで民営とし、現在の国立大学はなくなる。

⑦学生参加の運営を

それぞれの学校の自治は守られ、学校の運営については、学生の参加が保障される。

⑧市民によるチェックを

公費助成を受ける以上、すべての学校は情報を公

開し、しかるべき民間機関によって市民のチェックを受ける。

二、現在の大学への改革提言——まず国立大学の改革から

①国立大学間の予算配分の不平等をなくす

現在の大学は、東大・京大などごく少数の大学に国費が重点的に配分され、大学間にピラミッド型の序列が生まれ、学校歴差別を作りだしてきた。私立大学、専門・各種学校などへも大幅な助成を行い、学ぶ者に対する財政援助の公平化を推進してほしい。

②入学の時期を年二回とする

高校卒業後すぐ入学を希望する若者にとっては、一発勝負によるストレスが緩和され、より年長の大人たちにとっては、生活の都合に合わせて選べる便宜がある。また、外国人留学生・海外帰国生なども、外国での学校制度にあわせて入学することができ、いわゆる国際化の促進にもつながる。

③すべての大学に夜間部を設け、昼夜開講制とし、これま

でのような一部（昼間）二部（夜間）の学部区別をなくす。これによって、大学施設をフルに活用し、入学定員を大幅にふやすことができる。また、大人たちが仕事や家庭と学習を両立させるためにもぜひ必要な制度である。

④だれでも無審査で入学できるオープン・コース（聴講講座）をかならず設ける

高校生でも大人たちでも、希望するすべての人が聴講できる。一般聴講と登録聴講があり、後者では単位の取得が可能。希望者が多数の場合には抽せんや順番待ち方式をとる。

⑤図書館その他の大学付属施設を一般に開放し、夏休みにもオープン・コースを開くなど、キャンパスを地域にひらく

⑥転部・編入・単位互換など、他の学校と横の移動がしやすい制度をとり入れる

入学後、転部を希望する場合は、学部間の話し合いによって承認する。また大学間の単位の互換を柔軟におこなう。他の大学、短大、専門学校、外国の学校などの学生や卒業者の編入をしやすくする。オープン・コース登録聴講者で一定の単位を取得した者の編入を可能にする。

⑦転部、編入、単位の取得や互換、進路変更などの情報を提供し、助言をおこなう相談制度を学内に設ける

⑧大学の運営に学生や市民の参加を保障する制度を設ける

こうした制度を通して、これまで国公立大学に欠けていた人間の生活にとって重要な学部（たとえば社会福祉学部）や、新しい視点の講座（女性学など）の開設などが実現しやすくなる。

⑨入学審査の期日や方法の統一は行わない

大学を全国的に序列化する共通テスト的なものはもちろん廃止。各大学が学部・学科独自の方法で、多様な入学者を選ぶ工夫をすれば、受験戦争を加速している大学の序列化をある程度緩和できる。

⑩入学審査の方法や審査基準をできる限り多様化・複合化する

学力テストの点数のみによる審査をなくし、多様な審査方法を用意する。たとえば入学希望の理由をのべた自己申告作文、労働・社会活動・家庭生活などの体験をまとめた自己申告作文、職場・社会活動の場から出された推薦状、高校の単位取得表、小論文、面接、実技テストなど。入学希望者は、審査の対象としてほしい資料をいくつか自己申告し、本人がもっとも希望する条件で審査を受ける。学部・学科に関係のある労働体験や社会活動、家庭生活体験などは特に重視し、その体験をもつ者は優先的に入学できるようにする。

高校卒業後、すぐに大学に進学するものについては、同

一高校からの入学の集中を排除する基準を定め、男女がなるべく同数になるよう、また社会人（主婦も含む）、外国人留学生、在日外国人、海外帰国生、障害をもつ人たちなどには、特に優先枠を設けて、できるだけ多様な人々が入学できるようにする。

⑩入学審査の情報を公開する

学部・学科の入学審査の方法や基準は前もって公開し、また学力テストを行う場合には、問題は高校・大学の教員が協議して出題し、後に問題を公表する。審査の結果の根拠については、要求があれば本人にはその内容を明らかにしなければならない。

⑪卒業認定は、しかるべき民間機関（大学協議会など）から、学校名を入れない大学課程終了証明書を発行して行う。

どこの大学を出たかが特に重視される現在の風潮をなくすため、当面は大学が発行者となることをやめる。しかしそうした風潮がなくなれば、大学が発行者となっても不都合はない。一日も早くそのような悪しき風潮がなくなることが、この改革提言のねらいのひとつである。

以上が18歳以降の人々のための学校についての、私たちの提言である。

この提言の基底となっている視点は、主にふたつある。ひとつは人々を縦ならびに序列化する学校間格差をなくすこと、もうひとつは、いまの長すぎるトンネルのような教育制度を、社会にひらかれた出入り自由の姿に変えることである。これをたとえるなら、「ピラミッドから広場へ」「トンネルから人の行き交う街へ」という表現になるべきだろう。

労働と学習、生活と学習は、ほんらいひとつに溶けあったものであるはずだ。この両者が切りはなされ、生活や労働にめぐりあえない学校トンネルを歩かされ続けているのが、いまの子どものたちの疎外状況であると思う。

上の息子が高校生になったとき、ごく自然に私の内側にわき起こったのは、「社会で働くのが自然な年頃になったなあ」という思いであった。それを阻まれているのは、現代の若い人々の不幸であると、ひとりの親として強く感じている。

半日働き半日学ぶ、または数年働き数年学ぶ、そんなあたりまえの人間のくらしへの視座が、私たちの提言の足場になっているのである。

平田圭子

飛び立つ空が見えなくて

ひとは愛しあつて子を生みます。

深い充実感のなかで、生まれでたわが子と出会いま
す。

雨、風から子を守り、知恵と力を尽くして育てあげ、ついにある晴れた朝、巣立ちのときを迎えます。

ああ、子どもたちの初々しい飛翔。あすの世界へと、見知らぬ風景を求めて。愛する人とどこかで出会いたい、子を生むために。

——人間という生命がもつ、それは自然のリズムといえましよう。

子を生み、育て、送り出すというへやさしい行為によって、わたしたち人間という限りある生命は、果てしない時の流れを泳ぎわたるという《勇敢な行為》に挑もうとしています。

だからこそ、親たちは子どもたちの健やかな成長をこれほどまでに願ひ、その苦しみをわが身の痛みとし

て感ぜざる得ないので。

だからこそ子どもたちは、すべてのおとなたちにとって
 〈子宝〉となるのです。

ところがいま、わたしたちの子どもたちは、このあたりまへの成長のリズムを失っています。

こんな話に出会いました——A君は、ある進学塾の優等生でした。小学生の頃から、親と塾長の期待をになつて勉学にいそしみ、評判の高い中・高一貫教育の学校に進み、さらにまたその進学塾の優等生でありつづけ、ついに人もうらやむ大学に合格し、学生時代はその進学塾の優秀なアルバイト講師でありつづけ、ついにめでたく大学を卒業するや、高給をもつてその進学塾の専任講師に迎えられ、現在、弟妹ほどの年齢の子どもたちを叱咤激励、受験勉強に向かわせている日々なのだとか——

むろん 人の生き方・暮らし方は、あかの他人の関知すべきところではありません。しかし、この話に出会ったとき、わたしはお腹をかかえて笑いました。

が、数秒後、その笑いは凍りついてしまいました。

A君の半生は、いまの子どもたちの学生の、象徴ではあるまいかと気づいたのです。学校というワク組みから、企業というワク組みへ直送されるベルトコンベアに乗せられ、かつ自分自身もしがみついている、いまの多くの子どもたちの。

それは、おかしくて悲しいベルトコンベア。

なぜ、おかしいか。堂々めぐりだからです。〈堂々めぐり〉と〈単純なくりかえし〉が、こっけいさと呼びおこすことは、キルケゴールをはじめとする多くの哲学者たちが重厚な思索をめぐらせたとおり。

なぜ、悲しいか。このすばらしき〈堂々めぐり〉のはてに、A君と子どもたちとわたしたちを待ちうけているのは、産業廃棄物となりはてた老人たちを収容する、さらなるワク組みであることを、わたしたちが感じとっているからです。

ああ、青空が見えません。

愛して生み、愛して育てた子どもたちを、解きはなち、飛び立たせてやる大空が、見えません。

どれほど耳をすましても、はるかな時の流れの瀬音すら、聞こえません。今日を思い煩うばかりの、かまびすしい騒音にかき消されて。

息がつまります。ここから脱け出したいのです。子を育て

られる場所がほしいのです。

……理論でもなく、タテマエでもなく、わたしは自分の欲求に従って「女性による民間教育審議会」の二年間の活動に参加しました。

ひとりひとりが美しく哀しいのに

けれど、この稿を書いているきょうはつらい。きょうは六月十四日。最終提言発表のための会を終えた翌日です。

この発表会のためのシナリオづくりと演出を、わたしは担当しました。それは提言の一字一句を冷静な目で眺め、舞台の上で視覚化できるものはなにか、コンクリートな（具体的な）ものはなにか、をピックアップする作業でした。

メンバーの中でただひとり、提言をはなから批判の目で眺めなければならぬ役割を、背おわされたといえましょう。その作業の中で気づいたことを書かざるを得ません。

この提言づくりは、ひとつのシミュレーション（模擬実験）であつたかと思えます。

どうしたら母と子が、ホッと肩の力をぬいて呼吸ができるか、あたりの風景に目をうつすことができるか……という〈着地点〉を目ざしての、ひたむきなシミュレーションでありました。

臨教審の提言との決定的なちがいはここです。子を育て、させる人々からではなく、子を育てる、人々からの発言だという点です。

しかし、シミュレーションには、限界があります。その一つは、即現実とはなり得ないということ。その二つは、シミュレーションというワクの中での論理一貫性をもたざるを得ないということ。

シミュレーションはあくまでも模擬実験です。手がかりです。その現実化のためには、さらに数多くのシミュレーションと検討と調整と妥協とが必要となります。

わたしたちの提言を構成する一字一句に目をこらしていくと、おびただしい議論の余地があることに気づきます——たとえば教育における「平等」とはどういうことか。機会の「平等」と「多様性」とははたして両立することなのか。子どもの「能力」とはなにか。「意欲」をわかせるメカニズムはなんなのか。「個性」と「差異」はどのようにちがうのか。「相対化」をすて「絶対化」をとることだけが、生きる力になりうるのか——

お仲間の審議メンバーのみなさん、ごめんなさい。わたしはへあまのじやくなのでしょね。

でも、夜ふす、孤独なシナリオ作業をしながら、是言の字

句を見つめれば見つめるほど、「まだまだ、まだまだ」と、つぶやかざるを得ませんでした。

わたしにとつて、ひとはひとりひとりです。ひとりひとりが美しく、そして哀しい。だからこそ、わたしはひとを愛します。子どもたちを愛します。

ところが、わたしたちの二年間は、「ひとりひとりに自由を」と願いながら、じつは、ひよつとして、別の形でのワク組みをつくりあげてしまったのではないか。

「学校」という巨大組織のもつ呪縛の力に、結局、とりこまれたまま終わってしまったのではないか。

その意味で、臨教審と同じことをやってしまったのではないか。

ああ、すみません。お仲間のみなさん。きょうは日が悪い。この稿を書くべき日ではないのでしょ。でも〈We〉の半田さんが首を長くして待っておられます。書かなくては。

——わたしにとつて、子を育てるということは、シミュレーションなんてそんなむずかしい作業を必要としないことなのです。

おかしいことは「おかしい」、いやなことは「いや」、変えてみたいことは「変えてみよう」……日々わきこる個別の事実に、率直に素朴に反応していく、ただそれだけのことなのです。

☆☆☆提言にこめた私の願い☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そして、事実の積み重ねだけが、コンクリートな実体をつくりあげると考えています。

ですから、この提言を通じてわたしが送りたいメッセージはただひとつ。

親であるみなさん。学校に対し、教師に対し、組織に対し、

権威に対し、自分のことばでものを言う勇気をもとうではありませんか。

この提言をたたき台に、あなたはどう感じ、何ができるか、お考えくださいませんか。

母親と先生が一緒につくるもの

藤村 美津

(幼稚園教諭)

〈親の立場というのは、本当にむずかしい〉

子どもが順調に育っている時、親はいい親でいられるが、子どもに何かあったとき、それでも、いい親でいられるのは、本当にむずかしいことです。

先生と一緒にあって子どもを責めてしまっただけなら、なんなはずはないと思いかえしても、「たいていの親は、うちの子に限って」というんですよ、ということばがとびこんでくる。学校の先生と、どうも同じ問題意識

になれないもどかしさを感じているとき、進路指導のための三者面談の通知をいただいた。子どもの現在について、そして将来にむかって、どんな話しあいができるか、日頃、考えていることを整理して、その日にのぞんだが、時間が指定されていたのに、なんと一時間半も待たされて、あぐくの果ては「この成績では、ここしか、行くところはありませんよ」という宣告だけであった。夕暮れていくつめたい校舎の廊下でじーと待っていられたのは、子どもにとって、何か、少しでも、良い状況を開いてやりたいという願いがあったからだ

と思うが、うまくいかなかった。

この良い状況とは、「良い学校に入れること」ではなく、今、教育を託している先生と、もつと子どもを話すことで、「子どもを今ある状況から、早くぬけ出させてやりたい」ということなのだという、このひと言を、先生に伝えることができなかった。

先生という位置からみれば、「なんと間の抜けた、ズレた母親」ということらしいが、この時、親の立場から見えることを大事に出来る教育改革の必要を強く感じていた。

〈大きなうねりを波立たせよう〉

女性民教審をつくって、最初のしごとは、電話による教育一〇番であった。ここにかかってきた相談の多くは、学校の中の問題であった。電話のむこうのおかあさんや子どもたちの苦しみ伝わってきた。

本来なら、こんな話、学校の中で、友だちや先生と、話していく中で解決していきけることのなのに、それが話しあえないことが大きな問題なのだと強く感じさせられた。

中学校での生徒間のいじめと、校則違反者に対する教師の体罰は、ことのほか、すさまじいものであった。

新聞、テレビもとりあげ、やっと世の中の人々の目にふれはじめたが、まだ実状は改まっていったいない。

それは、何故なのか、私たちの審議はそこにメスを入れて話しあってきた。現象としてあらわれていることが消えたり、なくなればそれですむ問題ではない。子どもたちを苦しめている根本にある問題をしっかりと見据える目を持ち、解決にむかう力を、まず母親たちが持つことで、教育改革の大きなうねりを全国に波立たせたいと願っている。

〈各地に教育審議会を創ろう〉

提言にもりこめられている私たちの願いの一つ一つは、これから、全国のおかあさんたちが手をつないで、協力して、実現させていくことが必要なことばかりである。

大きな声で叫んでいれば実現できるようなものではない。地道に、自分のまわりにいる人々と充分な討議と伝えあいをしていくことが大切なことになる。

教育を語り合える小さな民間教育審議会を各地に創り出していきましょう。

〈そうでないと、こんなおそろしいことが〉

小学校の就学時、自分の子どもにとってよい学校環境とは、という学習課題へのとりくみの一環として、障害児学級の見学を申し出たところ、教育委員会の指導主事という人が一緒にこられ、見学をさせていただいているあいだ中、次の

ような言葉を浴びせかけられた、と話してくれた人がある。

「〇〇はIQが47しかない、10歳で5歳程度、12歳で6歳位の知識しかないわけだから、中学へ入る時にやっと小学校一・二年生くらいということですよ。だから、小学校入学の時に、子どもにとって、どっちが将来のために良いかをよく考えてみなくてはいけない。私たち（教育委員会）は、こちらの特殊学級の方がよいと思いますよ」

「IQ 70くらいの子が特殊学級、40〜50以下は養護学校へ行くのがいいが、本当は養護学校程度の子が、この特殊クラスに來ているので、苦労しています」

「前はこのクラスも、もつと知能が高かったのですが、体育などで交流したこともあったらしいが、今のここの四人は低いからできません」

「そういう点から考えても、その子に合った進路を早くから選ぶのが、お子さんのしあわせ、おかあさんの片寄った変な考えで、無理に普通学級に入れると、お子さんがかわいそうだ」

「現在このクラスには四人しかいない、ちょっとさびしい。

十人までふやしたいと思っている。今〇〇幼稚園に〇人、それから〇〇にも〇人は、いれたいと思っている子がいる」

「知恵おくれは、全人格的障害である、他の種類の障害者が社会の中で、受けいれられていくようにはいかない。

知恵おくれを普通学級に入れるのは、足のない人が短距離走の選手になるようなものだ」

よくもこうひどいことばが次から次へと出てくるものだ、とあきれるばかりであったと、その母親は学習会の中で報告していた。学習しあい、支えあう仲間がいなかったら、気弱くなってしまうて、あちらのいう通りに、納得させられてしまったかもしれない、とも。

そして最後には、「五合のマスには、五合しか入らない」と言い、人間を量でしかとらえていないことばを聞いて、こういう所には、子どもをあずけられない、ということを確認しあった。

進路指導といい、就学時指導といい、人間として大事にしたいものが、大事にされていないように思えることに、こう連続して出合うと、教育というものを大事に考える教師や、子育てを大事に思う親たちは、やっぱり、自分たちで、教育のことを考えあえる活動を創り出さなければならないと思う。

こんな願いを、おたがいに期待しあえる仲間になりたい。

小学校教師として

野 沢 美智子

「臨教審ってどう思う？」

恩師からの突然の電話で、私と民教審とのかかわりは始まった。

私の勤務校は文部省の道徳研究推進校になっており、夜遅くまで会議をしたり、教材や資料づくりにつながるハードなスケジュールの状況にあった。その中で、子どもたちが生き生きと楽しく生活しているのであれば、私も何の疑問ももたずに研究を進められただろう。しかし現実には、時間に追われ、ただ忙しいだけで、本当に子どもたちのためになっているのか疑問だった。

学校内だけでなく、社会状況とのからみからも、これでいいのかと思うようなことはたくさんあった。

塾で受験ゲームに参加している数多くの子どもたちがいる。私のクラスのK君もそうだった。四年生の頃、成績が落ちたという理由で塾に入った。五年生になると友達が多くが塾に行くようになったが、K君と同じ塾の子はクラスにはいなかった。塾がちがうと自

然と遊ぶグループもちがってくるらしく、孤立しないように、K君は気を遣い、わざと悪ふざけをしたりして友達のことをひいたりしていた。

友達と遊んでいても、時間や曜日によってみんなと行動をとにもすることはできず一人離れて塾に行かねばならない。初めのうちはそうしていたが、だんだん塾に行かなくなり、塾から親へ連絡が行ってしまった。塾側としては塾の点数かせぎに使えるような子なのでK君にそれなりに期待しているからだ。

K君の父親は小さな工場で夜おそくまで働き、母親もパートで手伝っている。姉は成績優秀で親の期待にこたえ、家事的に何もしない。ただ勉強に力を注ぐ生活を送っている。父親はK君にも期待して育てたが、だんだんあきらめてきている。

そんなこともあってK君は、塾をさぼっていることがバレてしまった日、父親にひどくしかられたらしい。翌日、学校に来ても様子がおかしい。とうとう二時間目、家庭科の実習中、突然、窓をあけ、

「おれはここから飛び降りて死ぬ。自殺するんだ」と三階の教室の窓から身をのり出し、ぶらさがろうとした。ところが、みんなは真剣にエプロン作りをしていてあまり動じない。私はびっくりしたが、心の中で待て待てと自分を落ち着かせていた。いつもならのってくる仲間たちも、なぜかその時ばかりはだれもK君の行動に反応しない。とうとうK君の方が話し出した。「きのう、おれにおやじは死ねと言った。だから死んでやるんだ」

私はやっぱりと思った。父親とおふろにでもいっしょに入つてのんびりした対話の時間を作つてやつてほしいと母親にお願いしておいたのだが、うまくいかなかったようだ。

すると七人兄弟の末っ子というT君が言った。「お前ね、親が本気でそんなこと言うかよ」

「でもおれのおやじは確かに言った。お前みたいなやつは勘当だから、どこかへ行つて死んでしまえと言つたんだ」

「ばかだなお前は。今までに何か楽しいことがあつたか。やりたいことができたか。おれは何かいいことや楽しいことがあるまで死なないよ。お前はバカだ。今死ぬなんて」と、T君は全然K君の方は見ずに針を動かす。すると周りの子どもたちも、今、自分が何をしたいか、自分の夢は何だというようなことを話し始め、教室内がざわざわしてきた。K君は、そつと窓から降りて自分の席に着きエプロンを作り始めた。

子どもたちはみんなそれぞれに夢や希望を抱いている。しかし、親やテレビなどから大人の社会を知り、否が応でもどうしなくては自分が損するのかを考えている。塾に行つてガリガリ勉強して、受験ゲームに参加するのも、その方が得だと信じさせられているからである。

しかしK君をはじめ塾に行つていても受験ゲームの結果がよくないときはあわれである。遊びたいのにがまんして勉強しても満足な結果が得られず、いつもいらいらしている。その上、親に「勘当」させられたのでは、だれだつて生きていくなくなる。

K君は心やさしい子である。運動神経はいいし、芸術面でも優れている。高校や大学の受験さえなければ、両親も息子のよい所を伸ばしてやろうと考えただろう。他の人と比べた五段階相対評価さえなければ、K君は幼い頃のように、のびのびと朗らかに楽しく学習に取り組んだだろう。

何もK君の例は特別ではない。K君のような子はたくさんいるのだ――。

恩師から「臨教審」の言葉が出たとき、私は教室にいる四十四人の子どものことを考えた。そして卒業していった中学生・高校生の子どもたちのこと、我が家にいる小学生・中学生の娘たちのこと、さらに、いつもぐちをこぼし合っている教師の仲間たちのことをも。

☆☆☆提言にこめた私の願い☆☆☆☆☆☆

臨教審を批判することはたやすい。しかし何をどうすればよいのかを考えていくなんてすごいことだ。教室の子どもたちには、何に対してもあきらめずに努力せよと言っているのに、私はそんなことできつこないとあきらめかけていた。文部省の望む道徳教育を批判こそすれ、新しい「道徳」を考えていこうとはしていなかった。

しかし、恩師との長電話の中で、次第に、わからなくても考えていかねばならない、と思うようになった。

小学校教師として

まずは小学五年生が書いた作文を読んでください。

|| もしも進歩がなかったら ||

「まてー」

犬がにげている。

もし、進歩がなかったら、原始時代が続くだろう。

ぼくは、もう空想のなかに入りこんでしまったようだ。

そして、二年間。いろいろなことを考えられるようになった。何もできないみじめな自分でも、やらなきゃいけないんだと思うようになった。

でも、K君の二年間は、それ以前の状況とほとんど変わらなかったように思う。子どもたちがおかれている状況は——さらにいつそう深刻になりつつある。一刻も早く何とかせねばという思いが募るばかりである。

大原 良知奈

では、ぼくが原始時代に生まれたら……という作文だ。それでは はじまり。

「コケコッコー」

朝日がのぼり、目がさめた。

(今、何時だろう)

といつても、原始時代には、時計はないんだっけ。

「おーい、つりに行くぞー」

とお父さんから声をかけられた。

「パシャー」

魚がうようよいる。あたり一面、魚だらけだ。何十ぴきも取ったから、もう帰ろう。

何もかもが手作り、形もかたもない生活、ぼくはわくわくしてきた。

日が南にてつてきた。

「やったぞー」

近くの村でくまをしとめた。

パチパチパチ

火のついたところにとがった木をさして、その上にくまの肉をおいた。はらいつぱいになって、わらの上に横になってねた。

ジリジリジリジリ

目ざまし時計がなった。下におりると、パンと牛乳がおいであつた。

ガムガムガム。全部 かぶりついた。

学校へ行った。

「こら」「こら」「こら」

家に帰ったら

「勉強」「勉強」「勉強」

ほとんど意識もうろうでねた。

この文からみると、やっぱ昔の方がいいなあと想像した。ぼくたちは、形にはまりすぎて自由さがなくなっている。工場、車、人、犬、みんないる、どうしている。ぼくはそんなことはふしぎに思う。なんでだ、どうしてだ、と思うことをやめたいと思う。

教育の荒廃がさかんに言われているが、現場の教師たるもの、何故か、自分の学級だけは例外と思う。自分の学級だけは楽しい明るい学級経営で行きたいと思うのは当然である。しかし、どこか他に『荒廃』がころがっているわけはなし、普通の学校の普通の先生の普通の教室の中に荒廃と言われるものは存在しているわけだ。そう、言いたかないけど、私の教室にもまぎれもなく……。

先の作文は、当時五年生の私の生徒の文である。その子の成長段階のある時期なのか、指導のまずさか、何しろこの名文家は、教室で荒れ狂っていて私を悩ましていた。彼ばかりではなかった。子供たちは『学校』というものに非常にきゅうくつさを感じているようだった。「無免許自由の会」なるものを作って、学校全体のろうかを走り回って叱られたり、担任を悩ますようなことをよくやってくれた。

ちようどこの時期、私は民教審に参加していて、小学校の中だけに居たのではとても見えない教育全体について勉強できた。私が、この勉強の中で非常に印象深く、またがっかりもしながらわかったことは、小学生から大学生に至るまで、みんな学習意欲がないということだった。どの段階の先生も子どもの意欲のなさを嘆いた。

小学校で教員をしている私は、長い学校教育の場で、子どもの意欲をなくすためにひたすら努力しているような感じがして、とても複雑な気持ちになりながら、せめて私の授業をおもしろいものにできないかと思うのが精一杯であった。また、私を悩ますかわい子供たちのあのエネルギーがシユないたずらや「悪さ」は、各方面の先生方の嘆く意欲のなさとは、どうかかわってくるのだろうかと考えさせられた。私自身いたずらっ子どもに共感できる部分では、『学校』と彼らとは、何と折り合わないことと考えたりもした。もともと身体を動かして仕事をするのなら、もってダイナミックに遊ぶのなら、冒険やスリルに富んでいることなら、自分でねうちがあると思われることだったら、きつとすばらしい意欲を示す子どもたちだ。『学校』は静かに無難に、そして、押しつけることが多い。

しかし、子供たちは学校に来る。「こら、こら、こら」の学校に元気いっぱいやってくる。

『学校』って何だろう？　と思う。

私たち教師は「明日はぜひ教科書のここまで進めなけりやならない」と考えたりしているが、子どもにとっては学んでいることはその知識だけではないはずだ。学ぶべきこともその知識だけではないはずだ。集団の中の複雑なからみ合いの中で、人としての生き方をどう学んでいるのか、そこに私は恐ろしい程の責任を感じる。が、子供たちの中にある差別感（男女、出来る出来ない、強い弱い等々）は、社会状況を背景にして意外と根強いものだ。そこに切り込んで行く元気と情熱と持続できる忍耐力と超人的な努力が教師には要求されているようだ。毎日の忙しさ、余裕のなさは、その元気を奪いそうになり、恐ろしい程の責任感のみが先立って悲愴になってくる。そんな教師のもとでは、子どもたちもあまり楽しくはないだろう。

民教審提言のうちたった一つ「子どもの定数を減らすこと」だけでもできたら、どんなに私たち教師はほっとするだろう。また、もつとゆるやかな進み方で勉強できたら、それはもう夢のよう、子どもたちとのんびり楽しく、悲愴にならずに学ぶことができるだろう。

現場の教師は、今、疲れすぎている。

子どもを人生に疲れさせないで

仲野 暢子

(中学校教諭)

子どもたちが時々言う。「セエンセエ、人生にツカレチャッタヨ。もう何にもする気がしない」。もちろんミッドシマの彼等のことだから、なんとないフィーリングでこちらをドキッとさせておいて、次の瞬間キヤッキヤと遊んでいることも多いけれど、やはり、疲れている乾いた眼、カッターのような身動きに、たまらない思いの時がある。

それはどちらかといえば、授業にも部活にもついていけないで、生活に張りのない子に多いと大人たちはよく言っていた。でもそうばかりではない。それなりに頑張っている子どもだって、なにか諦めたような、これ以上世の中に大していいことなんかありっこないという顔を見せる。そこでわたしたち教師は、何か生き甲斐とまでいなくてもハリを持ってほしいと、クラス対抗のソフトボール試合や合唱コンクール、百人一首に漢字コンテスト、班行動の遠足と次々と盛り上がるよう懸命に手伝ってついついその日暮らしに夢中になってしまっている。

それでも、三年になると、内申書につながる通信簿は一人の間違いもなく五段階の振り分けをしながらか、がんばればがんばれとおしりを叩かねばならない。「入試」という一言に、子どもたちがどんなに神経を尖らせているかは、表面からは測れない。まるでやる気もなくてと見えても、実は親から期待されるような成績をとったことがないし、これからも期待できないという気兼ねが根底にあって、ふてくされたり反抗したりしている場合もあることを知ってほしい。

塾へ行かなければ即オチコボレという強迫観念はかなり根強く、学校は差をつけられるところという不信と相まって、出費の大きさはどんな経済事情の家庭にもかぶさっている。このままでは親も子も、何かに搾取されているという、ぶつけようのない思いがする。ここ下町の飾り気のない生徒たちは言う。「オレ今度から大丈夫ちゃんとやるよ」。―いつもそう言うけど……? 「ヘエキだよ、今度から塾へ行くモン」。自分ではうちで復習などできっこないし、授業中もわかってないし……これらの正直な言い分である。一方いわゆる程度の高い住宅地では、「進度が遅れてませんか? 塾のテスト

の都合もありますし……」という具合に学校はいい進路（偏差値の高い高校）へ入れてくれさえすればいいという親の要求の強い所もある。子ども同士の相互作用や余分のことはしないでほしいという。子どもたちの教育について、同じ土俵で話し合われる機会のない日本の社会状況だと思ふ。

そしていつの間にか、まるで生徒は学校の奴隷のように身柄をすべて拘束され、家庭も従属するのを当然とする管理主義の学校が政治権力の応援を得て勢力を得てきている。その中で教師である私たちは、批判をしてもよその学校までとはとどかない。せめて自分のなす悪が僅かでも少ないことを願ひ、子どもたちの生き生きした瞬間が少しでも多いことを……というのが精々の毎日だった。

もちろん組合もそれに抗する姿勢はとっている。でも、自分たちの感じかたを直接表し、なんらかの行動を起こすにはあまりにもマンモスであり、また執行部の確執とやらで、信じられないような空白が続いたりする。私を知る限りの子どもたちの願ひ、自分を含めた親たちの思いをどこかで発掘してくれる所はないかしら……と心の隅で思っていた。そこへ政府に頼まれなくても、私たちが審議会を作ろう、世の親たちの願ひを結集してみようという話があった。私がそのメンバーに入るのは少し大それた気もするけれど、現場の人間がぜひ必要と言われてうれしくなった。時の政府はいつも党派

の都合を押し付けてくるだけで、現場で子どもたちと直に付き合っている私たちの意見を聞いてくれない。

二年と少しの間、私自身ずい分勉強させてもらった。ずんずん目が開ける思いだった。その日その日の子どもたちの幸せを追うつもりだけで余裕がなかった心に、全体像が少しずつ見えてきた。登校拒否の子に私ができることはなにか、障害児をありのままに受け入れられる学校とは？？ 高校になんで行くの？ どんな高校がほしいか必要か……。時には絵空ごととも言われたけれど、絵でもいいからみんなを描いてみるのがまず第一歩だろう。

度重なる公開審議会で、私は唯一の現役中学校教師として、何度か矢面に立つ羽目になった。どの質問も厳しかった。学校が親子の上にどれだけの重さでのしかかっているか、義務教育とはだれのための義務かを再三考えさせられる場面だった。学校の中にいて何度父母会を開いても聞くことのできない本音だった。

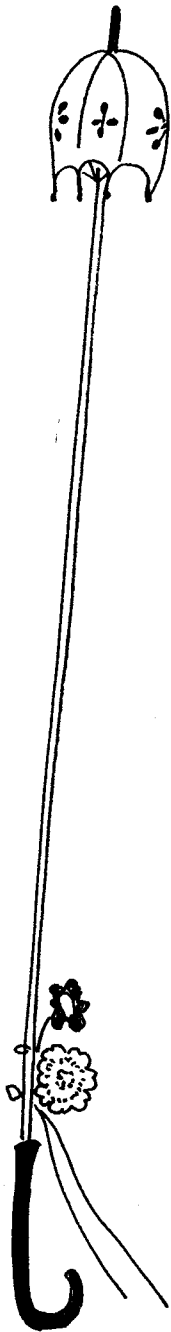
私の立場としては、やはり大人への準備を始める中学・高校生の方が一番気になる。豊富な物の中に埋もれて選りどり見どりのように見えて、実は売り付けられてだけいる。子どもは一番宣伝のし甲斐がある、紐のゆるい大きな財布だと見られていて、玩具やゲーム、スポーツ用品はもとより、衣

料品、化粧品から酒たばこに至るまで、むしり放題むしられている。健康と成長と最も必要な知識よりも、売れさえすればのマスコミに子どもがハイジャックされていく。そしてこれらがこれから生きていく世界を考えようとするとときは、信じられる情報は本当に少ないし、手に入り難い。

「学科でふるい分けしないで希望者を入れれば、子どもたちは勉強などしなくなるに決まっている」という論が世間でも罷り通っている。これほど子どもをバカにした話はないと思う。かれらはなんのためにか納得も出来ない勉強を、ただ「高校へ行かない」とか、「そんな三流では……」の掛け声だけではやれないだけだ。先が見えれば、自分で納得すれば、けっこう頑張ることはたいいの子ができる。そして机の上だけの勉強が苦手な子もいるし、ただ暗記だけでなく、判断をして動く勉強を増やさなければ、生きた勉強をしなければ、どの子も賢くならない。

私は夢ではないと夢見ている。今になって私のクラスの五人のどの子が余るとは言えない。でももし初めから三〇人だったら、もう少し自分から勉強するようにできるのに……。こんなに輪切りの入試がなくて、自分で中身をよく見学して選べるのなら、中身に注文もつけられるなら、もつと張り合いく勉強するだろうに……。社会は子どもを食い物にするのでなく、真実大切にしてほしい。そして子どもも、利用されるためのアルバイトでなく、本当に身に着く勤労学習体験のチャンスができれば、きつと世の中のために大人が考えているよりずっと役立つと私は保証できる。

まず皆さんに討論の材料を差し出す仕事は一区切りついたけれど、中身をひとつひとつ吟味することがとても大切で、時間もかかる。そして実現するための方策についても、もつと多くの人々と力を合わせることができたら、夢ではなくないので……。



高校教師として

樋浦敬子

二月に男の子が生まれた。結婚十一年目、初めての育児に新米両親は遅ればせながら奮闘中である。育児は育自とはよく言ったもので、まだ短い子育てながら自分自身が裸にされ問い直される毎日というのが実感である。それにしても子どもって一人一人みんな違うのだ、教科書通りの子どもなんて一人もいやしない、大人はその子どもの成長していく力を信じ手を貸しながら見守るしかないんだという認識が今の学校に欠落しているのだということを、子どもの成長していく姿に見惚れながら改めて思い知らされている。

女性民教審にメンバーとして加わらないかとの誘いを半田さんから受けたのは、昨年の八月であった。現場の声を反映したいのとその理由を説明された。私の体験など小さなもので現場の声を代表することなどできっこないことは重々承知していたにも拘らずお引き受けしてしまったのは、生徒も教師も窒息させかねない臨教審に対する強い危機感、小さな経験ではあっても私の周りにいる心優しき、でもちつとも生き

生きしていない生徒たちの思いや一生懸命なのだけれども喜びより徒労感の方が強く、とても疲れている教師たちの思いを伝えたい、そんな気持ちからであった。その後、回を重ねる毎に大きくなっていくおなかを抱え参加させていだいた。

高校生は今——二つ続けて新設校を経験した。神奈川県では高校を百校新しく作った。どの高校も一見建物は立派だが、中にいる肝心の生徒は生き生きしているとは言いがた。神奈川県で数年前一校分（千五、六百人）の生徒が一年にやめたと話題になったことがあるが、学校に適応出来ず、あるいは進路変更の名の下に学校から去っていった生徒の数も多い。今高校生は何故か疲れることを嫌がる。めんどくさい、だるいを連発する。また「暗い」のをひどく嫌う。彼等は真面目と暗いをほぼ同じ意味で使うことが多く、真面目もまたひどく嫌われる。従って生徒会や学校行事などは一部の物好きな生徒のやること、暗い・ダサイこととして成立ちにくく、文化祭などもお揃いのユニフォームを作ったりすることには熱心だが、肝心の中身となると手間暇かけずともその場がとにかく盛上がるものを作りたがる傾向にある。集団でい

つも笑いが絶えないことを好み、一人で行動することを大変嫌がる。最近テレビで高校生の集団飲酒を取上げていたが、「宴会」の効用は明るくなれ、ホンネが語れることだと高校生がインタビュに答えていた。異性との交際に強い憧れを持ち、そのためには大変な努力をする。そしてカップルが成立するとセーターを編んだり、お弁当を作ってあげたり的女子が男子に「尽くす」パターンにほとんどがなる。女子の結婚・出産への憧れは年々益々強まっているように思う。

授業はただ黙って座っていれば良いものが好まれ、テスト前に何を覚えればいいかを端的に示してくれる先生が評判が良く、討論で自分の意見を求められることや、テストで自分の考えをまとめて述べるような問題を出されることをひどく嫌う。生徒自身の希望など関係なく輪切りで高校を選ばされたことについてもあまり不平・不満が言われなくなった。しかし校門を出ると校章をはずし、すぐにどの学校かわかる制服を恥ずかしいと嫌がる。成績の良い者を「あの人は頭が良い」と表現する生徒が多く、偏差値に象徴される「学力」を決定的なものとして受けとめ、自分の能力については根深いところで諦めてしまっている。高校入試以来ほとんど勉強していいと言ひ、勉強は大嫌いと言ひながらも、大学に行きたい、行かねばと思っている生徒も少なくない。学校の細かな規則についても入学当初は違和感を強く表明するが、そ

れを変えようというエネルギーを持つ生徒は少なくなった。むしろ教師の側が見直しを始めるとだらしなくなると異議を唱えたり、何となくうるさく言われないと物足りないと言う生徒も出てきている。

でも考えてみれば当たり前のことではないか。今の社会が学歴を何よりも重要視し、頭を使う労働を何よりも価値があるとしていると、小さい頃から大学入試という「最終ゴール」に向けて繰返し競争させられ、いつも順位をつけられ、ひた走りに走らされてきたのだから。一人一人の違いは全く尊重されることなく、自分を主張する機会は奪われ、自主的に行動できるように育てられたことはほとんどなく、教師の指示通り動くことをいつも求められてきたのだから。学校は絶対であり、生徒や親の意向はほとんど受入れられることなく「学校経営」が行われてきたのだから。

学校を変えたい——提言は現状を考えるとまさに夢物語と思われるだろう。だが徹底した意識・制度改革なしには学校をどの子も生き生き自分を伸ばす場所に変えることはできないのだ。以下、何故今このような高校改革案を提言しなければならないと考えたか、いくつかの項目に絞って述べてみたい。

高校の入口と出口を変える——高校入試がなくされ、大学入試が大きく改善されることの意味は大きい。高校入試がど

れだけ中学校の生徒も教師も苦しみ、その教育内容や人間関係をゆがめてきたことか。そして瑣末な知識を覚えていくかどうかで決まってしまう大学入試が高校の授業をどれだけ魅力のないものにしてきたことか。自分の知的好奇心を広げ、考え・知る喜びを味わうことや自分の修得したい技術や知識を身につけることが勉強であるという当たり前の認識が、中学や高校の授業を魅力的なものにし、生徒に学ぶ喜びを回復させるはずである。もちろん入試も内申書もなくなれば教師の本来の意味での力量が問われることになる。そうした徹底した入試改革は、数校の中から選択できる中学区制にしても、学校のランクづけを生まないはずである。地域にも地元の高校を育てるという視点が欲しい。

高校の中身を変える——単位制ですべてを総合高校にするというのは教員の定数や設備の面で確かに大変なことであり、技術面で解決しなければならない問題も多い。しかし生徒は自分がやりたい勉強ができることで意欲を持って充実した三年間を過ごせるはずである。必修科目については色々議論があると思うが、歴史的視点・国際的視野をきちんと持ち、平和を志向し、弱者・少数者の痛みを共感できる生活者として自立した人間をめざすなどの「人間として市民として自立する」ために必要なものは全員で学びたいと思う。

やり直しがきく——現在は一度高校をやめてしまったらも

う一度やり直すというのはなかなか困難である。従って学校に適応できずに苦しみながら、でも在籍している生徒も少なくない。やり直しができるシステムが確立すれば、生徒の生き方の幅が広がり、そういった様々な生徒も受け入れることで学校もまた活性化するのではないかと思う。

生徒・親・地域住民の参加——現在残念ながら生徒・親と学校、地域住民と学校は信頼関係にあるとはいえない。生徒・親・地域住民が学校運営に参加することで学校の閉鎖性を打破し、教師・親・地域の人々が力を合わせて子供を育む態勢を作りあげたいものである。これは高校も同じである。

今やらねばならぬこと——提言にはどの項目を取ってみても背景に学校、とりわけ教師の現状に対する厳しい批判がある。きわめて短い間ではあったが、メンバーとして民教審をお手伝いして毎回皆さんの厳しい批判に身をさらしながら実に多くのことを学ばせていただいた。審議の内容はいつも大変刺激的で、いかに学校や教師集団というのが閉鎖的であるか改めて痛感させられた。そして例外なく超多忙なメンバーが時間のやりくりをして集り、教育を語る情熱、その自由な発想にしばしば圧倒されたものである。提言を夢物語に終わらせないために今何をなさねばならぬのか、わが子とそして妊娠から今に至るまで私を励まし支え続けてくれている心優しい生徒達と向き合いながら、提言の重みをかみしめている。

もしも臨財審を開いたら

樋口恵子

(東京家政大学教授)

臨教審もいよいよ大詰めを迎えたが、予想通り「泰山鳴動して、悪い鼠一匹」という結果に終わりそうである。子どもたちの悲鳴、親たちの願いは、ついに臨教審には届かなかった。今後、インテリジェント・ビルというのが立ち並ぶことだけは確実だろう。ニューメディアを駆使した新たな教育産業は、民活の一環としてさかんになるかもしれない。答申の中で、経済活動を活発にさせる部分——ありていに言えば儲けにつながる部分だけ先取りされる姿が目に見えるようだ。おそらく臨教審の置土産は、愛国心につながる「さらなる管理」と、「教育民活」の二つであろう。「さらなる管理」のほうは、すでに初任者研修のかたちで文部省が先取りしている。「国旗・国歌」の強制が今年になってから、より強化されたことは、ニュース等でも明らかである。こうなると、臨教審の初期、言葉だけでも「自由化」「個性」がさかんに飛び交っ

たころがなつかしい。

発足当初臨教審は何はともあれ、中曽根内閣の目玉商品であった。そのころ、新聞を開くのがこわくなるほどのいじめ、自殺、校内暴力などに、親たちおとなたちは戸惑い、立ちずくんでいた。だから「臨教審」のスタートは、多くの国民に期待をもつて受けとられ、恐らく中曽根内閣初期の支持率の高さにつながったにちがいない。それほど、教育は歪み、歪んだ姿が人々の目の前に明らかになっていった。

しかし——と今、私は考える。歪んでいたのは「教育」だったのだろうか。だとすると、それを歪ませたものは何だったのだろうか。私たち女性民教審は、乳幼児段階からの教育のあり方を討論し積み上げてきたが、そこではっきり見たものは、どのような教育改革も、最終的に子どもがひとり立ちして生きる社会の受け皿が、その改革につながるものでなかったら、決定的な効力を持ち得ない、ということだった。

今、日本の偏差値受験競争は低年齢化する一方だ。「いい中学」「いい高校」「いい大学」の「いい」は「偏差値の高い」こととほとんど同義語であり、それは「いい大学」に直結する。「いい大学」は「いい就職先」への安全コースだ。「いい

就職先」というのは、安定した、比較的高収入の「良好な雇用機会」。有名大学付属校への進学塾の広告に「人生のグリーン席をお子様にとあつたように、「良好な雇用機会」は一部の大学卒業者が大半を占めてきた。それは、現在もお公然と行われている企業の指定校制度であり、特定の大学に目的を絞った就職の青田買いである。戦後、長年にわたって、企業側が就職試験の手間ヒマを省いて指定校制度に依存し、学校間格差を拡大してきた事実是否定できないだろう。

就職の受け皿としてのあり方を含め、私は「臨教審」よりもむしろ必要だったのは「臨財審」ではなかったかと思う。

臨財審——すなわち臨時財界審議会である。日本の財界、経済界ひいては企業のあり方が、子どもの健やかな成長のために誤りを犯していないか、問題があるとしたら何を改めればよいかを、子どもの立場に立つて審議する場である。そんな場を夢想するほど、戦後日本の経済第一主義は、日本の子どもへの教育を歪ませてきた。政府がこのような審議会をつくるはずはないが、臨教審メンバーに著名な財界人や、財界につながる人々の名を散見して、私はできることなら、経済に教育を従属させた現状を反省する場になってほしい、とはかたい願いを持った。財界が多少とも姿勢を改めなかったら、彼らの「子どもたちへの罪」を自覚しなかったら、教育改革は大きな力にならない。思えば現在の学校が持つさまざまな問

題は、戦後の学校教育がやすやすと経済界の要請に従属したことに始まると思う。政治家を「財界の男メカケ」と呼んで物議をかもした国会議員がいたが、戦後の学校教育、特に高度経済成長期以降の教育は「財界の侍女」と化したのではなかったか。

戦時下の少国民であつた私は、戦争中の教育が完全に「軍の意向」に従属していたことを肌で思い出す。教育の本身は、言葉づかいから挙措動作のすみずみまで、見る見る軍隊式に切り替えられた。中学校では配属将校や下士官上がりの教練の教官が、一般の教員はもちろん、校長さえ支配下に置いた。その時代の中学生なら多くの人が記憶していることだ。

今、配属将校も教練の教官も学校にいなかった。少なくとも日本の教育は直接的に軍隊に従属していることはなさそうである。しかし、それにしてはなんと戦前の兵營に学校は似てきたことか。揃いの制服、一斉の動作。与えられた命令を忠実に実行する。要求されるのはスピードと正確さ。排除されるのは、てんでんバラバラな動きとはみ出しと非能率。軍隊ではそれでも「のらくろ二等兵!」とか「ブル連隊長殿!」とか固有名詞が使われた。戦前の学校でも生徒は呼捨てながら固有名詞と呼ばれた。ところが現在の学校の中には、揃いのジャージに番号をつけているところがある。ヘアスタイルも服装もあんまり「同じ」に統一してしまったものだから、

見分けがつかなくなつて番号が登場したようだ。今どき揃いの服に番号つけて……となると、いやでも「檻の中」の人々を想像してしまふ。でも学校は刑務所よりは軍隊に似ている。刑務所で求められるのは、あくまでも服従であつて、能率のよさはお門違いというものだろう。能率が求められ、「有能」と認められた者がすいすいと上昇気流に乗っていく。「有能」な人だけが生き残ることができる。だれもが「一将」をめざし「万骨」に甘んじたくなくて努力する——軍隊でないとなれば、それは現在の経済戦争をたたかう企業の姿そのものである。目的に向かつて、ムダを排して一直線に邁進。効率的に分業し、指揮系統は明確に示されている。一方で従順、一方で枠の中にあくなきチャレンジ精神が求められる世界。

日本の企業が戦後驚異的な発展をとげ、おかげで私たちの生活水準は急上昇した。そのことの恩恵はもちろんおとなに限らず子どもたちも受けている。その最たるものは、医療・公衆衛生、栄養水準の向上による乳幼児死亡率の低下である。そして、貧しさゆえに進学を断念する子どもたちも急激に減少した。かつての親と子の上に、貧しさゆえに出現した悲劇はほとんど姿を消した。しかし、現在の子どもたちは貧しさの代わりに、偏差値に追い立てられている。物の豊かさ、に申し分がなくなつた代わり、自由に遊べる時間、空間、仲間のサンマは極端に貧しくなつた。日本人は総じて働き過ぎ

で、「金余りの時間貧乏」と言われるが、「時間貧乏」の代表的存在は子どもではないだろうか。

私はよく例に引くのだが、漫画『サザエさん』全六七巻を通読すると、日本経済の高度成長と反比例するように、子どもの生活空間と時間と具体的経験が、三拍子揃つて狭められていく経過がよくわかる。『サザエさん』は、戦後間もない一九四六年、日刊紙の連載マンガとして始まり、その後時おり中断しながらも一九七四年初めまで、戦後の約三十年間描きつづけられた。主役はもちろん若き主婦サザエさんだが、準主役として大活躍するのが、カツオくんワカメちゃんという年の離れた弟妹だ。とくにカツオくんは三十年間終始一貫「小学五年生」として登場するため、彼を軸としてこのマンガを通読すると、小学生という立場からは日本の高度経済成長を定点観測する感がある。昭和三〇年代半ばごろから、カツオくんの生活水準は目立って向上する。小さな座り机は勉強用のデスクと椅子に、家庭の中もみるみる電化がすすんでいく。しかし、そのころから、カツオくんの生活の上に豊かに存在した「遊び」と「労働」が衰退していくのだ。外の遊びの場面が少なくなつて、家でゴロゴロしてテレビを見たり、勉強に追われる姿が多くなる。万博を過ぎるころ、つまり高度経済成長がピークに達するころには、カツオくんの家の周囲にわずかに残された空き地にまでバリケードが張られ、ゴ

ルフ練習場につくり変えられる。犬や子どもが自由に遊んだ路上は、とくに地域の生活の場としての機能を失い、「車道」となり果て、わがもの顔にひしめくのは車のみである。

「おとなの遊び場ばかり作って。子どもの遊び場も残せ」と書いたブラカードを、カツオくんたち子どもが押し立てて、最後の原っぱに座り込む場面がある。東京っ子になつかしい「原っぱ」終えんの図だ。保守的で小市民的な日常を描く『サザエさん』にしては、珍しいほどに「過激」な光景である。それほどに、子どもたちの空間は、高度経済成長の中で商品によって奪われ、狭められてしまった。

もしも今、子どもたちの立場に立つ、戦後日本の総決算として「臨財審」を開いたら、高度成長の「罪」の部分が新たに見えてくるのではないか。「戦後」の総決算というからには、戦後四〇余年の最大の変化であった高度成長の影響を点検することこそ、まず最初になすべき作業であり、それが「臨財審」の役目である。ほんとうは、中曽根さんの臨財審も、この視点からの自己批判から出発すれば、多少とも子どもの現状に風穴をあけることができただろうに。

「臨財審」は、「経済復興」が貧苦にあえぐ敗戦直後の日本人の悲願だった事実から論議を始めるだろう。「文化国家」のかけ声はあっても、まず「食う」ことが優先する貧しさであった。だから、経済復興が、やがて所得倍増計画が国民の

熱い期待を集めたとしても無理はない。しかし、経済が力を持つにつれて、教育——とくに学校教育が、形を変えることになった。とくに昭和三〇年代半ば以降、文部省が打ち出したさまざまな制度改革と、日経連教育部を中心に出された財界からの教育提言を重ね合わせてみるとはつきりする。理数系統を中心とする教育内容の過密化も、早期からの選別につながる高校多様化も、性別役割分業のもととなる家庭科女子のみ必修の強化も、財界からの要望が出発点になっている。

戦後教育は「個の全人的発達」という理念がまだ根を下ろしきらないうちに、財界の注文書に応じて、経済発展に必要な労働力供給源としての機能にやすやすとはまり込んでしまった。これぞ国家有用の人材を教育する機関であった戦前からの伝統の所産で、ただ国家の重点の置き所が変わっただけの話である。こうして教育は経済に従属し、家庭も労働力の「いこいの場」として経済に従属していった。父親の家庭責任は、稼ぐという責任だけに歪小化された。そのことがどれだけ日本の家庭教育や夫婦のありように歪みをもたらしたか——。

もしも子どもの立場から「臨財審」が開かれたら、そのような過程が一つ一つ明らかになるのではないか。私たち女性民教審はそこまでは力及ばなかったが、子どもの立場、母親の経験から、つまり「財界」から離れて人間の教育を考える立場で、いささかながら新しい視点で提言できたと自負している。

その家庭観を撃つ

半田たつ子

〔新しい家庭科We編集長〕

臨教審は、第二次答申（86年四月二十三日）で、「家庭」について熱心に述べた。『い

じめ』を苦に、自ら命を絶つ少年少女があいつぎ、「なぜ」「どうして」と、誰もが胸潰れる思いをしている時期だったので、第二次答申には、特に『いじめ』問題への当面の対応』という節もあった。

すなわち、昨今のいじめの事例は、●幼児期からの自己抑制力の不足 ●温かい人間関係の欠如 ●子どもの前での不用意な教師批判 ●教員と子ども間の節度をこえた言葉使い ●仲間外れを恐れるあまりの追従や忍従などの子どもの特性 ●表面的行動にとらわれその実態を見誤った教育の対応 ●面白いことを価値ありとする風潮などによるものだという。そして、いじめ、校内暴力、少年非行など教育荒廃の背景には「家庭教育の役割が十分に果たされていないというゆゆしい問題」がある。「家庭は反省し、自らの役割や

責任を自覚することが何よりも重要である」と。これが、臨教審の主張である。

▽何を反省したらいいのですか？

▼ひとつ、「乳幼児期における基本的な生活習慣や価値規範の形成、しつけの不足」「とくに母子相互作用の不足、就業形態の変化による親の不在」など、家庭機能の衰弱を。ふたつ、「家庭の生活上のストレス、乳幼児期における親子とくに母子相互作用の不安定」「しつけ、自己抑制力、基本的な生活習慣の形成が不十分のまま、過保護、過干渉、放任など子どもの心身の健康に配慮しない不安定な家庭教育」によって、いじめっ子を育ててしまったことを

▽はい、はい、みんな思い当ることばかり。きびしく反省いたします。それでは家庭の役割や責任をどのように自覚すればよろしいのでしょうか？

▼乳幼児期の母子相互作用によって、基本的な信頼関係を確立せよ

▽では、父親はいかがいたしましょう？

▼母親の精神的支えとなれ。それが父親の育児参加だ

▽? ? !

▼乳幼児期の基本的な生活習慣こそかんじんだ。しつけは適時・的確に。特に耐える力、自己抑制力、他人に対する思いやりを身につけさせよ。家庭科は「親になるための学習」として見直せ

▽「しつけ」で、いじめは消えますか? 親になるための教育を、小学校五年から始めるのですか?

▼将来、よき家庭人になるためには年齢段階に応じた学習の内容や方法を検討することが必要だ!

▽子どもが知りがつっているのは、もつと他のことです。お兄ちゃんには勉強しなさい、わたしにはお手伝いしなさいって言うのはなぜ? 中学生はなぜ詰襟の制服着るの? 日本の家はなぜこんなに狭いの? おなかいっぱいになるまでおやつ食べたなら、なぜダメなの? 結婚するとなぜ赤ちゃんがうまれるの? なぜ男の子には声替わりがあるの? 自分のこと、家族のこと、生活の中で知りたいことが山ほどあるのに。それをさしおいて?

▼臨教審の使命は「我が国における社会の変化及び文化の発展に対応する教育の実現を期して各般にわたる施策に関し必要な改革を図るための基本的方策について」内閣総理大臣の諮問に答えるところにある。21世紀に向けての教育の基本的な在り方を示し、家庭・学校・社会を通じる教育改

革の諸問題について、総合的・基本的な改革提言を行うのが任務だ。そんな次元の低い問題には答えられぬ

▽ああ、子どもの悲鳴からも、親の苦悩からも、全く無縁なところで生きてきたあなた方。いったい現実をどのようにして把握したのですか?

▼「文部時報」昭和六二年四月臨時増刊号を見たかね。文部省が提出した資料、関係省庁ヒアリング資料等が載っている。関係の統計資料に限らず目を通してきておる

▽統計ではなく、なまの声に耳傾け心震えてほしかった——その半面、21世紀に向けての教育改革を打って出ながら、新井戸端会議、シルバー人材の活用、学校給食への親の参加、手作り弁当の日——瑣末なお節介の焼きすぎですよ

現代の家庭は、自由意志によって結ばれた男女が、自由意志によって子どもを産み育てる場だ。そこでは金で購い得ない人間関係が営まれる。家庭の機能や形態は、社会の変貌とともに縮小し、変化したけれど、子どもを養育し、自立を助ける営みが中心であることに変わりはない。生まれた時、到底一人では生きられなかった子どもは、衣食住を保障され、心の安定を得て養育される中で、自立する力をつけていく。父母、きょうだい、祖父母などの他者に出会い、ともに生きることが学んでいく。

国家が成立する前から、学校制度などなかったはるか昔から、人間の男女は、あい求め、あい寄り、愛を交わし、新しい生命を生み、子どもを一人前に育て上げてきた。そこに国家が強く介入し、女性に家庭責任を押しつけて、家庭の機能を維持しようと回る時、ロクなことがなかった。

たとえば太平洋戦争が始まる昭和十六年四月、厚生省は、優良多子家庭の子女育英補給要綱の通牒を出し、戦争遂行のために「産めよ、殖やせよ」は国策となった。

同年七月、文部省は「臣民の道」で、家と国家と天皇の繫りを説き、女に、家父長を敬い家を守ることを要求した。

昭和十七年、文部省は「戦時家庭教育指導要綱」を判定、伝統的家族制度を強調し、日本婦道の修練、家庭生活の国策への協力を要請。「要綱」は、「母の戦陣訓」とも呼ばれた。

こうして、母親や家庭が戦争に協力させられていった苦い歴史を、私たちは決して忘れてはならないのだ。

たとえば昭和四十六年、中央教育審議会答申「期待される人間像」の中で「女子の特性にもとづく教育」がはっきり打ち出され、あるべき家庭像・家庭人像が提起された。その三年前、「家庭生活問題審議会」は「期待される家庭像」を答申している。義務教育の中に男女二系列の技術・家庭が持ち込まれ、高校の家庭一般が女子必修となる。名目は「女子に対する教育的配慮」いずれも一つの根っこから出ている。

しかし、一九七五年の国際婦人年、続く国連婦人の十年は、全世界を挙げて女性差別の問題を解決しようという奔流を生んだ。なかでも男女の固定的な性別役割分担意識を砕こうとする「女子差別撤廃条約」は、地球規模の連帯の中で生まれた画期的な国際条約であった。日本人はこの意識に頑強に縛られてきたが、いま「男は仕事、女は家庭」を否定する人は、年を追ってふえている。

一九八五年の国連婦人の十年最終年世界会議では、「二〇〇〇年に向けて婦人の地位向上のための将来戦略」が採択されている。それなのに、21世紀に向けての教育改革をうたいながら、臨教審の答申のどこにも、男女平等の言葉すらない。はじめて家族問題を取り上げた84年の「国民生活白書」は、「家庭機能の活性化」「家族の意識や役割の再認識の促進」などを強調している。権力者が「家庭」を持ち出す時、隠された意図を見抜く力、私たちにそれが問われる。私たちが「私の家庭観」を持っているか、それが問われる。

子どもは、現在の生命を維持し、幸せに生存する権利と、将来にわたって成長する権利、幸せを自ら選ぶとる権利を持つ。親は、子どもが自らその権利を行使できない時に代行してその実現を図ろうとする権利と義務を持つ。

国家のための家庭？ ノン！ 学校の下請け？ ノン！
臨教審のお節介を許さない、私たちの家庭観をこそ！

「障害」ある子もない子とともに

梅村 浄

(小児科医)

この春から、私たち家族は、私の両親と近くで暮らし始めることになった。我が家の子どもたち三人にとっては、毎年、夏休みごとに、九州へ行って会っただけだった祖父母と、

いつでも会えることになったわけである。左片麻痺の上の娘は、近くの中学校へ通っている。手足が不自由で、勉強も皆と同じにはやっついていけない彼女にとって、祖父母の家は、たちまち、またとない放課後のくつろぎの場となった。

「お姉ちゃんは、学校に行った日は、顔付きが違うねえ。きりっとして、きれいになるねえ」と、ある日、その祖母が言うのである。娘は、赤ん坊の時、「障害」をもってからも、ずっと近くの保育園へ通い、小学校へ通い、中学校へ通い続けてきた。その生活が、余りに当たり前だったので、私たちは、「学校へ行った日には、きれいになる」とは、思っ

うもそんな風なのだ。難しい英語も数学も、新しい転校生が来て隣の席に坐ったことも、休み時間に男の子たちから輪ゴム鉄砲でうたれて、悔やしかったことも、すべて、一日の学校生活が、顔に映し出されている。

私たちは十年來、東京の西部にある田無市に住んでいる。人口七万人の小さな町で、毎年、小学校へ入学する子どもたちは千人とちよつと、そのうち三、四人が「障害」をもっている。十年前、娘が三歳だった頃には、なかなか入れなかった保育園や幼稚園が、だんだんと「障害」をもっている子どもを受け入れるようになった。最初、どのように保育をしていったらいいのか、とまどっていた保母さん、うちの子が元気な子どもたちと一緒にやっていたのかと悩んでいたお母さんたちも、今では、それが当たり前のこととされている。しかし小学校となるとわけが違う。毎年、年長児のお母さんたちは、十一月に行われる就学時健康診断のことを考えると、心が暗く沈んでしまう。身体検査と知能検査に合格しなければ、皆と同じ学校へ入学することができないから。就学時健診は、千人の子どもたちにとっては、「さあ、もうすぐ一年生」という気持ちになるうれしい行事かもしれない

い。でも、三、四人の子どもにとっては、「皆と一緒の学校には行けなくなる」恐ろしい閉門となってしまうている。「これはおかしい」と考える親たちが集まって、田無市では、三年前から、市教員会に對して、「就学時健診に反対し、これを拒否します」という申し入れを行ってきた。

この申し入れは、ある程度尊重され、「障害」をもっている子どもが、校区の小学校へ入学することは、以前に較べると多くなってきた。黄色い帽子をかぶり、ピカピカのランドセルをかついで学校へ行き、帰りには、「今日、あそべる?」と、友達と約束して帰ってくる。子供にとってはもちろん、家庭にいる親にとっても、職場と家を行き来している親にとっても、子どもの小学校入学は、暮らしている地域の生活につながっていく大きなきっかけとなるようだ。隣の子も、向うの通りの子も、顔と名前がいつそうよく見えるようになる。

私たちは、「障害」をもっている子供の親や保育園の保母さんと一緒に、毎月一回、ささやかなおしゃべりの会を開いている。でんでんむしの会という名前のおり、ゆっくりしたペースの会であるが、ここでは、子どもたちの学校での生活ぶりがざくばらんに話される。「障害」のない子の親や、たまには、小学校の先生方が参加されることもある。

五月の例会には、一年生になったばかりの女の子が参加し

ていたが、皆の心配をよそに、とっても「よい子」で席についているとのこと。担任の先生も、彼女のためにプリントを作ったり、道具をそろえたり、色々と配慮して下さっているようだ。しかし、どの子の場合も、こううまくいくわけではない。四十名のクラスで、一斉に教える授業形態から、どうしてもはみ出してしまいう子どももいる。そういう子どもに接した経験のない先生は、とまどって「この子に適した特殊学級か養護学校に行った方がよいのでは」と考えられ、親にもすすめられる。親の方も、先生や友達とうまくやっていけない子どもの様子を見て、悩んだあげくに、学校を代えることもある。

以前、小学校の先生方と話し合った時に、特殊学級の先生から「今の普通学級は教えなければならぬ内容が多く、普通の子にとってさえ非人間的なところになっている。特殊教育と言われるが、私たちは、これが特殊なものとは思っていない。むしろ、その子どもたち一人一人の個性を尊重し生かすという意味で、教育の原点に立つものだと思う」という発言があった。確かに一面から見ればそれはそうかもしれない。しかし、現状は、普通教育についていけない子どもを切り捨て、地域の子ども同士の暮らしから隔てる役割りを果たしていることを、私達は見逃すことができない。むしろ、なぜ、そのような教育の在り方を、普通教育の側へ積極的に切

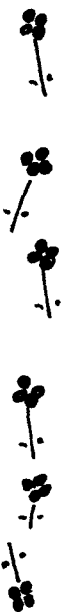
り返していかうとされないのかを、問いたいと思うのである。

二年前、女性による民間教育審議会の審議メンバーに加わった時、臨教審は、まだ「障害者」教育には触れていなかった。本年四月、第三次答申を読んだ時、悪い予感的中してしまったなど思った。二十一世紀の日本のために、効率のよい人づくりを目指す臨教審にとつては、「障害者」教育の目的は、社会人となった時に「立派に」自立していける「障害者」をできるだけ多くつくりたい。そのためには「障害」をできるだけ早く見つけ、もっている能力を最大限に伸ばすための訓練センターや特殊学級・養護学校を充実させる。臨教審も、「障害を有する者も有しない者も共に社会を構成する一員であり、共に社会をつくりあげるべき仲間である」と言っているのだが、乳幼児期から、地域の子どもたちと切り離されて訓練を受け、小学校・中学校、さらには高校までも、特殊教育を受けた時、社会に出ても共に働き、生活することは、なかなか難しいのが現実である。

昨年四月に女性民教審の教育改革提言をまとめる時に、「障害児」教育についても討論を行った。その中で「障害児」

は、自分の住んでいる校区の普通学級へ通学することを原則とすることに、メンバーの合意が得られたのであるが、その後一年間にわたる高校・大学問題、社会や国に望むことに至る討論の過程でも、私にとつては、この原則がもっている意味が問われ続けてきたように思われる。「障害」をもっている子どもだけではなく、すべての子どもにとつて学校教育が競争と選別の場となり、能力のある者は「良い」教育をうけ、将来の「良い」社会生活を保障されるという日本の教育全体の在り様を撃つていくことなしには、「障害」のある子もないう子もともに学び、育ち合う学校は実現しないのではないかという思いである。

私は、娘のきりつとしてきれいな顔付きが、いつまでも続くようにと願って、女性民教審の活動に参加したのであるが、それぞれの持ち場で、同じ想いをもって踏みこたえている女たちに出会えたことに驚いている。そして、二年間、お金のことから、事務全体をひき受けて活動して下さった事務局、意見やカンパをお寄せ下さった賛同者の方々に、心からありがとうを言いたいと思う。



軍隊からもつとも遠い学校

それが「国際化」

大 沢 周 子

(フリー・ライター)

羊になれ、という動き

壁にぶつかって、初めてそこに壁のあることを知る。私はそういう目の昏い母親であつた。

ニューヨークから帰つた時、三人の子どもは、高三、高一、小六であつた。日本の小学校に転入した息子は、やがて一日いちにち元気をなくして行く。ニューヨークでは小学校一年から六年まで、サッカー大好き、スキー大好き、学校へ行くのが楽しく仕方のない男の子であつた。そういう彼が、やがて学校へ行くことができなくなる。

日本では、「みんなと同じ」でない者の前には、なぜ、このように壁が立ちふさがるのであるうか。この「なぜ」のなぜ解き作業が昨年、秋に出版した『たつたひとつの青い空』という一冊の本を書く行為であつた。

なぞを解くには、海外から帰つて来た子ども、日本で生まれ育つた子ども、この両方からのアプローチが必要である。何人もの子ども、お母さん、そして先生に会つた。

わかつたことは、「みんなと同じ」でないのは、帰国した子どもだけではない、ということであつた。日本で生まれ育つた子どもも、二人と同じ子どもはいないのだ。それなのに「みんなと同じ」子どもにさせられてしまつてゐる。

帰国した子どもたちは、ホントウのことを言つたために、はじき出された。しかし、日本で生まれ育つた子どもだって、ホントウのことを言いたいのだ。言いたいのに言えない。何かがおかしいぞ、と叫びたいのに大きな声が出せない。だから、いらいらして、むかついて、帰国した子どもを、はじき出したくなるのだ。

二人と同じ子どもはいないのに、「みんないっしょ」「みんな同じ」にさせられてしまつてゐる。そのほうが管理しやすいから。

わが子が日本の学校からはじき出された時、親の私を感じ取つたのは、上のほうから吹いて来る強い風であつた。

右向け右、の号令一下、羊のようにおとなしく、群れて動いて行く人間をつくろうとしている強い風であった。

異質な存在をはじき出したくなる集団づくり。同質であることが安全なんだよ、と教えているのである。上のほうから吹いて来る強い風は、それをめざしているのだ。いじめは子ども社会の病理現象などと、文部省の手引書は解説している。しかし、病理現象は、温められ、培養され、ひろがりこそすれ、鎮める有効な手だてがないのは、むしろ、上のほうの思うツボではないのか。

コントロールしやすい、流されやすい人間づくりこそ、目的ではないのか。

首相が朝から晩まで「国際化」「国際化」と叫んでも、いっこうに国際化の実が上がらないのは、実はウラ声で「同質であれ」と歌っているからではないか。

私はそんな気がしてならない。

／＼ 庄しつぷさるる自由な心

『たったひとつの青い空』が本屋の店頭に並んだ直後、俵さんからお電話をいただいた。横須賀線に乗って、東西線に乗って、神楽坂に通う日々が始まった。

そこに、日本の子どもたちを救おうとして闘っている女性たちが二十八人もいた。

ゴマメノハギシリであることは百も承知で出した本であったが、民教審のメンバーは、ゴマメノハギシリなんぞではない、パワーのある、勇気のある二十八人であった。

会合のたびに「帰国子女問題」と、世の中で言われているのは、帰国した子ども問題ではなく、日本国内の子どもたちの問題ではないか、という私の思いが、まちがってはいなかったことを確かめることができた。

自分の子、帰国の子だけが幸せになる方法などないことを、私は、私の周りの帰国の親たちに伝えていかねばならない、と思い定めたのであった。

五月二十八日、外国人の夫と結婚した日本人女性の会と、日本人の夫と結婚した外国人女性の会と、帰国した親の会と、三つのグループが「世界に通用する人間を育てるために」というシンポジウムを開いた。その席上、現職の教育委員の一人が、「ここにお集まりの外国人のお母さま方、日本の国際化のために、どうぞご自分のお子さんを日本の小・中学校にお入れください」と発言した。

すると、さつと手を上げた山内クレアさんは、

「私はいま、お腹に九カ月の子どもがいます。日本の学校は、人間のスピリッツをこわすということが、この会に出てよくわかりました。私はこれから生まれて来る子を、日本の国際化のために犠牲にするわけにはいきません」と言った。

これは痛烈であった。

日本の子どもたちの通う学校が、一人ひとりのあるがままを認める学校、自ら独立して考える個人を育てる学校であるなら、「どうぞお入れください」と言われなくても、在住の外国人の親たちは、安心して日本の学校に自らの子どもを入れるであろう。

逆の言い方をするなら、外国人の子ども、帰国の子ども、難民の子ども、残留孤児の子ども、感受性の豊かな子ども、ぼんやり夢見る子ども、ほんとにそうなのかなあと疑問をみつける子ども、障害を持つ子ども、すべての個性ある存在である子どもが、「安心して」はいるような日本の学校であるなら、それはそのまま「国際化された」学校なのだ。

これこそが、女性民教審の考える「教育の国際化」なのだ、と確信を持って言いたい。

真の教育の国際化は、「帰国子女受け入れ校」を東京都にあと何校増やそう、とか、帰国の子どもと外国人の子どもと日本で育った子どもを特別な国際学校に囲いこんで教育しよう、ということではないのである。

私の次女は、帰国してはいた高校で苦しんだ。自分が自分でなくなる、と暗い顔をして帰って来る日々が一年半続いた。高校二年の初夏に発病、入退院を繰り返し、高校は二年で中途退学した。

病院のベッドの上で、次女はつぶやいた。

「生きていると願わしくないことばかり起こるんだね。どんなに願わしくないことが起こっても、うち負かされない力をつけるためには、勉強しなくては」

同期生はみんな卒業している。自分は中退だから大学は受ける資格がない。気づいたのは大検だった。寝ながら大検の準備を始め、一昨年の八月大検受検、その三ヵ月後、十一月末に合格通知が来て、昨年二月に大学を受験した。体調に気をつけながら通学している。

その次女が言う。大検受検の時に、多勢の仲間会った。学校が息苦しくて、登校できなくなった仲間たち。けれど、みんな勉強はしたい。みんなが勉強していたのはテレビの高校講座。定時制高校、大検のための塾。それらの学びの場はなぜ息苦しくないのだろう。なぜ逃げ出したくならないのだろう。相對評価がないからか、偏差値による輪切りがないからか。管理のしめつけがないからか。同質であることを強制されないからか。

「学ぶ」という精神作用を考える時、自由な心の世界のひろがり、というのは、なくてはならぬ基盤だと思うが、いまの日本の学校はそこがまったく押しつぶされてしまっている。

帰国後、暗く長いトンネルを通して来た私が気づいたのは、それであった。

西ドイツで教育を考える

暉 峻 淑 子

審議メンバーの一人、暉峻淑子さんは、審議の期間中一年間日本を離れ、ベルリン自由大学で教鞭をとられました。そこから「西独と日本―平和と教育を考える」という、豊かな示唆に富む文章を「We」'86年十二月号に寄せて下さいました。このメッセージの中の教育に関する部分を、ご本人のご了承を得て、再録いたします。

(編集部)

いままで外国ぐらしをしてきたことは何度かあるが、他の文化圏の若者を教えるのは、今回がはじめての経験である。相手が大学教授たちではなく学生だったために、私は本当にいろいろなことを学ぶことができた。何といういきいきとした若者たちだろう。

卒直にいつて私は、日本の大学生たちより、ここベルリン自由大学の学生たちの方がずっと好きだ(すみません)。これ

らの若者たちと、大学の中でお互いに尊敬し合い、火花を散らしあい、愛し合っていると、お互いの心を往来するその生き生きとした交流の熱さに、ああ、人が人とともに生きていくあたたかさ、怒りや悲しみとは、こういうものであったかと、目からウロコが落ち、心の自然がよみがえってくるのである。それにくらべて、日本の若者は無反応としらけ。

私は学生の優劣を比較しようとしているのではない。ただここには、日本に失われているナマの人間のいぶきがあり、創造的な個性があり、それが社会を変え、政治を変え、教育にたえず新しい血潮を注ぎこんでいるのを、うらやましく思うのだ。私が日本で人びとから抽象論だとか理想論だとか言われたことのある現実が、そのままごく当たりまえのこととして、ここにはある。

教育の歪みを受けてきた日本の大学生たちは、自分が学んだ知識が、自分の人生や未来と結びつかず、自分自身の人間

としての発展、自己実現とはカンケイのないもの、いや、逆に自分を抑圧するものにさえなっている。彼らの生彩のない目。自分がいま世界のどこに位置し、歴史の中のどこに立っているかの感受性を持つことこそ、若者の特権であるのに、その特権をさえ放棄して、ひたすら管理され、利根的な与えられる享楽にしたがっている彼ら——。自分の頭、自分の感性はどこにいったのか、その苦しみをさえも示さない彼ら。

社会のありかたがちがうと、こんなにも人間が違ってしまうのだろうか。幼稚園から大学まで——通ってきた道すじが違うと、同じヒトであっても、こんなにちがってしまうのだろうか。私は何度も自問した。

まず、私の受けたカルチャーショックから告白したい。

これは、ベルリンにいるある日本のお母さんの告白である。その方のお子さんは、小学校の三年生で、社会科のテストはいつもほとんど正解。ところがわたされた成績表をみると「3」になっている。そこで先生に質問した。「なぜ3なのですか？」と。先生は「あなたのお子さんは、たしかに知識は覚えている。しかし、自分の考えがない。自分の考えを育てない知識は知識ではない」と答えられたようだ。

いまベルリン市は小学校から高校まで、ほぼ二十五人学級で、三十人になると多すぎると親たちがさわぐ。しかも、数学や英語などの個人指導を必要とする時間は、その二十五人

をまた二つに分けて、一クラスに二人の先生がつく。

一人一人の個性に合わせた授業が、たっぷり行われる。特別に授業に遅れがちな子は、先生が放課後にみたり、よく出来る子に手伝わせたりする。高校まで、午後一時で授業は終わるからそれは可能だ。そのあとはクラブ活動や個人研究や、ホビーや、スポーツや、宿題の論文を書く。塾などはないし、行く子どももない。数学といっても、たし算、ひき算、かけ算、わり算を、くり返しくり返しやる。例えば $6+3$ が具体的に、この世の中にどんな形で存在しているか、とことん討論し、別に先に進むわけではない。テストも論文や作文が実に多く、自分で調べてくる課題がとて多い。アビトゥアのテストも科目の選択があるし論文形式のものが多い。

「個性的な人」というと日本では、わがまま、とか、目立ちたがりや、という、あまりよくない意味を含むものだが、ここでは「個性的であること」が最上の賛辞である。中学生ともなれば、みな自分の個性をあらわす髪型・服装・趣味・自分の字の形など、それぞれに自分の個性の発見に一生けんめいだ。地下鉄やバスの職員も私服で勤務している。

大学のゼミの最初の時間に、学生たちに名前と住所書いてもらったが、よみにくい字ばかりだ。そこで私は「字がきたない。もつときれいな字で書いて下さい」と言ってしまった。そしたら学生からすぐ反論され、「きたない字とは何で

しうか。個性のある字はあつても、きたない字はない」と言われてしまった。そういう時は「ブロック体(活字体のこと)で書いて下さい」と言うべきなのだそう。何でも上から下にきれいかきたないとか画一的もの、さして序列づけてしまふ日本人の考え方に、最初から反論されてしまった。

大学の講義では講義は学生がきく、だから単位は出ない。ゼミだけに単位が出る。ゼミの形はいろいろで、一人一人の学生が主体的にレファラートと言ってしらべた研究の報告をし、皆でディスカッションをして、それに単位を出す。

あるいはハウスアルバイトと言って日本のレポートと卒業論文の中間くらいの研究報告を出す。一回のゼミは二時間で、学生数が少なければ、一回のゼミに一人のレファラートである。学生はこのレファラートのために骨身をけずってしらべたり研究したりし、前もってグループを作つてディスカッションもやつている。学生のレファラートに対しては、発表の途中にもようしゃなく他の学生の質問が飛びかい、終われば長い討論や批評がつづく。先生の話だけ、おしだまつてきいている日本の大学生とはまるでちがう。——しかし、それは小学校以来の長い、主体性と個性、創造的積極的である生き方を磨いてきた結果なのだ。私のゼミは二時〜四時という時間だったが、しばしば夕方六時まで討論がつづいた。

あまりに途中で質問と討論が多すぎて、私自身説明したい

ことがあつてもできない日もあつた。そんな時に私が不満を表明すると、「大学の勉強は問題を発見し、他の仲間の多面的な発想を発見することにあるのであつて、知識そのものはあとで自分たちが本をしらべることが出来るから、ゼミの貴重な時間を使つて教えてもらふ必要はない」という。

私が日本の経済について説明したりすると必ず、「それに対するあなたの考えはどうか、あなたの考えがききたい」とくる。そして討論の経過と結果は、必ずプロトコールといつて、学生が順番に正確な記録にまとめて、次の時間に全員に配る。このプロトコールは、他大学まで流れていくので、とても刺激的である。

それから、教師と学生の間には、シュプレツヘン・シュトランデといつて、一対一で個人的に話し合う時間がある。一週間のうち一日は、教授は必ずそのために時間をとり、足りなければ個人的にまた時間をとる。レファラートやハウスアルバイトのテーマは、一人一人、先生にそのテーマについて相談してから、研究にかかる。

ドイツの大学では四月入学と十月入学のどちらでもできるから講義もゼミも半年単位になっている。——ただ語学などは、レベルの低い方から高い方へと、とる順番が指定されているだけである。大学間の転学は幅広く認められており、単位換算も行われている。大学間格差というものは、まず認め

られず、ただ学部学科によつては、アビトゥアの試験が、以上と指定されているものがある。それは医学部であるが、医学部を志望するものは、西ドイツ全部一括して一ヶ所の事務局に願書を出し、事務局が出身地に近い大学にそれをふりわけていく。どうしてもある医学部の教授につきたい場合は、そこに希望を出しておく、アキがあつたときに連絡があり、その大学に移ることができる。だから、就職のときにもあなたはどの大学の出身か、ときかれることはなく「何を勉強したか」ときかれる。この「何を」というのはまったく幅広い経験を要求していて、ストレートに大学に入学した、というようなことは問題にならない。

私は、大学共通入試ではなく、高校卒業資格認定の方がずっとよいと思う。二または三科目以内の落第は、もう一度、受けなおすことができるし、落第すれば、高校の原級にとどまつて、もう一度、次の年にも、次の次の年にも受験してよい。むりに卒業させられて予備校にいく必要は少しもない。

アビトゥアは一度とればずっと有効だから、それからすぐ大学にいかなくても、外国に出かけたり、いったん勤めてみたりして、自分の志望をたしかめてから大学に登録することもできる。日本のような大学入試だと、その年一年だけしか有効ではないし、休学するとしても、あるひとつの大学にきめなければならない。

大学に入学してきたときに、ドイツの学生は、すでに自主性と豊富な社会体験をもっているから、学生同士、与え合うものも大きく、教師に対しても互角に火花を散らす。向学心、問題意識は、じつに鋭く具体的である。さらに卒業して企業に就職しても、企業のいいなりになることもなく、企業の研修で人格まで企業に吸いとられることもない。

しかし、大学卒業は日本よりずっと難しく、単位をとるのは、相当の勉強を必要とする。しかしゼミにずっと出席していれば、ついていくために勉強せざるを得なくなるので、ついてきさえすれば、まず単位はとれる。成績は、1か2、の二段階しかない。したがって、一年に二つか三つしか単位をとらない学生は珍しくなく、大学には何年いてもかまわないので十年間、大学にいる学生も珍しくない。羨ましいのは、夏休みが三ヶ月、春休みがほぼ二ヶ月、冬休みが二週間ほどある。この夏休みに学生は工場や企業でアルバイトをして一年間の学資をかせぐ。

ドイツの大学生は、高校を卒業すると、家庭を離れる。同じベルリン市内に家庭があつても、他に部屋を借りて独立する。学生の下宿をたずねてみたが、一人で八十平方メートルの部屋（台所・シャワー・トイレ・寝室・勉強部屋）を、みな持つており、七千円から一万円くらいの部屋代である。だいたい十六歳くらいからは、男女の性の関係も自由で、親も

学校も公認している。学校では、男女が愛し合えば、性的な関係をもつのは当然だから、禁止するのではなく、人間の性的な結びつきについて、心理・身体・医学・道徳・家族・宗教、すべての面から、多面的な見方、考え方を討論させ考えさせることに熱心にとり組んでいる。避妊のしかた、男女の身体を理解など、徹底しているし、かくれてコソコソする必要もないから、むしろ高校生活の中に、しっかりと組みこまれ、自分の力でコントロールされていてまったく危なげのないものだった。

むしろ多くの経験をつんで、自分の人生の真の伴侶を見つける、という生き方であり、どれだけ努力し、苦勞して人生の伴侶をみつけるか、ということなしに、真の男女の平等と愛の生活はない、というのが彼らの意見である。

私の研究室に一人の男の助手が同居していたことがある。

それは、もう一人の助手と気が合わないのに、私の研究室にいてもいいか、というのである。このとき、仲がわるい、とか気が合わない、と言う言葉が平然と使われていて、少しもそれが人格の短所として表現されていないことに気がついた。離婚という言葉も同じである。

ひとそれぞれには個性があるのが当然で、合う人もいれば合わない人もいる、というのが当然視されている。なにも、むりに他人に合わせる必要はないのである。むしろ自分の考

えがはっきりしている人の方が尊敬される。はっきりした自己主張をもっている生徒たちの個性を認め、伸ばしつつ、しかも彼らを發達させていかなければならないのだから、教師には、すぐれた資質が要求され、教師もまた、それを当然のことと、使命感にもえた職業意識をもっている。

むしろ、そこでは、お互いの個性を十分にみとめ合い、個性のぶつかりあい、あるいは戦いの中から新しい文化や發想が生まれる、という信念がある。お互いの個性を認めることが前提であるから、はげしい討論や戦いの中にも相手を抹殺することはない。助けを必要とする人があれば、とことん助け合っている。もちろん、ドイツ人もいろいろである。しかし、若者たちが自分の目で見、自分の頭で判断し、誰もが、その存在を認められて、優秀に序列化されることのない世界——個性が花開いている豊かな社会。その点では、日本とドイツは、どう見ても、はっきりと違う。

あるドイツの母親は、私にこう問いかけた。

「日本のお母さんたちは、わが子をどうやって社会の中にはめこみ、適応させるか、ということのために一生懸命教育するのではありませんか。私たちは、自分の子どもが、どうやって本当の自分を發見し、自分自身の判断を育て、独立し、彼の力で、どうやって自分と社会のより大きな自由を実現していくか、ということのために、子どもを教育しています。」

スウェーデンの高等教育

ビヤネール・多美子

(絵本作家)

この間、わたしの渋谷の家に高校の同級生という二人の一九歳になる若者が訪ねてきた。スウェーデンから出発して日本、中国をまわって帰るといふ。そのうちのひとり金髪の小柄なシャルロットは今、花屋さんにつとめている。スウェーデンの高校は総合制高校で二年、三年、四年制とあり、将来の進路に合わせて職業科と一般科に分かれているが、シャルロットは一般科の三年制の人文コースをとった。しかし、卒業後、自分は植物が好きなので、園芸コースで園芸家になりたいと思った。そこでもう一度、高校教育をやり直そうとしたが、高校の園芸コースは中学卒のストレートの学生をとるので、なかなか入れない。そのうえ、教育は全て国費であるから、国としても二度も高校で勉強されては、費用がかかりすぎて、良い顔はしない。ということ、シャルロットは二〇歳になれば成人学校へ入るので、それまで待とうと考え

たけれど、結局は大学でこのまま法科に進むことにしたといふ。

レーナは一年カナダに留学していたので一年遅れで、高校を卒業、やはり、法科に進むといっていた。両親は高校の四年制の技術コースでエンジニアになってほしいと思っていたらしい。なぜなら、エンジニアの職場は男子が圧倒的に多く、女子の就職は確実であるからだ。というのも、男女平等法で性差別をなくすため、男女をできるだけ同数にする努力を職場はしなければならぬから、女子は優遇されるのだ。

高等教育制度の改革

スウェーデンは一九五〇年代以降、教育制度は絶えず改革の手が加えられてきた。高等教育に関しては、一九七七年に、新しい高等教育制度が発足した。それまで、いろいろな

かたちの高等教育機関、例えば大学・専門学校・師範学校などがあつて、複雑であつたが、この改革により、入学規定も共通となり、管理原則も統一された。

この改革により、より広い層の人々が高等教育をうけることが可能となつた。そして、成人学生が増加した。これは改革以前からすでにみられる傾向であつたが、改革後は更にこの傾向は強まつてきた。そしてあらゆる年代層の学生の要求にあうように、授業も工夫されてきている。たとえば、定職をもちながら、高等教育を受ける人が増えてきた結果、夜間授業の必要性がたかまり、夜間の授業は昼間より、ゆっくりペースにする。またへんびな所に棲む学生のために、主として通信教育によつてなされる遠隔教育もまた新しい授業の形である。ゼミや試験の時にだけ学生は学校で授業を受ければよい。

高等教育法は教育は全生涯にわたつて続けられるべきであり、就職してからも必要に応じ、いつでも学校にもどつて教育を受けることのできる制度を目標とすべきであることとしている。

入学資格と入学許可

一般入学資格は（Ａ）高等学校の二年以上の課程を終了しているか、（Ｂ）国民高等学校（寄宿舎制成人学校）終了者、

（Ｃ）二五歳以上で最低四年間の職業経験を有し、高等学校二年終了程度の英語の学力を有する者。（Ｄ）外国で教育を受けた者となつてゐる。

応募者が定員をオーバーした場合には、次のような基準にもとづき選択が行われる。応募者は、高校二年以上の課程の終了者、国民高等学校で一般入学資格を取得した者、二五歳以上で四年以上の職業経験を有することにより資格を取得した者の四グループに分けられる。各グループで高等学校の成績と職業経験にもとづき選抜が行われる。

（Ｄ）のグループは本人が希望すれば、能力テストを受けることができる。

また、外国で教育を受けた者の割合は、全定員の１０％以下でなければならぬとされている。選抜にあつては、外国で教育を受けた学生の場合には、各応募者の有する全資格が考慮されることになっている。

以上、スウェーデンは二五歳以上、四年間の労働体験で大学に入学できるという世界でも画期的な高等教育改革を行つてきた。しかし、実際にはそれがどのように機能しているのだろうか。たしかにわたしのまわりにも、学校の先生でありながら、考古学を勉強したり、組合に勤めている人が、一年間、休暇をとつて、政治を勉強するとかいつてゐる。

わたしはこの制度がどのように、特に、成人学生に利用さ

れているのかを聞きたくて、現地で「地方自治体における成人教育」を研究している三瓶恵子さんに手紙を出してきいてみた。彼女は次のように書いてきてくれた。

「定員はその志願数の割合によって、割り振っていくので、理論的にはあるグループからの入学者がゼロとなる年もあるのです。でも実際には（Ａ）（Ｂ）が三〇％強、（Ｃ）が五〇％強、（Ｄ）が一〇％弱となっているようです。ここで注意しなければならぬのは二つ以上のグループに属することがみとめられている点で、たとえば二五歳以上で四年以上の労働生活経験があり、そのうえ、高校も出ている人たちは（Ａ）あるいは（Ｃ）の両方で競争に加われるわけです。しかし中央でコンピュータ処理されるので（？）自分がどちらのグループで合格したのかはわからないのだそうです。担当者の話ではほとんど全部が（Ｄ）のグループに入ってしまうのだそうです。それで、（Ｃ）二五歳以上で四年以上の職業経験者学生がどれほどいるか、不明という答えしかありません。大学生の全体の五〇％以上が二五歳以上という統計がありますが、本来、たてまえとしては五〇％と答えてもいいのですが、本当に教育をうけていない人はごくわずか（五％以下）でしょう。大学制度が日本と違うので、進学率や成人学生の割合など、パーセントがからむ統計でないことが多いし、また、あつても不十分なので誤解をまねくことが多いです。という

のは大学にはラインコースと単科コースというふたつのシステムがあつて、入学者の傾向がそれぞれ異なるからです。ラインコースというのは、日本の制度に似たレディメイドのオーダードックスなシステムで、若い人が比較的多いです。単科コースは日本の聴講制に似た制度ですが、単位がとれること、その単位を溜めていけば、ラインコース卒業と同じ扱いになることが大きく違います。単科コースは夜間が多く、働きながら学ぶ成人学生が多くなります。このコースの期間については、一、二週間から一年間のヴァリエーションがあつたり、その年によってコースがあつたり、なかったりして、中央でもあまりよく実態をつかんでいないようです。

成人学校の補完教育は最初（一九五〇年代）教師不足を短期に解消するために考えられた制度です。小学校低学年教師が高学年、中学、高校教師の資格をとるためとか、看護婦が正看護婦の資格をとるためとか、現在でも同じ職業分野での資格を補完するために、大学にもどってくる人が多いです。学部は医学部以外（医学部は入学が大変むずかしいので）はどこにもいえるのではないのでしょうか。

（Ｃ）で大学をうける人たちは高校卒という資格はないものの、高等教育適正検査という知能テストプラス常識テストを受けます。その点数と本人の「その教育を必要とする度合い」によって、判定がおこなわれます。面接はありません。

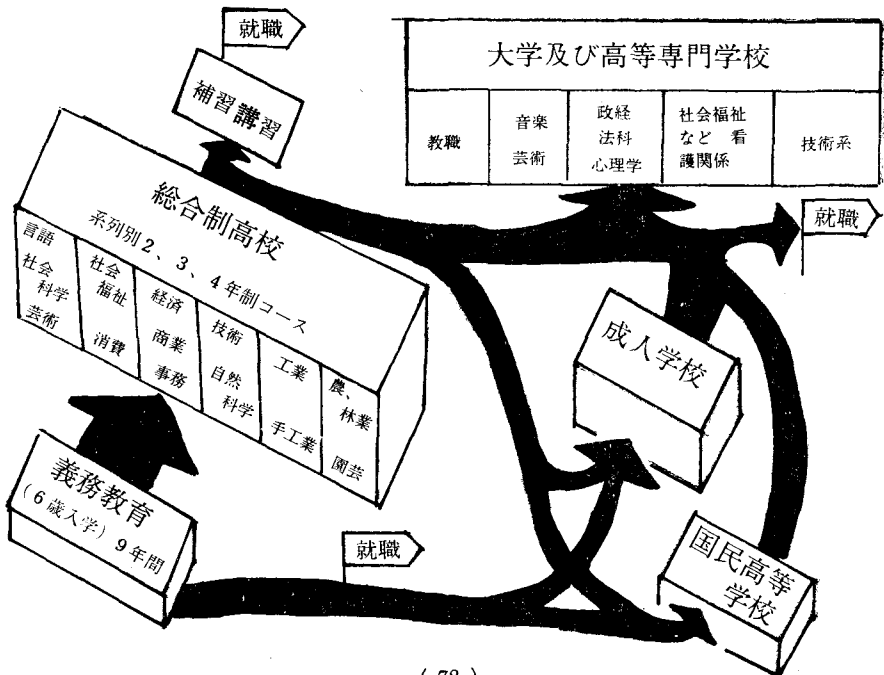
要するに、この制度は高校教育を受けていない人々よりも高校教育を受けた成人のために役だっていると思います。また、実際、大学教育は高度というか、ついていくのが大変ですから、高校に行っていない人が直接大学入学することよりも、高校に入ること、成人のために短期間に高校教育を補うことをめざした政策がとられています……。

日本の教育のようすについては、新聞でみるかぎり、本当のために息をつきたくなるような状況ですね。臨教審の審議経過などを読んでもいろいろな意見をならべているだけで、結局、偉い人が自分の思うような政策をきめることになるのではないかと思ってしまうす」

と友人は手紙を結んだ。

スウェーデンの高等教育の概要だけを読むと、だれでも即大学に入れるような気がしてしまうが、やはり、勉強して努力しないとかなかなか難しいことがわかる。それにしても、勉強するという名目があれば、一年でも二年でも雇い主との相談にもよるが、法的に無給休暇がとれるという制度は、日本でも真似したらいいなと思う。本人にとっても雇い主にとっても、国にとってもプラスになるはずだから。

スウェーデンの高等教育



系列別高等学校の2年・3年・4年制コース

〔人文・社会系列〕	〔経済・商業系列〕	〔科学・技術系列〕
●2年コース	●2年コース	●2年コース
消費者コース	流通・事務コース	下記参照 (2)
看護コース (1)	経済コース (1)	
社会コース (1)		●3年コース (1)
社会福祉コース		自然科学/技術コースと
音楽コース (実験中) (1)		連携した自然科学コース
●3年コース (1)	●3年コース (1)	●4年コース (1)
人文コース	経済コース	技術コース
社会科学コース		
各種特殊コース	各種特殊コース	各種特殊コース
(1) 主として理論学習		
(2) 被服制作コース, 建築・建設コース, 操作保守技術コース, 電子工学コース, 動力工学コース, 農業コース, 食品加工コース, 加工技術コース, 林業コース, 園芸コース, 木工コース, 工作作業コース, 技術コース		



私が受けたアメリカの教育

俵 協 子

(テレビ朝日ニュースステーション勤務)

十八歳の人間に自分の将来が見えるだろうか。私はこの年齢で自分が何をしたいのか、その時点ではもう少し具体的な「大学で何を学び何を専攻したいのか」さっぱりわからなかった。十八歳で選択を強いられても、私には選べる程の知識も、体験も、大人に助言を求めるといふ知恵も、なかったのである。現実には目の前に迫った制限時間の中で、結論が見えないまま受験勉強するということは、本当に苦しいものである。偏差値と自分の実力と戦いながら、受験する目的が、意味がわからない。結局、私は受験勉強を放棄した。放棄したら情けなくなり、自信喪失した。つまり日本の大学受験制度から、落ちこぼれたのである。

昭和五十四年二月、私は単身渡米したのである。取りあえず大学附属の英語学校に在籍し、アメリカの大学を受験しようと考えた。それは、アメリカの大学システムは非常に柔軟

で、入学する際学部を決定しなくても、「Undeclare(アンデクレア)」つまり、無宣言という形で入学が許可されること。そして専攻決定後も、変えなくなったら何回でも転部可能なこと。転校さえも当たり前。学生はまず体験して自分の適性を試し、その中から最終的に結論を出せばいいのである。こういう大学システムは、私の様に経験思考型・晩熟型の人間には、向いていたのである。

アメリカでは、大学進学を希望する個人の主体的な行動力がない限り、入学は困難である。通常、遅くとも高二の夏には準備に入る。この夏休みを利用して、学生は、親や高校の進学カウンセラーと事前に調査しておいた大学を、実際に自分の目で確かめるため、夏期講座の体験入学をするのである。事前調査は日本と同様、大学案内書を利用する。大学のアドミッション・オフィス(入学課)に手続を出せば、願書

と一緒に大学案内を送ってくれる。それらを参考に、「何学部はどの大学が定評があるか」と調べるのである。つまり、アメリカでは、一般に大学を、自分の専攻したい学部の評判で選択するのである。

こうして志望校を絞ると、夏休みを利用して体験入学してみる。正確には、夏期講座の聴講生になるのである。しかも夏の大学の寮は、通常一般人に開放されるので（なぜなら在校生も夏期には他の大学で単位を修得する者が多いため）、実際にその大学の寮で生活しながら、学生との交流を通じて聴講ができるのである。こんな確実な大学案内があるだろうか。さらに、この聴講した授業を、入学後に実際に単位として活用できるように、大学側はクレジットとして承認してくれるのである。この際、聴講生はその旨を事前に説明し手続きを取り、しかも履修した授業の成績が一定基準以上でなければ、容認はされない。

家庭の経済的な事情はそれぞれ異なるから、すべての学生がこの体験入学ができるとは限らないが、大学進学の時期、つまり、専攻志向期間に、こういう体験入学制度があることは、主体的な進学への貴重なワンステップになると思う。そして子供にとって最初の突破口である大学選出段階で、両親・他人を含む大人のアドバイスが、決して威圧的でなく、むしろ子供の意志に寛容なのは、この柔軟な大学システムを前

提に、現段階の子供の意志が後に変わることを知っているからであろう。だからむしろかしい時期の高校生も、大人の適切なアドバイスに耳を傾けるのであろう。

大学進学希望者は、このように夏休みを利用して大学回りをしながら、当然受験勉強も平行して行う。アメリカでは、大学が個々に入試問題を作って、筆記試験をするというのは異例のケースである、全国の統一学力試験みたいなものがあり、その点数を大学が評価する。中でもSAT (Scholastic Aptitude Test) が最も一般的で、次いでACT (American College Test Program) がある。SATは国語と数学のたった二科目の各八〇〇点満点。ACTは四科目。どちらも年何回も行われる。ただし、最終に受けたテストの点数が重視されるので、自分の実力を見極める判断が大切なのだ。この他に高校の時の成績、小論文、推薦状、クラブ活動やアルバイトなど課外活動の参加、面接、などいろんな要素を総合的に判断して入学者が決まるのである。さらに、大学独自で行うペーパーテストがあるところもある。しかしやはり最も重要なのは（無論、筆記テストがあまりに低いと論外であるが）、本人の「この大学で学びたい」という熱意である、これは何回も入学課に足を運び、アドミSSION・アドバイザーに自分の熱意と決心をまくしたてることにより、かなりその行動力で信じてもらえるのである。だから大学側も、主体的な進

学かどうかを重視するのである。熱意を証明するためには、行動力が必要で、行動力を起こすためには本人の自己確認した決心がないと実行できない。つまり大学進学は、常に大人に庇護されて受動的に生きてきた人間が、初めて能動的に責任を背負う決断をしなければならない、つまり、成人への最初の一步である。

当然、この責任は入学後も付き纏う。一度入学が許可されても、一定基準の成績を修めていないと、容赦なく退学させるのである。これが恐怖のGPAである。つまりGPAという「平均成績」が学生の運命を決定する。このGPAの算出の仕方は大変ややこしいのでここでは省くが、要するに各大学とも五段階評価、A（優）、B（良）、C（並）、D（可）、E（不可）とあり、履修した科目の総合平均がC以上、つまり「並」以上の平均点数二・〇が、在学できる最低の値となる。この点が二・〇を下回るとプロベーションが宣告される。プロベーションとは、退学の執行猶予といえる。次の学期にGPAを二・〇以上に回復できないと、キック・アウト（蹴飛ばす）、退学になる。このGPAは決まり札で、転校の時も、就職の時も、大学院に進学する時も、GPAがものをいう。この魔のGPAが、アメリカの大学生の卒業率を低くしているといっても過言ではない。それ程シビアである。

大学側は自主的に入学してきた生徒に対し、当然このよう

に決して甘やかさないが、落ちこぼれないようには極力配慮する。これもアドバイザー・システムである。入学すると直ちに、一人一人の生徒にマンツーマンのアドバイザーがつく。このステューデント・アドバイザーと呼ばれる人たちは、教授自身である。生徒にとってアドバイザーは教授一人だが、教授の数は当然生徒より少ないので、教授自身は何人も生徒を抱えている。自分の研究や論文も大切だが、自分の担当の生徒が落ちこぼれると査定に響くから、教授も熱心に相談にのるのである。生徒はこのアドバイザーとのコミュニケーションなしには、卒業は不可能である。履修の申請も自分のアドバイザーの承認サインがないと出来ない。アドバイザーは生徒が難しい科目をとりすぎてGPA二・〇を切らないように、履修科目の選択段階から細かく相談にのる。学生にとって、いかにこのアドバイザーと常にコンタクトをとり、親密に相談にのつてもらうかが、卒業へのキーポイントとなる。言い換えれば、それ程アメリカの大学は複雑なチェックがあり、そのチェックを一つでも見落として通過しなければ、退学になる位、在学していることが難しいのである。

しかしアメリカ、である。大学一、二年生などは、高校生に毛が生えた程度だから、この複雑なチェック機能を軽視し、アドバイザーとの交流も怠るから、大変退学になる生徒が多い。大学側もそれを見通しているのであろう。退学が決

定した生徒にまでも、アドバイザーは親切に相談に乗る。生徒は初めてアドバイザーの大切さを知る。そして失意のどん底から這い上がるため猛ダッシュで頑張る。アドバイザーは取りあえず他の大学で授業を取ることを勧める。成績の悪かった科目を他の大学で聴講し、成績認定書を出してもらい、その平均成績が今度は三・〇以上、つまり「良」以上修めてくれば、晴れて再入学（一応復校とは異なる）できるのである。当然今までその大学で取った単位も成績も消されないから、復校できたとしても厳しい戦いになる。しかし、常に、本人の努力・熱意を認めてくれる。そして失敗しても、その後の修復作業と努力によつては、道も開ける。サバイバル精神には至つて寛容なのである。しかしそれもあまりに成績の悪い者、GPA二・〇からあまりにかけ離れている者は、タダの怠け者の烙印を押され、サヨナラである。

アメリカの大学の四年間は、広い教養を身につける時期として位置づけられる。つまり本当の意味で高学歴社会であり、専門を学ぶのは大学院からである。大学の四年間は、だから専門を見つけるまでの準備期間と言ってもいい。そして自主的に学ぶ訓練を身につける所である。十八歳から通常四年間、体当たりしながら、自分の道を探る。アメリカでは十八歳から体験を通して、自分の適性を捜していくのである。

柔軟なシステムの中で厳しいチェックがあるのは、まだ未熟な人間が、自分で決断し責任をとれる大人になるための、社会訓練なのであろう。だから常にアドバイザーがいる。カウンセラーがいる。アメリカ社会は、本当は十八歳の人間を信用してないのかも知れない。今、自分自身をふり返つても、それは当たり前のような気がする。

結局私も四年制大学を五年かけて卒業した。「無宣言」入学し、国際コミュニケーション学科に在籍し、しかし自分の興味が心理学であつたことに気づき、心理学科に移籍し、五年目に、社会科学部心理学科で卒業証書を手にした。充実した、学ぶ楽しさを覚えた大学五年間であつた。一つ一つチェックをクリアーし、確実に自分の道に近づいている手応えがあつた。大学を卒業する時点で本当に探究してみたいと思える学問、心理学を大学院でさらに勉強できなかったことは、今、悔いている。だからお金をためて、ぜひ大学院に行つて学修したい。

十八歳やそこらで、「人生を決めなさい」なんてバクチに近いことを強いる日本の大学や文部省つて、一体何を考えているのだらう。十八歳の人間を買い被つていないか。それとも選ぶ、悩む自由など、必要ないのであろうか。

事務局による座談会

活動を日々を ふり返る

出席者 東 和子 上田 智子

佐尾 和子 佐野 春江

高橋 雅子 早川 裕子

間瀬 中子 松本 享子

半田たつ子(司会)

司会 女性民教審の活動がここまで運んだ

のは、事務局の方の力が大きいといつも思っていました。それについては、私たちも知らないでいる事務局のご苦労とか、見えないいろいろな問題とかがあると思うんです。それをきちんとうかがったこともなくてここまできてしまいました。今日は、ざっくりばらんに出していただきたいのです。最初にお一人ずつ、どういう気持ちでかわってきただのか、また、今の教育についてのお考えなどを。

一、なぜ民教審にかかわったのか

A 私立小学校の講師をしています。民教審にかかわってから、今まで先生に甘んじていたけれど、子どもの後ろには親がいるんだということを改めて認識しました。PTAで母親がものを言うというのは、なんとうる

さいんだ、なんてわがままな人だなんて思っている先生が現場に多いんですね。事務局には、母親の立場の方が多いので、私は現場に行ったり、民教審に行ったりしながら、両方の視点がもてたことが一番大きな収穫です。

B 今聞いていて思い出したんだけど、私も学校に勤めていたことがあったのね。先生方は陰でね、PTAのことをピーチクエー、ピーチクエーっていつてたの。ピーチクエーがうるさいとか、そんなふうだね。

司 Cさんは、教育一〇番がきっかけでしたね。

C 新聞を見て、切り抜いときまして、その日を待ちに待って、電話をかけたんですが、なかなかかからなかったんです。以前から俵先生の本を読んできて、どうしてもお会いしたいという気持ちを持っていました。ダイヤルを数時間回し続けるより、飛んで行ったほうが早いと思って出かけて行きました。そして「五分でけっこうです」と、悩んでいることをお話しさせていただきました。それがきっかけです。

私は、三人の子育てでいろいろ失敗しておりますし、ピアノをずっとしてきた人間として、非常に偏った考え方をしていると思います。



そういう自分にいやげがさしていましたので参加しました。

すごい典型的な教育ママでしたが、いろいろな方のお話をうかがううちに、エリート志向を捨てることができました。高三の次男がいますが、高卒でやめてもいいし、大学へいってもいいし、その大学も自分の判断で決めなさいって心から言えるようになりました。

夫は教育者ですが、まったくそういう気持のない人で、夫を変えることはなかなかですが、私のほうはおかげさまで変わりました、感謝しております。

D そうですね。私は子どもが幼稚園に行ったときから、子育てで何か違うなあと感じていたんですね。ザーっとそのことをかえながらきたんですけど、小学校のPTAにちよっとかわった時、お母さんたちはほんとうに子どものためのPTAというものを考えているのに、PTAの上層部が社交界にしまわっているんだらう、上層部を変えれば、PTAも変わるんじゃないかと思ったのです。

たまたまその時に、どの委員会も改革したいという方が委員長になっているということ、私が推薦の副委員長になり、教育のことを話せるPTAにしようかと改革したんで

す。でも、校長・教頭とかの権力者のもとでは、新しい考えの会長も副会長も手も足も出ないんですね。それで私は、PTAの中だけで解決できる問題じゃないと外に飛び出し、働いてみたのですが、その会社がつぶれてしまったのです。これは私に学びなさいということだと思いました。ちょうどその時、新聞で女性民教審を知り、傍聴したところ「学力」についての審議会で、かなり本音で、しかも私がずっと考えていたことを考えていた方がメンバーにもいらっしゃるようなので、かわってみようと飛び込みました。

E 三人の子どもがいます。マイペースで子どもを育ててきましたが、周りを見ると、おかしいな、おかしいなというのが常にあって、それを気の合った母親同士が「あれはおかしい、これはおかしい」と言っている、世の中そんなに変わるわけじゃない、というところから、PTAとかいろいろ経験はしましたが、教育を単なるひとりの親という立場じゃなくて、もう少し広く見たい、知りたいという気持で事務局にかかりました。

よかったなと思うのは、二番目の子が私立高校二年の時、学校に非常に疑問を感じてやめたいと言いました。もし民教審にかか

わっていなかったら、学校をやめるなんてとんでもないと、非常に狭い範囲でしかものを見ないで、子どもにおしつけをしていったんではないかなと思うんです。それが民教審にかかわっていたおかげで、あまり強要しないで、子どもの考えを尊重するだけのゆとりを多少は持てたんじやないかなと思ってます。

司 Cさんと似かよった感想をお持ちになったわけですね。

F 私は私なりの子育て観というのを、多分はつきり持っていたと思うんです。子どもを仲間として育てるということです。大学紛争のちよつと前に大学を卒業して、かなり影響を受けた年代です。そこから自分が見つけたものを、子どもに伝えていきたいという気持がありました。それで、学校というものをほとんど無視してというか、PTAにはかかわっても、何かをしようという意志はほとんど持っていなかったわけです。

B それはどうして？

F 多分接点がないだろうという先入感を持っていたわけですね。

司 超然としていらしたのかな。(笑)

F 超然としていたというか、ほとんど意識の外にあったというか……。それで過こせ



たのは、時代も環境も恵まれてたのかもしれないですけど。

ところが現実とぶつかったのは、子どもが小学校高学年になった時、私の母校の付属中学に入れようかな、子どももそうしようかなと思い、受験勉強を始めた時でした。それからしばらくして、いじめとか、自殺とかのニュースがひんばんに出てくるようになりまして。私は歴史を継いでいく次の世代が、ひどい状態に陥ってしまったている。これはどういうことなんだろうかと、このままでは、伝えることもできないし、こうしてしまつた責任は私たち大人にあるのだろう、と思いはじめ、教育をまじめに考えなくてはいけないと思つてかかわってきました。

G 私の場合は、子どもが小学校一年に入

りまして、学校の雰囲気が幼稚園とは違うなと感じました。先生がおしりをたたいたとも言通りにさせ、管理していくという、熱意かもしれないんですけど、すごい疑問を持ちました。PTA役員をしているお友達同士で、署名運動をしようなんて話したりしたんですが、そういう折に女性民教審がイベントをするけど出てみないかと友達に誘われ、友達と一緒に参加しました。そこで共鳴して、かかわったというのがそもそもでした。

また、小学生の男の子が、お友達同士で遊ぶ時間が合わないんですね。片方のお友達は何時から何時まで習いごと、片方が何時からと、その合間の時間でファミコンやるみたいな遊びで、体と体がぶつかるということがなく、これでいいんだろうかって疑問に思っていたんですね。それでいろいろ勉強したいと思ったのです。

司 Bさんは田中喜美子さんたちと、そもその言い出しっぺでいらつしやるから……。

B ええ、ですから、みなさんのようなロマンのある入り方はしてなくて……。 (笑)

「わいふ」編集部にて、臨教審ができた時に、ああこれで教育の現状が少しは変わるかしらって思ったんだけど、メンバーや専門委

員が発表されて見ているうちに、これじゃとても子どもたちの状況が変わるような改革案はできそうもない。でも、私たちはただ見て批判するだけでいいんだろうかって話し合っただけです。私たちだったらどういう提言を作るかということで、大それたことを言ったと、今になって思うんですけど……。(笑)

こういう方たちに入っていたきたいとメンバー固めからやってきて、何とか提言をまとめて出す段階に来たんですけどね。今、まづ言いたいのは「大変だったわね」という言葉なんですよ。お互いに「いろいろ苦労があったわね」「ご苦労様でした」って。ここにどつた方たちは、少々のことではへこたれないで「大変、大変」と言いながらも何とか助け合いながら、ここまでもちこたえてくれた。それはなぜかという、今、ひとりひとりの言葉を聞いて、改めて感じただけど、教育に対する自分の強い思いをみんなそれぞれ持っていたからなんです。

司 Bさん、Hさんは初めから出ていらっしやるから、まとめ役としても、ほんとうによくおやりになったと思います。

H ずっとうかがって、日本の国の子どものためにとか、日本の教育をよくするために

とかの言葉が出てこなかったのがとてもうれしい。私自身は、自分が確かなことを知りたくてやってきたことしか言えないんです。

私は二人の子どもを育ててきて、特に長男に対して託びたい気持ちがあるわけなんです。ね。高校のとき共通一次試験が導入されたから、生徒がみんな反対しているのに、どんな、実施の方向に進んでいくという不思議さ。

ああ、我が子には向かないなあ。○×式でスピードでって、反対する気持ちで一杯でしたが、やはり子どもは失敗した。その次もまた失敗した。仲間が四人受けて、うちの子だけがまた残ってしまった。

夜中に泣き声がかすかに聞こえてきたので何だろうと、子どもの部屋の扉のところに行ってみたら、長男が泣いているわけですね。

四人の仲間のうち、自分だけがまたしても浪人しなければいけない。私は、適当なぐさめを言って、来年がんばんなさいよ、不運だったねというような言い方をしたこと、共通一次や高等教育教育に対して、しっかりと考えた知識を持っていなかったということが泣き声を聞いているうちに胸につき刺さった

——それが出発点でした。

こういう背景があつて「ハイスクールレポート」の仕事などしていくうちに、単に合格したとか、不合格だったとかいうことでなく、確かなものを知ること、自分が子どもを大事に思うかどうかのインテリジェンスだと思えてきたんですね。ちょうどそこに事務局の仕事を、という話があり、知るための場を与えてくれるのならば、自分のわずかな時間と労力を出せるんじゃないかと、そういう個人的なことから出発しました。自身の問題が解決しない限りは、私自身もこの仕事は終わらないと、そういうふうに思っています。

B 問題は解決した？

H え、私なりに。一つはきちんと国の政



治・教育制度を知りたい。そのもとにあるのは子どもへの詫び状みたいなものですけど。わかりますでしょうか。

司 わかります。自分の中にこれがわからないとしても気がすまないというのがなければ、やれませんよね。人のため、世のためだけでは。みなさん、自分の中でどうしてもこのことがわかりたい、このことにがまんできない、このことを黙って見すごしていいいんだろとか、個人としての強い思いを持っていらっしゃる方たちだと思う。

P T Aの役員になったから、今年は仕方ない、家事の合間をさいてがんばらなきゃねとか、P T Aの役員でもしていれば、子どもも得するかもしれないとか、理由が外にあるんじゃないかと、自分の中にある方たちなんだなあって思いました。



二、活動の中でのエピソード

司 では次に、こういう方たちとのつながりができて、うれしかったというのがありましたら出していただけたらと思うんです。

A さっきも電話がかかってきたM君のことを話しましょうか。

H M君のことは『女たちの教育改革』に書いたのですがその後どうなったんですかってよく聞かれるんですね。だからまずその後のことを少し話しましょう。

教育一〇番が終わったあとも、全国からとぎれることなく電話がかかってきました。が、中学三年だったM君からも、「いじめられていて、学校に行くのが嫌になり、じつと家でうずくまるように暮らしている。新聞で一〇番のことを知って、同じような目に合っって苦しんでいる子と友達になりたいので、仲介をしてほしい」という電話がかかりました。

名や住所を明かさず、内容が核心に触れると一方的に電話を切ってしまうということがずうっと続いていたのですが、登校拒否の体験を持ち、夜間中学から定時制高校に進み、

出版社で働きながら自立しているK君を紹介したこと、それから、徐々に立ち上がったんですね。

何ヶ月ぶりかで電話がかかってきて、ある県立の農業高校に推薦で受かったって。よかったね。よかったね。今日は本当の名前と住所を言えるね」って言うのと「言える言える」と気軽に教えたわけですね。それを信じて、ヤマハホールのイベントの招待券送るからおいでって言ったなら、行くって、ガールフレンドもいるっていうから、じゃ二枚ね、つて、そこに送ったんですね。ところが宛先不明で返って来ちゃって。ヒヤーツとすると同時に、予想より傷が深いなあ、と思いました。人を信じられないっていう――。

また何ヶ月かたって電話がかかってきて、「ごめんなさい」とかいろいろ言うので、ものすごく腹が立って、「そういうことをするから友達とはみんな離れちゃうし、周りもみんな離れちゃう」って、どなったような気がするんです。そうしたら、「ごめんなさい」ってあやまって、正しい電話番号を教えたんですね。それから約一年間ね、Aさんが年齢が近いから話し合いの手になってくれたんです。ここにたずねて来たこともあります。

B さっきの電話は？ ぜひうかがいたい

わ。

A あれから成績が上がったとか、学校の授業で大好きな科目があるとか、ちよつと前までイキイキしてただけど、このごろまた一つの壁につき当たったみたいで、これだけのかなあつて立ち止まって考えている電話だったんです。私はあの年齢の子がだれでもぶち当たるでしょうもない孤立感、自我の目ざめ、そういうのにつきあたっているのかな、なんて解釈しているんですけど。

H 学校はアルバイトを禁止しているんですが、いいよ、怒られてもいいから、アルバイトしたらなんてけしかけたりしてきてね。彼はアルバイトすることによって人間関係がすごく広がって明るくなっていたわね。

A ちょうど私の弟と年が同じで、弟みたいな感じでした。

H 私たちの間では、彼はぐずぐず、ぐずぐず言いながら、何とか高校を卒業して、ちゃんと大人になるからね、なんて話してます。

A 彼にとつてもここがぐさめられる場とかそんなふうに役立っているような気がして、うれしいです。

H その他にもいろいろな子とのかかわりがありますが、わが子と同じでみんな挫折感

を持っていますね。

司 でも今のこういう状況の中で挫折感持つのあたりまえでね。それがなくて、テストがおもしろくて、好きで、人を蹴落とすことに快感を覚えてなんというような子たちが、エリートコースに乗っていったら、そっちの方が怖い。むしろ挫折感があったり、思い悩む子の方が、はるかに人間的に感性が豊かだといえるんじゃないかと思えますね。

H そういう子たちいろいろな道があるんだよって言えるような社会であつてほしい。こういうふうにしなさいと、言うんじゃないくて、今の気持ちを聞いてあげる、そんな役を果たす人がこの世の中では一人いたらいいんじゃないかと、それぐらいの気持なんですわ。

司 ええ。

A 私自身、普通の都立の普通科を普通に出て、普通の私立大学へ現役で入ったのを、「挫折してない人間」と鼻にかけていた。自分の中に定時制より全日制がえらい、全日制の中でも普・商・工・農という輪切りがあると。私立と国立では国立の方がえらい、浪人より現役がえらい、留年したのよりしない方がえらいと、そんなのとらわれていたのね。

M 君にかかわるまでは。M 君が登校拒否しちゃったと電話をかけてきたら、私は「学校へ行かなきゃダメだよ、行かなきゃ先生が怒るよ」とか、「成績が落ちるよ」「行くべきところなんだよ学校は」とか、学校へ、学校へと、一生懸命押しもどすことをしていたのです。

H ところがね。さっきの登校拒否をした「お兄さん」を紹介した時、その人は「そうかい、行きたくないか。じゃ行きたい時行けよ。ゆっくりやれよ」と、こう言ったのね。この言葉が私たちを導いたといえる、ね。

A その「お兄さん」は、何年かかって学校へ行こうが、どういう道でいこうが、そんなのえらいも、えらくないもないんだよってことをM 君に感じさせたと思うけど、私にはカルチャーショックで、それからバツと開け



てきた。今までの自分は、例えばチューリップと桜とどっちがえらいかって比べてるみたいなもんで、どっちもいいのに、桜の方がたくさん花が咲くからえらいとか、チューリップの方が色が濃いいからえらいとか、そういう比べ方をしてたんだと感じて、それからどんな自分を変えていきたいなど、思いました。

司 いい話ですね。Aさんがおっしゃったことは、ものわかりの良さそうな評論家が言ったり書いたりもすることなだけけど、AさんがM君とかかわってカルチャーショックを受けて自分を変えたというのは本物ですよ。ね。

A M君が受験で悩んでいる時期、私の弟も受験で悩んでいました。勉強が嫌いな子で、都立に入れるか入れないかという境目でしたが、都立の方が聞こえがいいから行きなさいとか、私立でもちよつといいところへ行きなさいとか言えなかった。入れるところに入っ

会の中の人間関係とかを知った上で、なお学校っていうのは何なのか、行きたい時行けばいいんだよっていう答えが出てくる場所にね、すごい重さがあるって思いますね。

司 CさんやEさんは、お子さんに対して教育ママとは全然違う言葉を言えるようになって、とおっしゃったでしょう。私たちメンパーも、奥地圭子さんが入って下さったことで、観念論では言えても、わが子がそうになったら、はたしてどうだろう、というあたりをすごく強く揺り動かされたと思いますね。

一同 ほんとそうですね、私もそうだわ。

三、地域で子育てを

E M君の場合もそうだけれど、子どもにとつては、今特に核家族だから、大人って自分の親しかいないわけなんです。M君から「今日試験が終わったんだ」とか、「成績上がったんだ」とかの電話を私も受けました。自分の親だけでなく、大人とのかかわりを、子どもたちも求めているんだと思います。

私の住んでいる地域で少年サッカーのグループを作ったんですね。父親も母親も参加して、もう七、八年続いています。子どもは卒

業しちゃっても、私たち夫婦はまだかわっているんですけど。

そこで願ったことは、子どもたちが、中学高校生になって親以外の大人と話をしたいと思った時に、小学校の時にサッカーでふれあいがあった大人たちとは、おそらく話し合いができるんじゃないかっていうことでした。ですからOB会組織も作り、月二回集まったりしています。こういう地域の輪っていうのはとても必要だと思うんです。

うちの二番目の子が学校に行きたくないっていった時、二、三ヶ月ボンと他人の中に出したんですね。自分の懐の中に抱えこみたいと思うのが普通かなと思うんだけど、私たち夫婦は共にそういうことは意外とさっぱりしてて、ボンとつき離れたんですね。いろ



んな他人に接し、いわゆる他人の飯を食うという経験が子どもの気持をほぐしていったという気がします。だから親ができることなくで、ほんの一部でしかないと思っています。いろんなことに悩む高校生の時期、もっと子ども自身が試行錯誤できる本当のゆとりが必要だと心から思います。

H 地域で子どもたちをお父さんとお母さんが育てているという珍しい例でしょ。私、いつもいい話だなんて聞いているんですよ。

E 野球でもサッカーでも、学校の先生がやって下さっているサークルもあるんですけど、私たちが作ったのは、学校の先生は一切タッチせずです。今子どもたちが百四十人ぐらい、お父さんコーチと、父母とが三十人前後かかわってわいわいにぎやかにやっています。そんなところから我が子のことも、意外とかたくなにならずに視野を多少は広げてみられる気がしています。

四、親という存在

司 そうですね。それに対してFさんは、お嬢さんお一人で、親と子が向かい合うという点で一番緊密なあり方ですね。

F 私は子ども一人でもいいと思って一人にした責任があるのですね。一人っ子っていうのは、良きにつけ、悪しきにつけ、差別されてるんだなっていつも思うわけ。悪ければもう絶対一人っ子だからって言われるわけですよ、できるだけそういうことを言われないように子どもを育てるのが親の責任だろうと思っていたので、かなり子どもと距離をおいて育ててきました。それを助けてくれたのは、私が書道塾をやって、多くの子どもをみてますので、自分の子どももすごく客観的に見られるっていうところがあつたと思います。女の子なんですけど、母親と娘というより、仲間として育てたいという、だからそういう意味で子どもはかなり自由だったろうと思います。

司 書道塾をやって同じ年齢ぐらいのたくさんの子どもの来てもらったことは、お子さんにとって幸運でしたね。

F はい、子どももそういう育ち方がとてもよかったと言っています。子どもも一人の生徒としていた時もありましたし。

司 「親として」ということにこだわらなから話をうかがってみたのは、こんどのイベントが「母さんたちはがんばった」となつて

いるでしょ。そのテーマに対して、狭いんじゃないかっていう声を外から聞くんですね。

F 今の話の続きになるかもしれませんが。私も実はそういう感じを持ちました。それは、考えてみたら自分が子どもを母親として育ててるって感じ、あんまり持っていないですよ。ただ一人の先輩の大人として子どもを育てる義務がある年齢まであるだろうという感じで。だから「母さんたちは」っていうと何かひっかかります。

H 確かに、外からの声を聞いているとね、女性民教審に願いを託している人たちっているのは、今の教育とか社会はおかしいなと思いがちで一人ですることでもない。せめて旗竿げをした人たちを支え、それに託すると、カンパや意見を寄せて下さったわけ



すね。それは、母さんばかりでない、男の人も独身の人もあるのだから……。それを感じてきて、その原点の所に立ち返るとね。こんなことでいいのかなと思うことは、他にもいっぱい出てくるんですよ。カンパでやっていくということは、いい意味でも悪い意味でも苦しい。

司 そうですね。それはそうです。

B 「母さんたち」 っていう言葉ですが、「がんばった」 っていうのも、何か自分たちのやったことを誇示しているみたいでなんとなく抵抗があるんですけども。

それはさておいて、それぞれに教育に対する思いがあるから事務局も一生懸命やってくれたんだっていうことを初めに言ったのですが、その思いというのは、我が子さえ良くなればいいというものでは絶対ないんですね。

司 絶対なかったですね。

B だから、この「母さん」 っていうのは、我が子に対する「母さん」 ではなくて、日本中の子どもたちに対する「母さん」という意味に私はとらえているんです。公開審議会でも「早く提言を出して下さい。そうでないとうちの子に間に合いませんから」 っておし

やっていた方がありましたよね。

D それは私も感じましたね。うちはちょうど受験でしたから、Dさんのんきに何をやってるのって言われましてね。

何をやっても、すぐには変わらないわけでしょう？ そうするとみなさん、「じゃ、いいわ」という感じになるわけですね。明日、入試が改まるんならがんばるけれども、そうでなかったんなら話聞く必要もないわって感じですね。Dさんは好きなんだからおやりなさいって。

たまたま毛利来さんの子育て塾に行った時「都会に縁がない。こういうところで子育てできますでしょうか」との質問があったのです。毛利さんは「遠くまで子どもをやって、縁をお金で買うという形で与えるよりは、逗子みたいな形でお母さんたちが地元で縁をとりもどすという方が子どもに縁を与えることではないでしょうか」といわれました。私は教育も同じだなと、息子の受験を前にして、「今日あなたに改革した世の中を与えてあげることはできないけれども、少なくとも、よりよい方向を目指して生きてるつもり、それが私の回答なの。ごめんなさいね」という気持です。

矛盾の中を「ぎ、生きろ」と言われても辛いだろけれども、私は毛利さんの言葉からヒントを得て、それくらいいしかできないということとそれしかないんだということを思いました。先は遠いけれども、諦めずにかかわっていくことではない、ということね。

司 子育てに関して、失敗とか成功とか簡単に言えないことですけど。母親ゆえの闇というものは、ずいぶん見てきたし、自分の中に感じるわけね。自分の中に闇を見てしまった者として、その所から考えていったということも事実だと思うんです。私自身について。だから「母さんたちはがんばった」というタイトルが決まった時、こんな意味で「母さん」が生きないかなって思ったんですね。母親としての醜さ、それゆえの汚さ、そ

へ平雲

れゆえの苦しきっていうものをいっぱい抱えている人間が、そこから解放されることを願って何がしかのこをやってきたという意味だったら、私自身は「母さんたちはがんばった」っていうのは、受け止められるんです。

B でもそこまで説明して分かってもらうのはちよつと大変ね。

司 ちよつとなかなかですね。確かに「がんばった」っていうのも、私たちとしてはあまり言いたくない言葉なのだけれど、あのテーマがむしる話題を投げかけ、議論になるといいなと思ってるんですけどね。

H F市で開かれた体罰のシンポジウムは非常に盛り上がりつついい会だったんですね。

ずーっと私もかわってききましたが、この問題をしょってきたお母さんからある日電話がかかってきた時、それをまざまざと感じたんです。他人は体罰する教師が悪い、教育委員会が悪い、何が悪いと割り切って言ってしまうすよね。だからシンポジウムにも教育委員長を引っ張り出せばいいと、こともなげに言うんです。ところがその市の中に住んでいるお母さんたちには、それが現実起こってきた時に、我が子はどうなるだろうか、学校の教師はうちの子にどう対応するだろうか。

校長はどうするだろうか。教育委員会は学校をどうするだろうかっていうことが稲妻のようにバーツと走るのですね。そして、ケンカしたくないという言葉が出るんです。それをエゴだといえバエゴなんけども、じゃ勇氣を出してどこまで言えるのかというところが出発点になっていくんだと思うんですよ。親の氣持は微妙なんですね。

五、運動の中の構造

司 Cさんが公開審議会の時、心を込めたお料理を作って来て下さって、私たちは慰められたり、憩いのひとときを持ちたりして、その力はすごく大きかったと思うんですけれど。何時間もかけてお料理をして、重いものを運んでいらつしやって、ずいぶんご苦労がありましたでしょ？

C 私の夫は教育者ですべてに対して完全主義者だったためにすごく苦しんできて、どうやって生きていいのかわからない状態が長かったんですね。一方でピアノ教師のスタイルをとらなきゃならないし、ドロドロの中でもう死のうかどうしようかっていうところまで追いつめられて、そういう中で長男が育

ちました。そういう生活から、民教審は別世界で、聞くことすべて吸収できた氣がいたします。先生方にサンドイッチを召し上がっていただくことは、無上の喜びでした。

司 でも私たちは感謝しながらも、むずむずする思いもあつたんです。お茶くみ問題などに腹を立ててきた私たちが、Cさんにサービスされて、一時、男の置かれてる位置に自分たちを置いてしまっているような後めたさを感じてもいたのですが……。

Fさんが以前私に、メンバーがいて事務局の人がいて、ボランティアの人がいる三重の構造と言われた時、胸にグサツと刺さりました。

F 私が三重の構造に疑問を投げかけた真意は、一番苦しんでいる子どもたちを救うことを目的としている私たちが差別に対する視点をどこまでつきつめていたか、ということです。この点に関して、私たちのすべてがどこまで自らに問い、自らを正しえたのではありませんか。三重の構造の問題は、その日常的なあらわれだったと思います。

また、事務局が内部会議で発言してよいのかどうか、ということもありました。ずい分悩んだあげく、かかわった責任を会議の中で

どうとるかを考えれば、結局自分が言っているかなければならないのだと、勇気をもって発言するようになりました……。

B それはメンバーの方にもあったんじゃないでしょうか。こういうような雰囲気の中でこれを言っているのだろうかというように……。

H 審議の中で一人一人が自由であったか、本音でものが言えたかどうか、またそれをどう受けとめるかということが問題なんじゃないかしら。

私自身は、たえず全体が見えている。聞かえている場所に事務局はいる、そこに大事な役割を持っていると思っています。

司 私ほわりと欠席しなかったのですが、止む得ないことで欠席すると、いつまでもその回がわからないまま、ということになります。そういう時に唯一議事録がつないでくれたわけですね。議事録の意義をこんなに強く感じたことはありませんね。

それを毎回きちんとやって下さり、連絡もとって下さる事務局があってこそやれた活動だと思えますよ。女性民教審の特色というのは、期限が限られているということと、その間に臨教審の答申に対し対案を作らなければ

ならないというところにありました。短時間にならないうちに世の中の注目を感じながら説得力のあるものを作らなければならないというつらさが、無理をしいたり、小さなひずみを生んだかもしれませんか。

B ほんとうに皆、無理をしたと思うんですね。そのために、確かにひずみのようなものは一部に残ったかもしれないんだけど、半面、本当にお忙しいメンバーの方々が、いざという時、これだけががんばるんだということとを、感動をもって見てきました。意見が違うのは当然なことだけど。自分の主張は出しながらも、どこまで相手のいうことも聞くように努力できるかという、いろんな場面で、生き方の勉強になったような気がします。

六、運動の中で得たもの

B それに私は気がきかない人間で、自分の苦手なことで鍛えられた面もあるんです。裏方の仕事で支えていく位置に自分を置いてみると、初めて見えてくるものがありますしよ。それは収穫だったと思っています。

D 勇気を持って発言したというのは、やはり後ろに賛同者がいるというのがありまし

た。

H それが一番じゃないですか。

G 私もここにかかわらなかつたら、偏差値ばかり気にしている親になったと思うんです。ここで聞いたり見たりしたことを参考にしてやっていきたいと思っています。自分が知ったことをより多くの母親に知ってもらいたいなあとこのごろ思うんです。

またここに来るには、子どもに「学校が楽しくなるようにお母さんががんばってくるからね」と言ってお母さんががんばってくださると、いつも「学校楽しくなりそう？」と聞かれ、がんばらなくてはと励まされました。うちは男の子二人なんですけど、やはり男性も女性もよくなるには家庭科がすごく大事だと思いました。私が活動するにつれて、自分



で身の回りのことをするようになりました。それについても、男女を問わず家庭科をやることの必要性をすごく感じましたね。

H 私の夫は家庭科の男女共修いらなくらい家事万端うまいのです。最初は非常に調子よかったです、さすがに最近、あまりにひどい主婦ぶりをみて、主婦の婦をとりかえようと言いついて出しているわけです。

D とりかえればいいじゃない。(笑)

H まあそうですね。(笑) 帰りが一時、二時になると、このごろ言うことは「いつ終わるかな」とかね。「すいませんね、不自由かけて」と言う、「そういうことはない」と言うんです。「だけど一人で晩飯を食うのはおいしくないよ」と言われて、日常を大事にした上での運動ではないかと考えさせられています。

B Hさんのおつれあいにそんなことを言わせるなんて、私も責任を感じるわ。お詫びに行きたいくらい。私は、事務局の仕事だけど、献身的にかかわることから何かをつかめると思っているの。

G 私も今度のイベントに夫を引っばってこようと思ってがんばってるの。夫も、子育てにもっとかわかって、教育を考える何らかの手がかりにしてほしいと思ひまして……。

H いつも内なる闘い、外なる闘いのバランスをとりながら自分がどの程度できるかというところにいかなければ。だから日曜日は絶対どこにも出ないようにするというようなことはしているんです。

D 私も昨年のイベントの時感じましたね。男の企業の論理とかをいろいろ言っているけれど、この人たちは男よりすごい女たちだと。生活が大切だと言っても「え、この人たち生活してるの」という感じ。

司 そういうことを含めて、すべて短期決戦だから、その間目をつぶらなければと思ってきたんですけれど。

七、これからどうするか

A 娘や息子をそこそこの高校に入れて、有名大学に入れ、皆の知っている有名な会社に入れて、さあ大成功というお母さんたちが大部分だと思うんです。だけど、それを破るために私たちの提言ができたんですよ。

B 自分の子はそこそこの大学に入れて、という発想から抜け出さない限り、提言に賛同してもらえないでしょうね。そこそこの大学に入れてバンバンザイという人の裏には必

ずはいれなくて泣いている人がいるわけだから。

A そういうお母さんたちにどんどんアピールしていくことが必要。でもそういうお母さんたちにとって民教審の提言は、とても唐突にみえるでしょうね。

司 神奈川県の高教組の学習会に話に行った時、大胆な発想には心ひかれるけれど、それが出てきたプロセスがわからないと、夢物語じゃないかと言われたんです。Weの増刊号は、それに応えるものでありたいと執筆に際してお願ひしたのですが。

H 一番ひずみをくうのは、弱いものところ、そういうところの訴えを私たちはいくつ膚で感じ、目で見、耳で聞いてきたかというあたりが、女性民教審が一番問われるところではないかと思ひます。

D 弱い子がふみにじられるということは普通の子もやっぱりふみにじられているということなんですよね。

H また、F市のことになるんだけど、茨城大の今橋さんが体罰を受けた子の表面的傷はまもなく癒えるだろう。しかし、それを見ていた子供たちの心の中に体罰が一番根づくだろうと言っている。問題があるだけではな

くまわりの子どもの心を見過ごしにしているということが教育にとって一番悪いことなんだと思うけれど、女性民教審もそこまで追いつけ続けたかった――。

B もちろん教育の問題が二年間で終わるはずがないわけだし、二年間で大急ぎでまとめた提言がほんとにこれでよかったんだろうかという思いは残るし、六月十三日でいきなり解散になってしまったら、民教審にすがって来た方が綱をはずされてしまっただろうんだらうという気持ちもあるのよね。でもこの会の目的は、臨教審を監視して、私たち自身の提言を作りあげることだったわけだから、一つの区切りだと考えています。これからどうするかは、皆で考えて決めればいいわけだけど、女性民教審の設立の趣旨は、一応達成したわけだから、これで一区切りだと思ふの。

E これだけのものを打ち上げたからには、それにいかに血を通わせ、現実の子どもの教育環境にどう生かすのかが問われていて、それが賛同者の熱い願いでもあると思うんですけれども、だからこれからがほんとの教育運動なんじゃないかと思うんです。

司 これから先のことは、メンバーだけの

問題ではないと思います。賛同者とメンバーに線を引くとしたらおかしいわけ。ポンと打ち上げたものを一つ一つ検討していくためには二十数名では足りないのです。打ち上げた花火の中に共感するものを持っていただけで、それを自分自身の問題としてやっていただけたら。私たちも同じ人間で、特別に力があるわけでも何でもなくてね。期待されつばなしということもおかしい。

E 草の根的に広がっていくだろうとは思いますが、それをつなげる何かがあるんじゃないかって思うんですけど。

B でもそれは、上から与えられるものではないんじゃないかな。

草の根的な運動の広がりも大切だけど、提言を実行するのは行政側だから、実行させるにはどうしたらいいか、行政に働きかけることも必要ね。それから、この提言を実行するために、選挙に立候補する人があちこちに出現してくれたらうれしいわね。

司 六月十三日に打ち上げてこれで終わりというのでは熱い心をお寄せ下さった方々にお答えできないので、今後どうするかは話し合わなければなりませんね。自分が立っている場で、様々な場でやればいいという安易な

解決にするのじゃなくて、どういうふうにネットワークを作るかとか。結論としてはこれでは終わらない。むしろ始まるということですよ。もししたらそれがやれるかということとはたいへんなことだと思ふんですけれど。

H 私はせめて事務局の人間だけは散らないで何かしていきたいという気持ち。皆さんそうしていただけるのじゃないでしょうか。ずい分話し合ってきましたから、これからもその場を提供していきたいと思っています。

B 俵さんが最近お書きになった本に書いてあったんだけど、大変だった時期というのは、後から振り返ってみると、それなりに充実した楽しい時期だったって……。

H ちょっと無理をすることも必要よね。**司** 長時間にわたって、ありがとうございます。率直に話し合えてよかったと思います。



女性による民間教育審議会の 最終教育改革提言



教育改革・私たちの視点



(共同通信社提供)

国のための改革か、子のための改革か

私たちは、母親として、あるいは現場の女性教師として、子どもたちや、いまの教育を見つめてきました。

そして、この教育では、子どもたちは不幸であり、何とかして教育制度や内容を変えなければと、切実に思うようになりました。もし、臨教審が私たちと同じ立場にたち、私たちが願っているような改革案を出してくださるのなら、私たちは臨教審におまかせしたいでしょう。その方が楽ですから。

けれども臨教審は、メンバー構成からして、私たち母親や、第一線の女性教師の代弁者ではないということがすぐわかりました。そして、その後の審議内容や答申を読んで、基本的に、臨教審と私たちは教育改革についての視点がちがうということがよくわかりました。それは、このあと「臨教審についての私たちの考え」でも述べます。

私たちは、二一世紀の「日本という国家」の国威発揚のためや、国家財政のために、教育をこう変えたいという視点には立ちません。

もちろん私たちも、世界の現状が、国家単

位で成り立っていることや、教育をその国の財政抜きで語れないことは承知しています。

しかし、一人ひとりの親や教師にとってかけがえのない一人ひとりの子どもたちが、目の前でこんなに苦しんでいる姿を放置して、何が二一世紀の日本でしょう。何が国家財政でしょう。

二一世紀の日本は、いま目の前にいる子どもたちが、心やさしく、健康で、そして聡明でたくましく育つことによって、彼らが創ってゆくものです。それが、民主主義国家というものです。私たち、いまおとなの日本人は、そのためには、財政的努力を含めて、最大限の努力を惜しまない。それが教育重視の日本の姿ではないでしょうか。それは、私たち親が自分の老後を犠牲にしても、子どもたちの教育には費用を惜しまない気持ちと同じであるべきです。

私たちは、まず目の前の子どもたちが苦しんでいる現状を早急に解決するための緊急提言をします。たとえば、人権無視の管理主義的教育や体罰教育。たとえば、現実子どもたちを死に追いやっているいじめの問題。あるいは、子どもにとって、ぎりぎりの悲鳴である非行や、自己防衛としての登校拒否。そ

して、それらすべての原因になっている受験競争などについての緊急提言です。

もちろん、これらの問題は応急処置だけで解決できることはありません。いじめ一つをとってみても、人間性に合わない生活環境、社会構造、労働形態、情報や文化のあり方など、教育をはるかに超えた政治経済の領域に、より根本的な問題があると私たちは考えています。

しかし、「社会が変わらなければ、何をやることも無駄だ」と文明評論家のいうようなことをいうゆとりは、私たち母親にはありません。いますぐ出来ることを、出来ることからやって、一人でも二人でも、自分の人生を諦めたり、殺されたりしてゆく子どもを助けたと考えます。

それが第一章に提言する緊急提言の意図です。

第二章では、少し時間をかけても取り組むべきやや根本的な教育改革提言をします。第二章の提言は、直接子どもとかわる学校の制度や内容に限定しています。教師やPTA、教科書、教育行財政、とくに重視すべき教育内容や施策は、個別に第三章で提言します。教育の領域を超える大きな、しかし、根本的

な問題についても別章とし、第五章で提言します。

十八歳までが親の責任

そして、もう一つお断りしておくことがあります。

それは、第三章までの私たちの教育改革提言は、乳幼児期から、高校卒業までを対象にしているということです。

その理由は、学校教育について、私たち女性や親としての責任範囲だと考えるのは、わが子の高校卒業までであるからです。国家や企業はいざ知らず、私たち親は、わが子が親の手を離れ、自立していくのは十八歳ごろがふさわしいと考えています。いいかえると、十八歳ごろまでに、一人の人間として、家庭人として、地域住民として、市民として、職業人として一人前になってほしいと、親は願っています。昔の親は、その目標が十五歳の元服だったかも知れません。しかし、現代の親の目から見て、十五歳は肉体的にはようやくおとなであっても、精神的にはまだまだ未成熟です。また、昔と今では、社会のありようも、大きく変わりました。十五歳の巣立ちには、いささかの無理があると、私たちは

考えます。だから、ほとんどすべての親が高校進学を願っているのです。

私たち女性民教審は、親としての学校教育の責任範囲を高校卒業までとします。そして、その時点までにわが子の人間形成が一応の目標に到達できるようにと願っています。その立場に立って、親権者としての教育改革を提言します。

高校以降の教育は、もう、わが子のためばかりではありません。私たち自身のためのものでもあります。それについては、別章で、一市民として、あるいは一主婦としての立場で提言することになります。

たとえば、私たち主婦が、職業を持ちながら、マイホームのローンに追われながら、それでも学びたいと考えた時、学べるような学校にするにはどうしたらいいか。英語も数学も化学も、とっくの昔に忘れてしまった主婦が、五十歳からでも学べる大学とはどんな大学か。

こんな立場での大学改革提言は第四章です。

親としていいこと、 女としていいこと

もう一つ、お断りしておきたいことがあります。

教育改革は、すべてに触れようとする、大変な仕事です。カリキュラム一つとっても、三年生の算数はこの内容でいいかと、文部省の定めている高校卒業のための単位数はこれでいいかと、大学や大学院の研習内容はどうかとか、情報化社会と教育との関係とか、社会教育、社会体育、図書館、給食、学校施設など無限にひろがります。

私たち三人のメンバーと、少数の事務局、しかも全員ボランティアという体制で、そのすべてに触れることは到底不可能です。そこで私たちは、私たちの教育改革を、二つの視点で切り、どうしても、これだけはと思うことだけを提言しました。

その視点の一つは「社会の中の競争原理を未成年の教育の場に持ち込み、子どもたちを苦しめ、ゆがめることだけは防ぎたい。とくに高校卒業の十八歳までは、何としても、子どもたちの成長や、人間性にふさわしい教育環境を死守する」という視点です。臨教審に

は、このいちばん大事な視点が欠けています。私たち親の最大の怒りである偏差値体制、選別教育について臨教審が無視するのなら、私たちが提言するしかありません。

もう一つは「女性の視点」です。臨教審には女性の正メンバーは三人しかいらつしやらないから無理なのかもしれません。が、私たち女性の目から見ると、いまの教育制度や内容は男性の目で作られています。臨教審をはじめ、政府の作る審議会は、つねに男性が大多数を占めているから当然のことでしょう。

私たちは、日本の公教育が実施されて以来はじめて、女の視点で教育改革を提言することになりました。私たちの提言を仔細に読んでいただければ、全編に女性の目と私がこもっていることに気付かれることでしょう。

私たちは、この二つの視点を軸に教育改革提言をいたしますが、臨教審の皆さまがたは、ぜひ私たち親の願いを全面的にとり入れた最終答申を出してくださいように。

そして、文部省の役人の皆さまは、私たちの提言を現実化するために全能力を発揮してください。私たちの提言を主権者として期待いたします。



ハイライト



女性民教審、全教育改革提言(抄)

「教育改革・私たちの視点(前掲)／子どもと教育・私たちの視点／臨教審に対する私たちの考え」で筆を起し、「おわりに——親としての私たちの決意」で結んだ「女性による民間教育審議会の最終教育改革提言」は六万八千字に及ぶもの。そのすべてを紹介できず残念です。せめて6／13に発表した提言を要約して載せました。提言は、今さらに検討を進めています。(編集部)

第1章 いま、緊急になすべ

きこと

〈子どもが生き生き学ぶために〉

1 子どもたちの心を深く蝕んでいる通知表の相対評価を廃止する

2 子どもが生き生き学べ、深く理解できるように、体験学習を大幅にとり入れる

3 やり直しのきく学校にする

①休学・復学・転入学をゆるやかにする
②在籍出向制度のようなものを、各学校で工夫する

4 子ども社会に自治能力を回復する

①学校で、児童・生徒会活動を育てる
②地域社会で、子ども集団の遊びを確保するため、「場所と時間と仲間」を保

障する

③子どもの遊び場は、人工的に整備せず、可能な限り、自然に近い状態にする
〈子どもと教師のふれあい〉

5 行政は、教師の雑用を減らし、子どもとふれあえる時間を増やす

6 教師も休み時間や放課後、できる限り職員室を出て、子どもや生徒に接する

7 生徒と教師の宿泊施設を、各教委の地域内に設ける

8 文部省と日教組の対立を解消して、明るい学校にする

〈父母と教師の信頼を回復する〉

9 内申書を改革する

①内申書は「成績証明書」と改める
②成績証明書は、指導要録の写しではなく、私たちの提言した評価の方式によ

る

③「性格・行動の記録」や、教師の主観にもとづく、マル特と呼ばれる特記事項を廃止する

④成績以外には、在学中の出欠状況、生徒会、クラブ活動など事実だけを記入

⑤成績証明書は、本人とその保護者に公開し、異議申し立て、訂正、削除権を保障する

10 生徒や家庭のプライバシーを捜査機関に流すことを禁止する

11 警察や家裁への学校からの上申書、教育委員会への報告書も、本人とその保護者に公開し、異議申し立て、訂正、削除権を保障する

12 〈管理・体罰をなくすために〉
「学校憲章」を制定する

13 「きまり検討委員会」を各校に設置する
14 体罰否定を、行政、学校、PTA、地
域社会であらためて再確認する

15 万一、体罰があった時、親や子は、苦
情処理委員会に訴えることができ、そこ
で教師も意見を述べる事ができる

16 中学・高校の部活の軍隊のような人間
関係をあらため、体罰を禁止する

17 中学・高校の部活を日曜に実施しない。
日曜子どもは家庭に返す

18 中学・高校の部活を強制しないこと

〈問題を解決するために〉

19 子ども、親、教師は、苦情がある場合、
苦情を訴え、異議を申し立てて問題解決
を求める権利を保障し、各学校に「苦情
処理委員会」を設置する

20 学校段階で解決がつかない時は、各教
委単位の苦情処理委員会が担当する

〈家庭を社会で支えるために〉

21 学童保育をもっと充実する

22 働く両親に社会教育の機会を増やす

23 高校の転校を全国的、世界的に保証す
る

第2章 18歳までの学校改革

〈小・中・高校に共通する改革〉

以下(一)内の数字は提言全体の通し番号

1 (24)教育課程を見直し、精選し、もっと量
をへらし、ゆっくり学べるようにする

2 (25)指導要領は、ガイド・ラインに戻す

3 (26)指導要領の形式や内容を改める

4 (27)マンモス学校を作らない。教師たちと
相談し、適性規模に改革する

5 (28)一クラスの生徒の数を、25人程度に押
さえ、最大限30人を超えない

6 (29)緊急事態のために、かならず各学校に、
ゆとりの人員を配置する

7 (30)養護教諭をすべての学校に配置し、代
替要員を確保する

8 (31)「学校災害補償法」を制定する

9 (32)すべての学校を週休二日にする

〈無試験・無料で教育を〉

10 (33)「高校就学権」をすべての人に保障する

〈高校就学権保障のための改革〉

11 (34)公立高校での就学権保障

12 (35)進学する公立高校は、原則として地域
の数校(定時制を含む)の中から選ぶ

2 (34)中学や高校は、高校選択の情報を提供
し、見学、懇談の機会を十分に用意する

3 (35)各公立高校は一切、学力テスト、内申
書、推薦制による選抜をしてはならない

4 (36)希望者がその公立高校の定員をオーバ
ーした場合、地元優先枠を設け、残りは
抽選かウエイティング・リスト方式

●私立高校での就学権保障

1 (37)私立高校へ進学する生徒にも、公費か
ら、公立高校の一人当たり学費と同じ金
額の学費を直接支給

2 (38)入学金、授業料の決定は、各学校の自
由、かりに、公費の基準より高い場合、
差額は、生徒負担とする

3 (39)可能な限り無試験の生徒を受け入れる

4 (40)学区は、各学校が自由に決定する

5 (41)無試験の就学希望者を受け入れること
について、公立高校や私立高校関係者と
協議し、全員受け入れが出来るように、
協力する

6 (42)自校の個性を創るため、独自の入試を
実施し、一定枠の選抜による生徒を入学
させることは自由だが、学力、あるいは
特定の能力で生徒を選別したことにな
り、公費の公平配分の原則に反する。し

たがって、選抜を実施した生徒数に応じて、学校への私学助成を削る

7 (43) 私学助成を受けた学校は経理を公開する

〈高校の教育内容と方法の改革〉

1 (44) 公立高校は、原則として総合制高校にする

2 (45) 総合制高校の教育内容は豊富、多様にし、入学後自分の興味に沿って、さまざまなことを学べるようにする

3 (46) 学校間、社会教育、実社会、さまざまな場の人材や教育機能を活用する

4 (47) 画一的な授業内容を最小限にし、それぞれの興味にあつた学習を豊富にするため、必修科目は、いまより大幅に減らす

5 (48) 最低限の必修科目は、人間として、市民として、家庭人としての自立に欠けない労働教育、家庭科、性教育、社会科などに限定する。

私たち親は、わが子が18歳までに親離れし、自立した人間として巣立って欲しいと考えている。親が責任を持つ教育の最終コーナーは、女として、男として、妻として、夫として、母として、父として、職業人として、市民として、立派に

責任の果たせる人間になるための勉強を必修科目に、国語、数学、英語など選択科目でよい

6 (49) コース制はとらず、単位制高校とする

7 (50) 労働体験学習を重視し、労働の実体験を単位として認める

8 (51) 自主研究や、討論形式の学習をふやす

9 (52) 進度別のクラスを作る時は、必ず生徒自身にクラスの決定をまかせる

10 (53) 生徒は希望する教師のもとで、ホーム・ルームを作り、自治や連帯を学び、友情をはぐくむ

11 (54) 公立高校の男女別学・男女比のアンバランスを禁止し、男女ほぼ同数を原則に

12 (55) 高校の学校運営に、生徒・親・地域住民の参加を保障し、学校を開く

13 (56) 原則的な総合高校のほかに、各都道府県が、水産や園芸、音楽や美術、演劇などに重点を置くなどごく少数の特色ある高校を設置することはかまわない

〈自分の進路を見つけるために〉

1 (57) 各高校の「進路情報室」に資料を完備し、生徒の進路決定に万全の体制をしく

2 (58) 大学入試センターを「大学情報センター」に改め、都道府県にそのランチを

置く

3 (59) 就職希望者のため、職場は講師派遣や職場見学、労働体験学習の協力をする

4 (60) 高校の単位の中に、大学教養課程の経済、法律、社会学、自然科学などの入門的な授業を設け、学部選択の指針にする

5 (61) 夏休みや放課後、生徒は大学のオープンコースを見学したり、実際に聴講したりして、大学や、その内容を見比べ、進路を決める時の参考にできる

第3章 改革すべき個別の課題

〈乳幼児と父母に学びの場を〉

1 (62) 社会人として、両親が学習できる場を作る。職場は職業を持つ父母に受講時間を保証する

2 (63) その際子ども同士人間らしい交わりができる保育室を作る

3 (64) 幼児に、太陽と木と土と水がある広場や、本物の文化にふれる機会を

4 (65) 幼児教育の機会均等を

5 (66) 保育者の勤務条件の向上

〈子どもに合った教科書を〉

1 (67) 教科書は教師が選び、学校でまとめて

教育委員会に届け出る制度にする

- 2 (68) 教科書の選定理由に、使用計画を生徒、父母、地域住民に公開、出た意見を参考にして教師が決定する。異議申し立てに對しても公開で応じる

- 3 (69) 政府による教科書検定は行わない。民間の委員会が教科書内容を調査研究、レポートを公表して選定の参考に供する。憲法に反しない限り、思想審査にわたることは行わない

〈私たちの家庭観と家庭科教育〉

権力の側からのおしきせでない、個人の尊厳と男女平等にもとづく家庭観を、男女で学ぶにふさわしい家庭科の中学・高校での早急な実施を、学校を生活と地つぎの場所に作りかえるために

- 1 (70) 家庭科を、生命と生活の営みとしくみを学ぶ教科として再編成する

- 2 (71) 家庭科教員養成のための教育課程を見直す

- 3 (72) 総合科学としての家政学を再構築する

- 4 (73) 普通教育としての家庭科を確立する

〈豊かな男女観を育む性教育〉

- 1 (74) 大学の教員養成課程に「性教育」の講座を設け、現職教師についても、自主的

な研究と実践が十分行えるようにする

- 2 (75) 男女平等、男女共学教育を充実させる

- 3 (76) 幼稚園から高校までの教育課程に、各年齢や実態に応じた性教育を位置づける

- 4 (77) 妊娠、中絶した生徒を退学処分としない。出産後も学習権を保障する

- 5 (78) 指導には保健所や産婦人科医など地域社会との連携をはかる

- 6 (79) 性教育に関する親の学習がより社会教育で活発に行われるようにする

〈障害のある子もいない子ともに〉

- 1 (80) 「障害児」は、自分の住んでいる校区の普通学級へ通学することを原則とする。

そのために

- ① 一学級の人数を減らす

- ② 教師・介助員を必要に応じて配置する

- ③ 施設・設備・教員の研修等の条件整備

- ④ さまざまな「障害」に対する援助は、

その子どもの必要に応じて行う

- 2 (81) 当面の方策として

- ① 本人及び親の普通学級への入学希望を認め、必要があれば、教師・介助員の配置、施設の整備等を行う

- ② 障害児学級、盲学校、聾学校、養護学校から、校区の普通学級への転入を自

由にし、2の①条件を整える

- ③ 学童保育所に「障害児」も入れるように条件を整える

- ④ 「障害児」の就職の場を保障する

〈教育の国際化〉

- 1 (82) 外国の学校で教育を受けた子どもは、入国した時点でいつでも、公立の高校に入学、編入できるようにする

- 2 (83) 私立の高校が入学・編入試験を行う場合、海外での学習が評価できる滞在国の言語による作文と面接などを。外国の学校では学べない日本の国語・数学・理科・社会は入試科目としない

- 3 (84) 外国の高校で学んだ履修単位を認める

- 4 (85) 日本語力が充分でない生徒のための教育を保障する

- ① 日本語補習クラスを設ける

- ② 各国語のバイリンガルの教員を配置する

- ③ 外国で身に付けた言語、文化の保持、伸長をはかる

- 5 (86) 国際学校を正式の学校として認定する

- 6 (87) 海外日本人学校を現地にひらく

- 7 (88) すべての学校に九月入学制を導入する

〈教師はこう変わる〉

1 (89) 大学の教職課程を教育実習中心に

- ① 少なくとも一年間、教育の現場で学ぶこと。学生は、まず、複数の学校を主体的に見学、自分の研究テーマを決め、テーマに合わせて実習校を決定する。随時、その学校に通い、現場の実務を分担しながらテーマの研究を進める
- ② 教科教育法、授業研究、教職論文などの指導をする大学教員には、学校や子どもの実態を把握する大学教員の現場派遣制度を

2 (90) 教員の採用・昇進制度を改革する

- ① 教員採用資格試験において、ペーパーテストでは、瑣末で雑多な試験問題を排し、身上調査、面接、思想信条の自由を侵すような質問や評価のしかたを禁止する
- ② 教育委員会や校長が、採用の際、思想信条の自由を侵すような質問や評価のしかたをすることを許さない
- ③ 選考の方法、試験問題、採用の基準などを公開し、可否決定の理由を、請求があれば本人には公開する
- ④ 教員の管理職登用にあたって、公募

による資格試験を必ず行う

3 (91) 新任教員の研修についての提言

- ① 新任教員特別研修に、退職教師などが、一対一で指導するのは、新任者を萎縮させ、新鮮な心で創意を発揮することを妨げる。教師集団の中で、自由に意見を交換しながら、経験を積み、のびやかに学ぶことが必要
- ② 試用期間は従来通り六か月とし、研修後の採用取り消しはしない
- ③ 研修期間中は、学級担任とならず副担任や学年所属として、授業やその他の教育活動を行う
- ④ 研修期間は、教員定数の枠外として配属する。人員の余裕ができ、他の教員もお互いの交流や、研修の時間が持てる
- 4 (92) 現職研修をこう変える
- ① 教員は現場で切実に悩んでいること、親や住民が望んでいることをテーマとし、時には親や地域の人たちも交えて、研修を行う
- ② 文部省や教育委員会が行う現職研修会は、現場や地域住民の要求に応えるテーマを選び、研究指定校を強制したり、公的研修会参加を昇進の条件にしない

- ③ 民間教育団体、組合主催の研修会などに参加することで、不利益な扱いを受けない

- ④ 教員の研修が子どもにいわせられないよう、人員の余裕をもたせ、参加の条件をととのえる

5 (93) 社会参加休暇(仮称)を創設する

6 (94) 社会人教師をふやす

- ① 社会人が教員免許状を取れるよう、教職課程の夜間講座を設ける
- ② 免許状取得者は、大学在学中に取得したものと差をつけない。採用後、長く働き続けられるようにする

- ③ 社会人から教員になる場合も、初任者研修は、大卒採用者と同じにする

〈教員養成や研修内容にせひ加えるべきこと〉

- 1 (95) 養護教諭の養成課程を四年制大学に新設増設し、その内容を充実させる

- 2 (96) 教職を志す学生は、教職課程または、それ以外の課程で、憲法を必修として学ぶ
- 3 (97) 男女平等教育について学ぶ

- 4 (98) 3とも関連して「性教育」について学ぶ
- 5 (99) 「障害児」を普通学校に受け入れるための学習をし、実習訓練も受ける

〈PTAをこう変えたい〉

- 1 (100) 行政は現職教師に、PTAの正しい認識を育てる研修を行う
- 2 (101) 大学の教職課程では、PTAについて学ぶことを義務づける
- 3 (102) PTA活動は、休日、夜間を原則とし職業を持つ父母や教師が参加できるように条件を整える
- 4 (103) PTA活動の自主、自立を重んじ、行政や管理職の不当な干渉を禁止する
- 〈学校を地域にひらくために〉
- 1 (104) 教育委員会と学校は、地域の住民に情報を公開し、公報活動をする。各教委は、そのための予算を、学校に配分する
- 2 (105) 学校は、地域社会や社会教育の行事の担当教師を決め、児童、生徒向けの地域行事を知らせ、参加を奨励する
- 3 (106) 教員研修に、社会教育や地域社会について学ぶコースを設ける
- 4 (107) 学校行事やPTA行事のお知らせを、地域の掲示板に貼り、地域住民の参加を可能にする
- 5 (108) 各学校や地教委に、「教育ヘルパー」受けつけの窓口を作り、地域住民の意欲を積極的に活用する

〈住民の声を教育行政に〉

- 1 (109) 住民の手で教育委員を選べるように、国の法律を改正する
- ① さし当たって準公選からスタートしてもよい、その際、政党や大きな組織が介入しないような歯止めをつける
- ③ 公選・準公選を実施しやすいように、適正規模の教育行政区域を再編成する
- 2 (110) 教育委員の活動を活性化する
- ① 教育委員の定数を、行政規模に応じて五人〜十一人の幅で選べるようにする
- ② 市区町村の教育長を、教育委員からはずす
- ③ 教育長の承認制を廃止する
- ④ 教育長は、教育委員による任命とする
- ⑤ 教育委員の権限を拡大し、待遇をよくする
- ⑥ 地教委の人事内申書を、実質的に尊重し、東京特別区の権限を市並みにする
- ⑦ 教育委員の教育実情調査権を明記する
- ⑧ 会議や教育情報の公開を明記する
- ⑨ 教育委員会の財政権復活を再検討する
- 3 (111) その他教育行政で改革すべきこと
- ① 教員の採用試験、校長、教頭試験から情実、学閥を追放し、情報を公開する。

現場教員の意見と父母の意見を反映させるシステムを導入する

② 私立の小・中学校の設置基準を定める場合、私学の自由を尊重し、父母に対しては授業料の補助制度を設ける

第4章 18歳からの学校改革

〈私たちの理想とする学校像〉

- 1 (112) 生活者のための学問を
- 2 (113) 何歳でも入れる学校に
- 3 (114) 学費は親にたよらない
- 4 (115) 在学期間は自由に決める
- 5 (116) 専門学校にも公費補助を
- 6 (117) すべての学校は公費補助のものと民営に、現在の国公立大学はなくなる
- 7 (118) 学校の自治は守られ、学校の運営に学生の参加保障を
- 8 (119) 学校は情報を公開し、経理について市民のチェックを受ける
- 〈大学間の格差をなくす〉
- 1 (120) 国立大学間の予算配分の不平等をなくす、私立大学に大幅な国庫補助をし、大学の諸条件の不均衡を改める

〈入学の機会を年二回に〉

2 (121) 入学時期を年二回とする

3 (122) すべての大学に夜間部を設け、昼夜開講制とし、一部二部の学部区別をなくす
〈無審査入学のオープン・コース〉

4 (123) だれでも無審査で入学できるオープンコースを必ず設ける

5 (124) 図書館その他の大学付属施設を公開、夏休みにもオープン・コースを開くなどキャンパスを一般の人たち、地域の人たちが活用できるようにする

6 (125) 転部、編入、単位互換など、他の学校との横の移動がしやすい制度を取り入れる

7 (126) 転部、編入、単位互換などを含めて、単位取得、進路変更などの情報を提供し助言を受けられる態勢を整える

8 (127) 大学の運営に学生や市民の参加を保障する制度を設ける

9 (128) 入学審査の期日や方法の統一は行わない

〈入学審査の改革〉

10 (129) 入学審査の方法や審査基準をできるかぎり多様化、複合化する

① 学力テストの点数のみによる審査をな

くし、さまざまな審査資料を活用して入学者を決める

② 高校卒業後、すぐ大学に進学するものについては、同一高校からの入学の集中を排除する基準を定める

③ 学生がなるべく男女同数に近くなるような基準を定める

④ 社会人(含主婦)、外国人留学生、在日外国人、海外帰国生、障害者などには特に優先枠を設け、多様な学生が入学できるようにする

⑤ 抽選、ウェイティング・リスト方式なども取り入れる

11 (130) 入学審査の情報を公開する

12 (131) 卒業認定は、民間機関から、学校名を入れない大学課程終了証明書を発行する

第5章 国や社会に望むこと

〈教育を支える社会を〉

〈親にゆとりを取りもどす〉

1 (132) 父母の労働時間を短縮し、週休二日制を実施する

2 (133) 育児休暇・子育休暇をすべての父母に、国の法律で保障する

〈学歴・学校歴社会をなくす〉

1 (134) 就職に関して使用者への要望

① 15歳からの就職希望者のために、年少者にふさわしい就職先を拡大、整備する。その際、教育的配慮をし、労働条件にもきびしい基準をもうけること

③ 高校卒業以降の就職試験にあたって、指定校制度を全廃する

② 学歴や出身校にとらわれず、職業経験や社会体験、家庭生活の中で学び、身につけることも評価する

④ 同一学校からの採用の集中を排除する

⑤ 大学以外の教育機関、訓練機関で学んだことや資格を重視する

⑥ 大学に就職のあつせんを求めず、独自に公募する

2 (135) 大学は、学生の就職をあつせんしない

3 (136) 公的職業の資格取得にあたって学歴を問わない制度を確立する

4 (137) 学習休暇制度をすべての職場に設ける
〈学歴差別禁止法の制定を〉

5 (138) 学歴・学校歴による差別をなくすために「学歴差別禁止法」(仮称)を制定する

(次頁参照)

【学歴差別禁止法（試案）】

1 法の目的

この法律は、法の下での平等を保障する憲法の理念にのっとり、雇用における学歴や学校歴による差別を禁止する。だれもがその職業能力や適性に応じて、就職の機会を得、また均等な待遇が確保されることを促進するために制定される。

2 基本理念

これまでの雇用慣行が、学歴または学校歴を偏重してきたために、人の職業選択の自由や、勤労の権利などの基本的人権が侵害され、子どもたちがはげしい進学競争に駆りたてられてきたことを反省し、このような社会的ひずみを是正するために、あらゆる方策をとることとする。

3 国や地方公共団体の果たすべき役割

国及び地方公共団体は、上記の基本理念に従って、学歴・学校歴差別を解消するための啓発活動をしなければならない。

4 差別の禁止（事業主の義務）

①事業主は、労働者の募集、採用、配置、昇進、教育訓練について、学歴または学校歴による差別的取り扱いしてはならない

②事業主は、学歴または学校歴によって、労働者をコース別に採用してはならない

③事業主は、学歴または学校歴によって、労働者の賃金に差をもうけてはならない

④事業主は、特定の学校に対して、個別の学生に関する情報を入手することを依頼してはならない

⑤事業主は、労働者の募集、採用にあたり指定校制度をとってはならない

⑥事業主は、労働者の定年退職、解雇について学歴または学校歴により、異なる基準をもうけてはならない

5 情報提供の禁止

①学校（中学、高校、短大、大学、大学院、専門学校を含む）の学生に関する情報を、学生本人に知らせる以外、一切提供してはならない

②職業安定法第二章第四節（学生若しくは生徒または学校卒業者の職業紹介）を削除する。但し中学、高校においては、進路指導に役立てるため、及び年少の労働者が就職後不当な待遇を受けることを避けるため、あらかじめ事業

所から情報提供を受けることは差し支えないものとする

6 ガイドライン

労働大臣は、学歴・学校歴差別を解消するために、ガイドラインを設定し、あらゆる具体的方策を講ずる。

〔例〕募集広告のあり方／入社試験の方法／面接試験の質問事項／履歴書の書式の変更／学歴に関係なく受けられる業種試験の増加

禁止事項に関する適用除外（たとえば、職務遂行上どうしても学歴についての情報が必要な職種であることを、事業主が証明できる場合など）

7 是正勧告、公表

上記に違反した場合、労働者側からは労働基準監督署に申し立てをすることを認める。申し立てを受けた監督署は、調査、指導、助言、勧告をすることができる。もし特定の業者が勧告に従わない場合は、その事業者名を公表する。

△女性による民間教育審議会の活動と審議経過▽

Ⅱ「1985年」Ⅱ

2月8日 女性民教審の発足準備始まる

4月8日 発足記者会見

4月16日 第1回公開審議会

◇教育の自由化について

4月19、20、21日 教育110番実施

* 約300本の訴えの電話があった

4月25日 参議院文教委員会を傍聴

東進会（わかる子をふやす会）を

訪問

5月7日 第2回公開審議会

◇臨教審「審議経過の概要」を読む

で「民教審」側からの問題提起

◇教育110番の結果報告

5月15日 第1回非公開審議会

◇今後の活動について

* 公開、非公開審議会を各月1回と

することを決める

5月21日 第3回公開審議会

◇教育110番のまとめと分析

5月22日 臨教審関東地区公聴会に7名参加

5月28日 臨教審へ公開質問状を提出

6月4日 第4回公開審議会

◇現場の教師による教育の現状報告

および自由討論

6月10日

◇教育110番の内容について等

6月12日

◇女性民教審の教育改革案審議

6月18日

◇女性民教審の教育改革案審議（前

回）に続く

6月26日

◇「臨教審第一次答申」に対する私

たちの意見発表

7月2日

◇大学改革を考える

7月10日

◇今後の活動について

7月16日

◇臨教審メンバーと民教審世話人と

7月16日

◇大学改革を考える

◇臨教審メンバーとの懇談の報告

8月20日 第5回非公開審議会

◇次の公開審議会の持ち方について

◇「4月4日女性民教審の教育改革

案を発表する会」について

◇今後の活動について

9月3日

◇教員養成（その1）

9月14日

◇学習合宿の持ち方について

9月17日

◇教員養成について

◇学習合宿の持ち方について

◇会の財政について

◇今後の活動について

9月23、29日 第7回非公開審議会（学習合

宿）

◇母子関係と家庭のしつけ

◇教育行政

◇男女平等教育と家庭科

◇これまでの問題点の整理

10月1日 第7回公開審議会

◇教員養成（その2）

3月22日 《4月4日の集い》準備委員会

4月1日 第19回非公開審議会

◇《4月4日の集い》リハーサルと打ち合わせ

4月4日 第13回公開審議会（女性民教審の教育改革案を発表する会）

4月15日 『わたしは提言する 女たちの教育改革』を国土社より出版

4月20日 世話人会

◇今後の運営について

4月23日 神奈川県民協議会集会に5名参加

4月24日 第20回非公開審議会

◇《4月4日の集い》の反省

◇今後の活動について

5月8日 事務局移転（新宿区矢来町56、56番館1Fへ）

5月20日 第21回非公開審議会

◇女性民教審の年間活動計画について
て

◇次の公開審議会の持ち方について

6月3日 第14回公開審議会

◇「臨教審第二次答申」を読んで

◇「民教審改革提言」への意見

7月1日 第22回非公開審議会（学習会）

◇高校義務化について（外国の高校

事情を聴く）

7月22日 第23回非公開審議会（学習会）

◇高校義務化について（教育行財政問題）

8月22日 第24回非公開審議会

◇会の運営について

◇次の公開審議会の持ち方について

9月2日 第15回公開審議会

◇どの子も活きる高校を——女性民

教審の考える高校義務化

9月9日 第25回非公開審議会（学習会）

◇臨教審の現状と今後の見通し

10月1日 第26回非公開審議会（学習会）

◇高校義務化について

10月7日 第27回非公開審議会（学習会）

◇高校義務化について（高校就学権の保障）

10月21日 第28回非公開審議会（学習会）

◇大学問題（大学人の発言）

10月28日 第29回非公開審議会

◇次の公開審議会の持ち方について

11月4日 第16回公開審議会

◇女性民教審の考える高校改革（案）の発表

11月18日 第30回非公開審議会

◇次の公開審議会の持ち方について

12月2日 第17回公開審議会

◇私にとって大学とは（大学生・卒業生の発言）

12月16日 第31回非公開審議会

◇大学問題（入試のあり方）

◇これからの活動について

12月25日 第32回非公開審議会

◇次年度の計画について

◇次回公開審議会の持ち方について

Ⅱ【1987年】Ⅱ

1月9日 第33回非公開審議会（学習会）

◇企業と大学（企業人を招いて意見を聞く）

1月13日 第18回公開審議会

◇どう変えるか大学入試と就職

1月23日 第34回非公開審議会

◇大学問題（大学入試・大学の中身をどう変えるか）

2月3日 第35回非公開審議会

◇大学問題（大学予備体験制度を中心として）

2月13日 担当者会議

◇大学問題

2月14日 第36回非公開審議会

◇大学問題

2月18日 担当者・世話人会議

◇大学問題（アメリカの大学事情を聴く）

2月21日 担当者会議

◇臨教審の家庭観と私たち

2月24日 第37回非公開審議会

◇臨教審の家庭観と私たち

3月3日 第38回非公開審議会

◇高校・大学改革案骨子のまとめ

3月10日 第19回非公開審議会

◇臨教審の家庭観と私たち

◇緊急アピール——体罰をうけて

3月15日 担当者会議

◇高校・大学改革案づくり

3月19日 担当者会議

◇高校・大学改革案づくり

3月23日 第39回非公開審議会

◇臨教審の家庭観と私たち

4月4日 第20回非公開審議会（長時間討論）

◇私は教育をこう変えたい——女性

民教審案をめぐって

4月14日 第40回非公開審議会

◇最終改革案づくり

◇《最後の集い》について

4月17日 第41回非公開審議会

◇最終改革案づくり

4月18日 第42回非公開審議会

◇最終改革案づくり

4月23日 担当者会議

◇女性民教審案に対する外部意見の検討

5月2日 担当者会議

◇大学問題

5月11日 第43回非公開審議会

◇最終改革案づくり

5月12日 第44回非公開審議会

◇最終改革案づくり

5月19日 世話人会

◇最終改革案づくり

5月26日 担当者会議

◇《最後の集い》打ち合わせ

6月2日 第45回非公開審議会

◇《最後の集い》リハーサル

6月11日 第46回非公開審議会

◇《最後の集い》リハーサル

6月13日 第21回公開審議会（最後の集い）

◇女性民教審最終教育改革提言の発表

表

7月1日 《6月13日の集い》の反省と今後

のすすめ方について



新しい家庭科 We の 仲間になって下さい

あなたの中にどっかと居す
わっている古い家庭科に別れ
を告げて、さあ、新しい家庭
科を共に創りましょう！

自立した男と女を、人間ら
しい生活を、差別のない社会
を願う人の輪を広げましょう

★We バックナンバーのご案内★

- 〈vol.1〉 〈vol.2〉 (品切れ)
 〈vol.3〉 11月号 “病む”ということ
 2・3月号 “育てる”ということ
 〈vol.4〉 4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 10月号 いま、熱く女の時代
 11月号 みよりの秋に
 12月号 人間と土を生かす
 85年冬増 自分らしさをこそⅡ
 1月号 暮らしの文化を探る
 2・3月号 水はいのちの泉
 〈vol.5〉 4月号 幼い日一大人は
 忘れてしまった
 5月号 子ども一大人の勝手な思い込み
 6月号 “いじめ”-その根っこは何が？
 7月号 性一少・中・高校生は何を思う？
 86年夏増 こどもたちへ大人になる旅
 8・9月号 親一いま、学校に何ができる？
 10月号 家庭科一いま新しい地平に立つ
 11月号 家庭科一どう変える、どう変わる
 12月号 平和一今年を顧みる
 86年冬増 自分らしさをこそⅢ
 1月号 女性一世界を変え得るか
 2・3月号 明日一人はみな成熟に向かって
 〈vol.6〉 4月号 先生は悩んでいる
 5月号 情報化社会の光と影
 6月号 学校給食で論争しよう
 7月号 「制服」着る・着せられる
 8・9月号 「原発」知らなくていいのか

◆PTAに身を置いて感じること。同じ親という立場で学校にかかわりながら、利害を共有していくことが難しい。個別の利害と都合だけで終始して、行事をこなす上ではこまらないうで、教育改革なんて大それた考えは、思いもよらない——なんて、いつまでも傍観者然とはしてられないですね。先輩の方々の示して下さった勇氣、うけ継いで行くのは、私たち自身ですものね。

(青木)

◆生まれた家に住み続けて教職に就く——私が大人から期待されていた像である。この頃の閉塞感は辛かった。今の子供たちもこんな思いではないかしら。安全ではあるが、選択権も拒否権もない生き方には、希望も喜びもない。今回の提言では学校をもっと人間らしく生きる場にしようとしている。人間性を復活させるために働いてくれた人々がいた。ありがとう、感謝を行動で表したい。(中野)

◆事務局の方八人が集まったの座談会は、夕方から始まり、延々三時間半。民教審の最後の集いを間近に控えた忙しい時なのに、なんと生き生きと自分の思いや自分がしてきたことを語られたことか。メンバーと共に「提言」を作りあげていく中で、事務局の方はそれぞれ自分の力を鍛えあげていらつしやる。運動の大きさを感ずる。同席した私は「提言」プラスαをいたした。ありがとう。(馬場)

◆自分を愛えず、自分を開きもせず、傷つかぬようしつかりガードした上で、批判のみ達者に述べる。同類群れたがる——そんなこんなに飽き、疲れていた私。女性民教審のメンバーとして二年余りのハードな日々、ヘトヘトになりながら、ここから活力を得たのは、自分たちで教育改革提言を創る営みだったからだ。受身から脱け出し、自ら対案のつくり手になった女たちの息づかい満ちた本号を、誇りをもって世に贈る。(平田)

新しい家庭科一

Vol. 6 No. 6 1987年 7月20日発行
 ￥700(年間購読料・増刊号含 ￥6700)
 編集兼発行人 / 半田たつ子

発行所 / (有) ウイ 書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所 / (有) 岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

見せかけの豊かさと裏腹に、人間がおとしめられているいま
生きる力を育むはずの教育が病んでいます。

みずみずしいのちを自ら絶つ子どもたちに衝撃を受けるあなた
人間が生きるに値する世を、どうしたら創ることができると、歎息をつくあなた
人間に値するくらしを創る力を、どうしたら育むことができるかと、思い惑うあなた
ウイ書房が心をこめて世に贈る六冊から、
あなたは、きつと貴重な手がかりを得ることでしょう。

〈日本図書館協会選定図書〉〈全国学校図書館協議会選定図書〉

家庭科新時代 ― Weからの提案 ―

●A5判／300頁 ●定価2000円／1600円

半田たつ子 編

若いいのちの像 すがた ― 私のカウンセリング入門 ―

●B6判／224頁 ●定価1300円／1150円

児玉澄子 著

〈全国学校図書館協議会選定図書〉

男女で学ぶ新しい家庭科 ― 京都における 歩めと実践 ―

●B6判／224頁 ●定価1300円／1150円

森 幸枝 著

〈全国学校図書館協議会選定図書〉

私塾霞国語教室風景 もしかしたらちいさなじゅくはユートピア

●変型判／208頁 ●定価1700円／1450円

武田秀夫 著

子どもつて不思議 ― 学びことは生きること ―

●B6判／224頁 ●定価1300円／1150円

長谷川 孝 著

人間つて不思議 ― 一つの視角 ―

●四六判／344頁 ●定価1500円／1300円

半田たつ子 著